

目次

はじめに	2
取組概念図	4
実施体制	6
年次計画	7
組織	8
I 取組全体の概要	9
II 2013（平成25）年度の取組の概要	17
III 関西大学ライティングラボの取組	23
IV 津田塾大学ライティングセンターの取組	39
V eポートフォリオシステム開発部会の取組	57
VI 教職員合同FD・SD研修会、TA合同研修会	73
VII シンポジウム報告	105
VIII 海外視察調査報告	129
IX 国内視察報告	141
X 研究成果報告	159
XI 取組に対する評価と今後の課題	173

はじめに

文部科学省の2012（平成24）年度大学間連携共同教育推進事業において、津田塾大学と関西大学が申請した取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」が採択されました。本事業は、2012（平成24）年度より5年間かけて実施します。両大学が多様なステークホルダーと密接に連携しながら、総合的なライティング／キャリア支援の構築をはかり、学士課程教育の質的転換と有為な人材育成に欠かせない、〈考え、表現し、発信する力〉を育成していきます。

これまで関西大学は「学の実化（じつげ）」、すなわち学理と実際の調和を学是とし、高い専門的学識を修めつつ、その学識を実社会において役立てることのできる人材の育成に努め、商都大阪に位置する大学にふさわしい、社会の発展を力強く牽引する役割を担ってきました。2009（平成21）年に公表された長期行動計画では、この学是を現代的に捉えなおし、本学の使命を「考動力あふれる人材」の育成と位置づけています。関西大学では、このような「考動力あふれる人材」の育成を目指し、それにふさわしい教育プログラムの開発実践に努めてきました。今回の連携取組で育成を目指している〈考え、表現し、発信する力〉とは、まさに自らの頭で自主的によく考え、自立的かつ積極的に行動する「考動力」の源となる力だといえるでしょう。

関西大学では、このような教育理念の下で、現代GP、教育GP等の優れた教育手法の実践に取り組んできました。2010（平成22）年には、関西大学文学部の申請した文部科学省大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム「文学士を実質化する〈学びの環境リンク〉—卒論ラボ・スケール・カードの有機的な連携による“気づき”を促す仕組み作り—」が採択されました。この取組は、卒業論文作成を核に、文学士教育の環境整備を目指すものであり、その取組の中で、アカデミック・ライティング支援のために開設した「卒論ラボ」の名称を、2012（平成24）年度からは、「ライティングラボ」に改め、支援対象を全学に拡大しています。今回の連携事業では、このライティングラボを、ライティング／キャリア支援という新たな理念の下にさらに進化させ、現代社会のニーズに適合した発展をさせていきます。

取組2年目となる平成25年度は、取組の中心的役割を果たすライティングセンターの支援体制がさらに充実し、授業との連携や作文コンテスト等の実施により、利用者も着実に増加しています。さらに、支援を効果的にサポートするeポートフォリオや評価指標などのツールの開発も鋭意進めております。今後も、両大学はステークホルダーと密接に連携しながら、効果的な支援システムを構築し、全国に普及させていくよう努めてまいります。

平成26年3月
事業推進代表者
関西大学学長 楠見 晴重

津田塾大学は「個性を重んじる少人数教育と高度な英語教育により、高い専門性と豊かな教養を身につけたオールラウンドな女性を育てる」という教育理念のもとに「書く力」を養う教育を伝統的に重視して参りました。

2008（平成20）年度には、文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」に採択された「社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から」の取組により、学生の「書く力」を総合的に養成していく場としてライティングセンターを設立しました。以来、学生一人ひとりの「書く力」を磨くために個別指導を行うほか、キャリア世界についての理解を深めるべく様々な分野で活躍する専門家を講師とする講座を開催するなど、多様な角度から学生のコミュニケーション能力の向上をはかり、社会に貢献し、リーダーシップを発揮できる人材の育成に尽力し続けております。

関西大学と実施する大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」も2年目を迎え、ますます活動の幅を広げています。本取組の趣旨を広く公開するとともに、海外におけるライティング支援の事例を紹介すべく2013年8月に津田塾大学で開催された両大学主催のシンポジウム「日本の大学教育におけるライティングセンターの可能性—米国の先進事例をふまえて」での議論の様子は、「平成24年度私立大学教育研究活性化設備整備費補助金」により設置されたTV会議システムにより、リアルタイムで関西大学でも視聴していただきました。また、教職員合同FD／SD研修会・TA合同研修会を開催し、「考える力」を養うために「書くこと」を重んじる初年次教育のあり方や、大学教育におけるライティングセンターやピア・チュータリングの重要性について、教職員、TAに学び合いの機会を提供しました。ライティングセンター設立以来行っている「書くということと私」講演会においては、広報の仕事を通して社会に貢献してきた女性、視覚障がいを持ちながら日本語でエッセイを書いた外国人の大学院生など、「書く」ことで社会に大切なメッセージを発信し、インパクトを与えてきた方々を講師に迎えて好評を博しました。さらに「女性のリーダーシップから学ぶ」講演会においては、ジャーナリズムの世界で活躍する女性、マスコミから国際機関にわたる広い分野で指導的役割を果たしてきた女性を招き、将来のロールモデルともなるリーダーから直接に学びを得る機会を学生たちに提供しました。ライティングセンターの個別相談は、近年、アカデミック・ライティングの分野においていっそうの活況を呈しています。

今後も、津田塾大学は「ライティング支援」と「キャリア支援」を融合しつつ、さらに幅広い発信力の涵養に努めて参ります。関西大学との密接な連携のもと、より効果的なプログラムを展開することによって、21世紀の男女共同参画社会を推進する人材を育成したいと存じます。

平成26年3月
連携校
津田塾大学学長 國枝 マリ

取組概念図

学士課程教育の質的転換と有為な人材育成のために欠かせない〈考え、表現し、発信する力〉の育成を、学生のキャリア形成を視野に入れた総合的なライティング支援（ライティング／キャリア支援）を通して実現する。そのために、関西大学・津田塾大学・ステークホルダーが密接に連携して、ライティングセンターを核にした効果的な支援システムを構築し、全国に波及させていく。

取組内容

1 ライティングセンターを中心とした支援体制の再構築

- ライティングセンターの拡張と充実
- TAとピアサポートによる支援体制の整備
- 教職員FD、講演会、セミナーの実施

2 eポートフォリオシステムの開発

- すべての取組を一つに結ぶライティング／キャリア支援 eポートフォリオシステムの開発

3 評価指標の確立

- 客観的評価指標の確立
- 自己評価指標の確立

4 カリキュラムとの連携

- ライティング／キャリア支援を意識した新タイプの授業開発

5 社会との連携

- 高大連携
- 産学官連携

ライティング／キャリア支援とは…

学生のキャリア形成を視野に入れたライティング支援

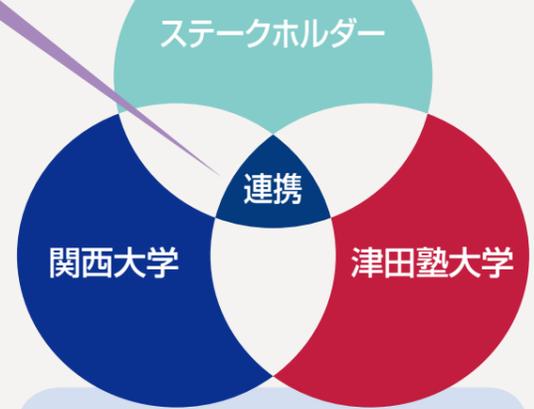


成果

「主体的学び」の確立による大学教育の質的転換
主体的に考えると同時にコミュニケーションを形成・深化しうる人材の育成

達成目標

- 1 ライティングセンター利用者数の増加
- 2 評価指標に基づいた客観的評価値の上昇
- 3 シンポジウム参加大学の増加
- 4 eポートフォリオシステム利用大学の増加



GPIによりライティング／キャリア支援に取り組んできた両大学の個性と強みの融合

社会の声を代弁する多様なステークホルダーからの要請

〈考え、表現し、発信する力〉を備えた人材の育成

学会：The Writing Centers Association of Japan
ライティング支援を大学教育で機能させる

教育委員会：伊丹市教育委員会
ライティング支援を初等中等教育で活用

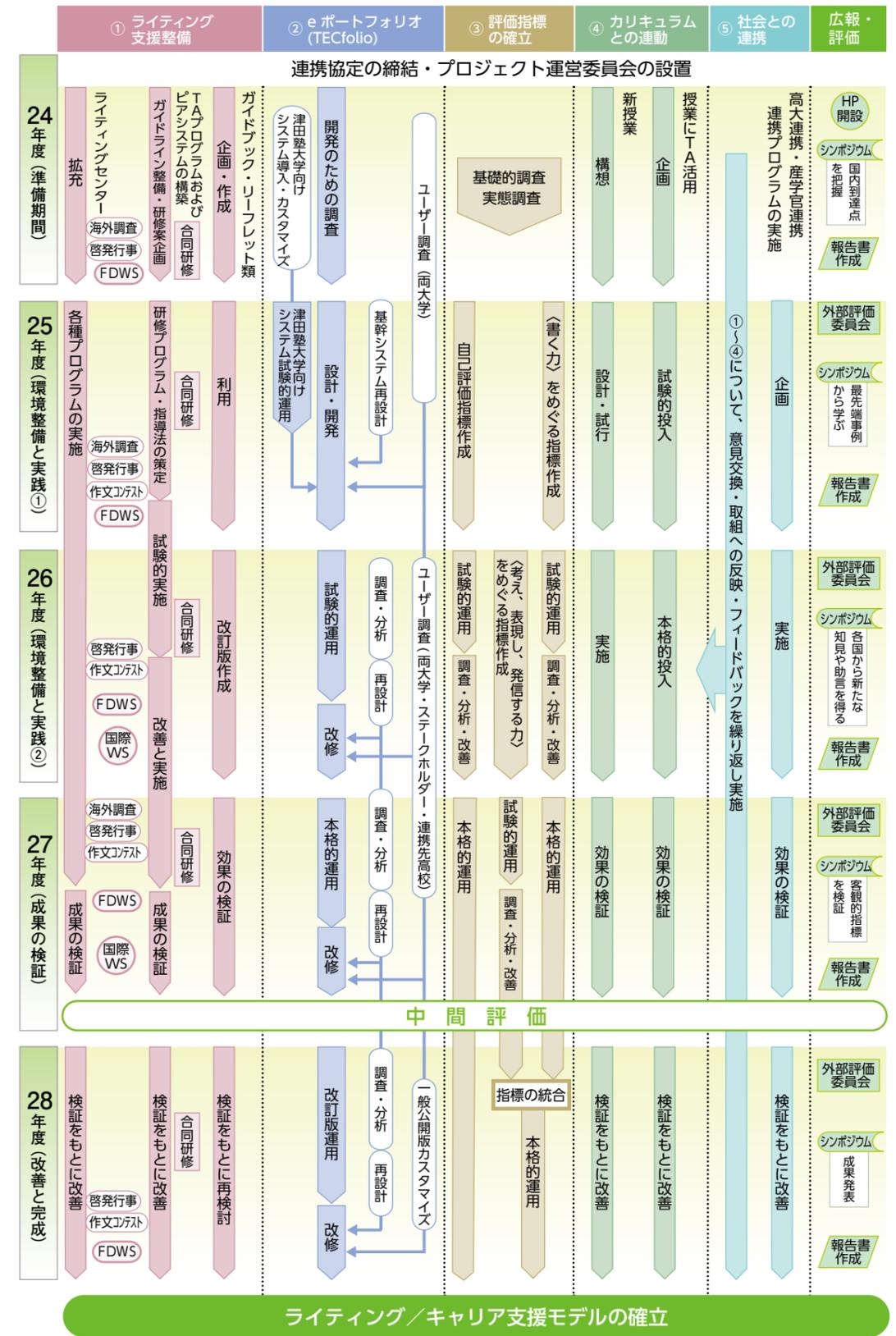
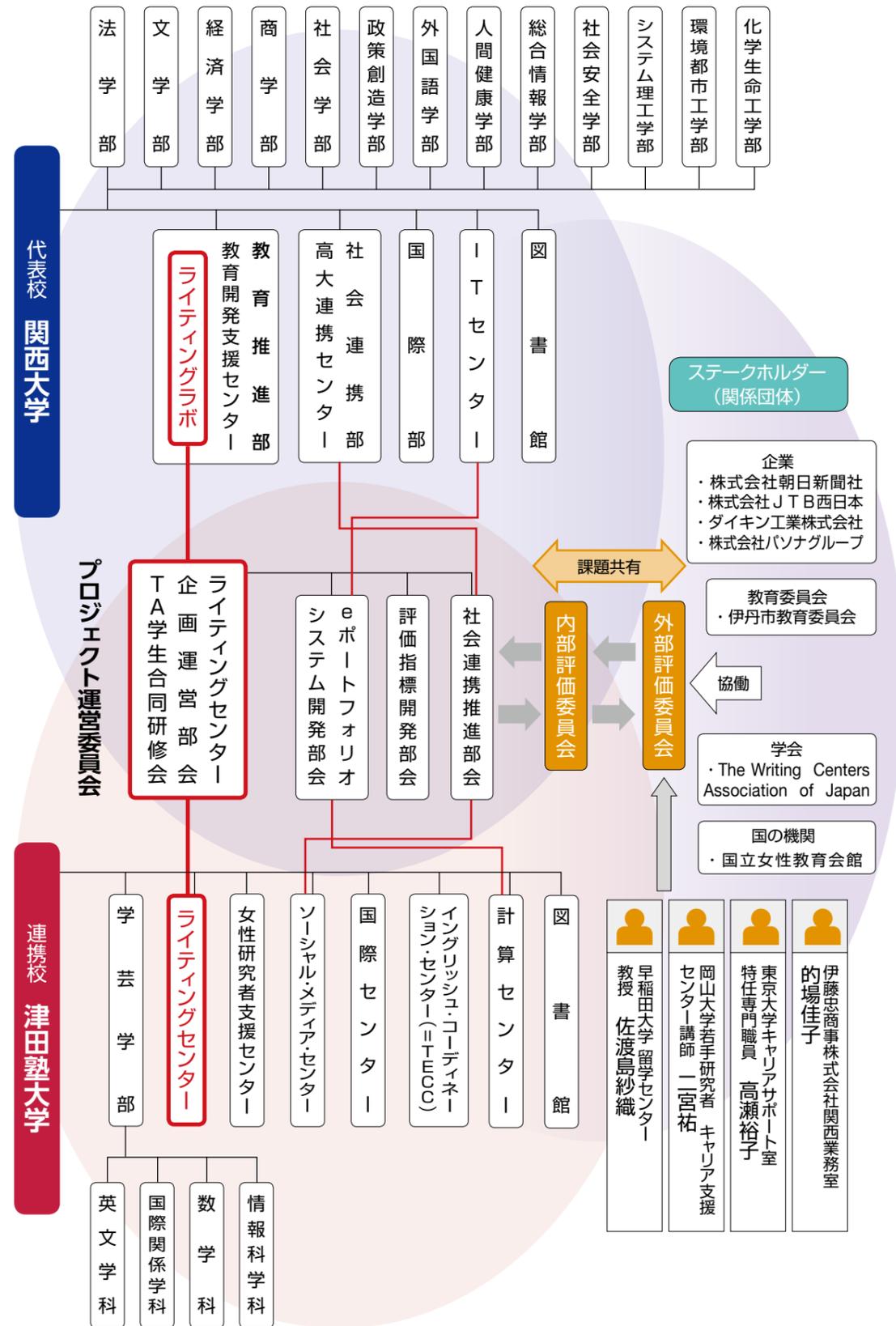
国の機関：独立行政法人国立女性教育会館
男女共同参画社会を推進する人材の育成

企業：株式会社朝日新聞社、株式会社JTB西日本
ダイキン工業株式会社、株式会社パナソニックグループ
これからの社会に貢献できる有為な人材の育成

日本社会で立ち遅れているライティング／キャリア支援システムの構築

波及

ライティング／キャリア支援モデル



組織

事業推進代表者	楠見晴重（関西大学学長）
事業推進責任者	林宏昭（関西大学副学長）
取組責任者	関西大学： 中澤務（文学部教授） 津田塾大学：田近裕子（学芸学部教授）
プロジェクト運営委員会	関西大学： 中澤務（文学部教授）、本村康哲（文学部教授）、 新井泰彦（システム理工学部教授）、池田佳子（国際部准教授）、 岩崎千晶（教育推進部助教）、林田定男（教育推進部特別任用助教）、 小林至道（教育推進部特別任用助教）、西浦真喜子（教育推進部特別任用助教）、 長畑俊郎（システム開発課）、萩原恒夫（授業支援グループ）、 仁村万喜子（授業支援グループ）、竹中喜一（授業支援グループ）、 宮田将（授業支援グループ） 津田塾大学：田近裕子（学芸学部教授）、高橋裕子（学芸学部教授）、大島美穂（学芸学部教授）、 大原悦子（ライティングセンター特任教授）、 飯野朋美（ライティングセンター特任助教）、 杉崎和美（教務課）、片桐暁生（情報サービス課）
ライティングセンター企画運営部会	関西大学： 岩崎千晶（教育推進部助教）、中澤務（文学部教授）、池田佳子（国際部准教授）、 林田定男（教育推進部特別任用助教）、小林至道（教育推進部特別任用助教）、 西浦真喜子（教育推進部特別任用助教）、仁村万喜子（授業支援グループ）、 竹中喜一（授業支援グループ）、宮田将（授業支援グループ） 津田塾大学：田近裕子（学芸学部教授）、高橋裕子（学芸学部教授）、大島美穂（学芸学部教授）、 大原悦子（ライティングセンター特任教授）、 飯野朋美（ライティングセンター特任助教）、杉崎和美（教務課）、 片桐暁生（情報サービス部）
eポートフォリオシステム開発部会	関西大学： 中澤務（文学部教授）、本村康哲（文学部教授）、 小林至道（教育推進部特別任用助教）、中芝義之（学術情報事務局）、 鎌田正彦（システム開発課）、長畑俊郎（システム開発課）、 萩原恒夫（授業支援グループ）、 津田塾大学：田近裕子（学芸学部教授）、高橋裕子（学芸学部教授）、 小館亮之（学芸学部教授）、稲葉利江子（情報科学科特任准教授）、 大原悦子（ライティングセンター特任教授）、 飯野朋美（ライティングセンター特任助教）、片桐暁生（情報サービス課）
評価指標開発部会	関西大学： 中澤務（文学部教授）、林田定男（教育推進部特別任用助教） 小林至道（教育推進部特別任用助教）、西浦真喜子（教育推進部特別任用助教） 津田塾大学：田近裕子（学芸学部教授）、高橋裕子（学芸学部教授）、 大原悦子（ライティングセンター特任教授）、 飯野朋美（ライティングセンター特任助教）
社会連携推進部会	関西大学： 新井泰彦（システム理工学部教授）、林田定男（教育推進部特別任用助教）、 小林至道（教育推進部特別任用助教）、西浦真喜子（教育推進部特別任用助教） 津田塾大学：田近裕子（学芸学部教授）、高橋裕子（学芸学部教授）、 大原悦子（ライティングセンター特任教授）、杉崎和美（教務課）
自己点検・評価委員会	関西大学： 中澤務（文学部教授）、林田定男（教育推進部特別任用助教）、 小林至道（教育推進部特別任用助教）、西浦真喜子（教育推進部特別任用助教） 津田塾大学：田近裕子（学芸学部教授）、高橋裕子（学芸学部教授）、大島美穂（学芸学部教授）、 大原悦子（ライティングセンター特任教授）
内部評価委員 外部評価委員	内部評価委員：山本雄二（関西大学社会学部教授）、来住伸子（津田塾大学情報科学科）、 トム・ガリー（東京大学教授・The Writing Center Association of Japan 代表）、 春名潤一（伊丹市教育委員会） 外部評価委員：佐渡島紗織（早稲田大学留学センター教授）、 二宮祐（岡山大学若手研究者キャリア支援センター講師）、 高瀬裕子（東京大学キャリアサポート室特任専門職員・産業カウンセラー・ キャリアコンサルタント）、的場佳子（伊藤忠商事株式会社関西業務室）
事務担当	関西大学： 萩原恒夫（授業支援グループ）、仁村万喜子（授業支援グループ）、 竹中喜一（授業支援グループ）、宮田将（授業支援グループ）、 吉崎裕子（授業支援グループ） 津田塾大学：杉崎和美（教務課）

I

取組全体の概要

本取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」は、2012（平成24）年度から2016（平成28）年度まで、5年間にわたり事業が展開される。

この章では、5年間にわたる連携事業の取組の理念、具体的な取組内容、取組の体制と実施計画などを中心に、その全体像をまとめる。

1. 連携取組の背景
2. 連携取組の目的
3. 連携取組の達成目標
4. 連携取組の成果と波及
5. ステークホルダーとの連携
6. 具体的な取組内容
7. 実施計画
8. 実施体制
9. 評価体制

1. 連携取組の背景

2012（平成24）年度大学間連携共同教育推進事業において採択された「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」は、学士課程教育の質的転換と有為な人材育成のために欠かせない〈考え、表現し、発信する力〉を培うためのライティング／キャリア支援体制を、ライティングセンター整備を核にして、総合的に構築する取組である。まず、このような取組が生まれた背景ならびに取組戦略を説明する。

日本は現在、構造変化とグローバル化の渦中にあり、自律した個の確立、男女共同参画社会の推進、生涯学習の拡大などを通じた、持続的で活力ある社会の実現が模索されている。このような社会を作るために必要なのは、世代・立場・性差を超えたコミュニケーションを基盤に、主体的に考え行動し、生涯学び続けていくことのできる人間、すなわち、〈考え、表現し、発信する力〉を備えた人間である。

このような人材の育成を進めていくために、我々は、大学の大衆化に対処し、先進的な海外の取組を参考にしつつ、新しい支援体制を構築していかねばならない。このような観点から、たとえば、日本に先んじて大学の大衆化が進んだ米国での取組を見ると、ライティングセンターの役割が目される。ライティングセンターは、学部教育の全段階における豊かな学生支援の核となってきたからである。現在でも米国のライティングセンターは進化し続けており、学生に対して様々な知的支援を行っている。

他方、日本では、このような取組は始まったばかりであり、いまだ十分に効果的なシステムを実現できていない。そこで、先行する諸外国の成果を取り入れてシステム整備を行ない、効果的な教育を実現することによって、わが国で求められている学士課程教育の質的転換を実現するとともに、社会に求められる〈考え、表現し、発信する力〉を備えた人材を育成していくことが可能となる。このような育成支援システムの構築を求める社会的声は、日本の中にも潜在的に存在している。そこで、本連携取組においてステークホルダーと密接に協働し、連携の輪を作ることによって、大きな社会的声を作り出していくことができる。

関西大学と津田塾大学は、以上のような共通認識に立ち、それぞれの理念と方法に基づいたライティング支援に取り組んできた。本連携取組では、両大学が持つ個性と強みを融合させ、日本の大学教育の環境の中で有効に機能しうる「ライティング／キャリア支援システム」を構築する。

2. 連携取組の目的

大学での学びの場を中心に発揮されるライティングの力には、多様な知的能力が分かちがたく統合されている。そこには、資料を検索し読解する力、データを分析し総合する力、自分の見解を論理的に考え表現する力、発表して相手に伝える力、相手とコミュニケーションをとり相互理解を形成する力など、多様な能力が組み込まれている。そのような総合的な知的能力が、〈考え、表現し、発信する力〉である（図1参照）。この力は、大学で学んでいくために不可欠な力であるが、同時に、社会の中でコミュニケーションを形成し、主体的に考え生きていくために不可欠な力でもある。それは学生の人生全体において必要なものであり、その育成は、大学におけるキャリア支援の要になるものといえる。このようなキャリア支援と密接に結びついたライティング支援が、「ライティング／キャリア支援」である。本連携取組では、このようなライティング／キャリア支援によって実現される、以下の二つの大きな目的を設定している。



図1: 〈考え、表現し、発信する力〉

①主体的学びの確立による大学教育の質的転換

ライティングセンターが授業カリキュラムと密接に連携し、個々の学生のニーズに対応したきめ細かいサポートを行うことによって、学生の主体的態度が促進され、学習時間の増加を促す。これによって、学士課程教育の質的転換が容易となる。

②主体的に考えると同時にコミュニケーションを形成・深化しうる人材の育成

ライティング／キャリア支援の充実により、〈考え、表現し、発信する力〉が培われ、社会に求められる多様な能力が育成されていく。それは、学生のキャリア形成を促し、社会の中で主体的に考えると同時にコミュニケーションを形成・深化しうる人材の育成につながる。

3. 連携取組の達成目標

本連携取組では、利用学生の増加に加え、客観的指標を用いた実質的な能力向上を目指している。具体的に設定している目標は、次の通りである。

①ライティングセンターの利用学生の増加

関西大学のライティングラボと津田塾大学のライティングセンターの延べ利用者数（eポートフォリオ利用者やセミナー参加者を含む）を順次増加させていく。現段階での利用者は、両大学あわせて、全学生数の7%程度であるが、これを支援期間最終年度までに、全学生数の15%にまで伸ばすことを目標とする。

②評価指標にもとづく客観的評価値の上昇

本連携取組で作られる評価指標（ルーブリック）を用いて、その運用が開始される平成26年度以降、客観的評価を実施し、その評価値を上昇させる。

③シンポジウム参加大学数の増加

本連携取組のシンポジウムの参加大学数を、25校程度に増加させる。

④eポートフォリオ利用大学の増加

本連携取組で開発されるeポートフォリオシステムの利用大学数を、10校程度に増加させる。

4. 連携取組の成果と波及

本連携取組の取組成果として、総合的なライティング／キャリア支援の支援体制整備が実現し、上記の目標①「主体的学びの確立による大学教育の質的転換」、および目標②「主体的に考えると同時にコミュニケーションを形成・深化しうる人材の育成」が達成されることになる。

また、本連携取組では、整備されるライティング／キャリア支援体制を、取組終了後に他大学にも提供し、取組成果を全国に波及させていく予定である。そのため、支援期間中に体制維持と全国的普及を目的とした連合組織をつくり、支援期間終了後も引き続き連携協力を続けながら、支援体制の維持・改善と具体的効果の向上を目指すとともに、全国への普及を図っていく（図2）。

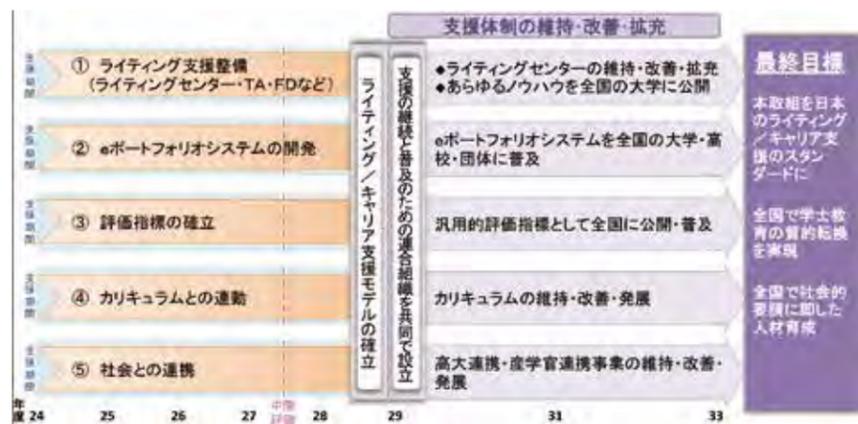


図2：支援期間終了後も含めた全体の計画

5. ステークホルダーとの連携

本連携取組では、社会の声を代弁するステークホルダーとの課題共有と協働が不可欠である。本取組では、ライティング／キャリア支援に関わる多様な団体と密接に協力して社会的要請を受け止めるとともに、取組を社会全体に波及させていく（表1）。

表1 ステークホルダー一覧

関係団体等	連携	要請	具体的な取組
学会 The Writing Centers Association of Japan	ライティング支援機能の体系化・普及	ライティング支援を大学教育で機能させる	国際共同シンポジウムの開催
教育委員会 伊丹市教育委員会	初等中等教育での書く力の強化	ライティング支援を初等中等教育で活用	・評価指標の協働開発 ・コンテスト共催
国の機関 国立女性教育会館	男女共同参画社会を実現	男女共同参画社会を推進する人材の育成	男女共同参画セミナー等の実施
企業 株式会社朝日新聞社、株式会社JTB西日本、ダイキン工業株式会社、株式会社リノア	社会の構造変化に適應し、グローバル化の中を生き抜く	これからの社会に貢献できる有為な人材の育成	社会連携推進部会への参画による共同授業の開発、連携事業の実施

6. 具体的な取組内容

本連携取組の取組内容は、以下の5つの柱からなる。

①ライティングセンターを中心とした支援体制の再構築

(a) ライティングセンターの拡張と充実

関西大学のライティングラボと津田塾大学のライティングセンターの運営システムと具体的活動を、本連携取組の趣旨・目的に合致するように、拡張と充実を図る。具体的には、次のような事業を実施する。

- 運営体制を変更し、新たな組織を作る。
- 支援内容を拡充し、アカデミック・ライティング以外の文書の指導、メール・パワーポイント・レジュメ等の指導、社会における多様な文書作成・プレゼンテーション支援などを実施する。
- すでに両大学で啓発行事として実施している講演会・セミナーを共同実施し、書くことへの動機づけとキャリア支援につなげる。
- 〈考え、表現し、発信する力〉の育成のための、「思考力向上プログラム」「発信力向上プログラム」などを新たに実施する。
- 新たに英語ライティング支援を実施し、留学や就職に必要な英語でのコレスポンス力の向上を図る。
- 自己発信支援として、すでに津田塾大学で実施している作文コンテストに加え、関西大学で新たな作文コンテストを企画・実施する。

(b) TA とピアサポートによる支援体制の整備

TA（チューター）の指導レベルの向上と維持を図るために、これまでの研修方法を再検討・再構築し、新たな合同研修を実施する。また、学部生によるピアサポート体制を整える。

(c) 教職員のためのFDの実施

教員を対象とした合同FD、職員を対象とした合同SDを実施する。また、国際ワークショップを開催して技能の向上に努める。

(d) 各種リーフレットの作成

ガイドブックやリーフレットを共同で作成し、利用する。

②eポートフォリオシステムの開発

ライティング／キャリア支援に特化した新たなWEB支援システム(eポートフォリオシステム)を開発する(「TECfolio」と仮称)。このシステムは、従来のeポートフォリオにはない、ミクロ(作成過程)・ミドル(学修成果)・マクロ(学修成果の蓄積)の三段階における記録を、ライティングを中心に整理することを特徴とし、学修記録の蓄積だけでなく、パーソナルポートフォリオとして、就職活動などにも活用できるものであり、関西大学と津田塾大学が共同開発し、全国への普及を図る(図3)。



図3 TECfolio 概念図

③評価指標の確立

(a) 客観的評価指標の確立

ライティング力の向上、およびそこから広がる多様な力の向上を客観的に測るための評価指標（ルーブリック）を作成し、支援に活用する。

(b) 自己評価指標の確立

自己の学びを振り返ることで学生に気づきを促すための総合的な自己評価指標を作成し、支援に活用する。

④カリキュラムとの連動

本取組に密接に関わる授業の内容を改善し、ライティングセンターとの密接な連携のもとで運営する。また、本取組の趣旨に即した新しい授業を増やしていく。

⑤社会との連携

高大連携のプログラムなどを有効に活用し、セミナーや講演会を実施する。また、評価指標の作成において、教育委員会等と密接な連携協力を行なう。また、ステークホルダーと密接に連携して、様々な具体的事業に取り組む。

7. 実施計画

5ヵ年間の年次計画については、7ページに掲載してある。計画は、本連携取組の5つの柱ごとに計画されているが、いずれについても、初年度の2012（平成24）年度を「準備期間」、その後の2013（平成25）・2014（平成26）年度を本格的な事業展開の期間「環境整備と実践①②」と位置づけている。ここまでの取組において一定の成果を挙げる予定である。続く4年目の2015（平成27）年度は、それまでの成果を実践し、その効果を検証する期間「成果の検証」と位置づけられる。そして、最終年度の2016（平成28）年度は、前年度の検証をもとに、システム全体にわたる改善を重ねた上で、ライティング/キャリア支援システムの確立を目指す「改善と完成」の期間と位置づけられる。

なお、これらに平行し、毎年シンポジウムを実施し、年度ごとの成果を報告書にまとめる。また、外部評価についても、2年目の2013（平成25）年度以降、毎年実施する。

8. 実施体制

実施体制については、6ページの実施体制図に示してある。実施主体として連携取組全体を統括するのは、関西大学と津田塾大学が共同で設置する、「プロジェクト運営委員会」である。プロジェクト運営委員会の中には、四つの部会が設置されている。そのうち、活動の中心を担うのは「ライティングセンター企画運営部会」である。この部会は、両大学のライティングセンター運営担当者のほか、TAの代表も含み（「TA学生合同研修会」）、両大学のライティングセンターは、この部会の統括下で運営される。そのほか、取組の中でライティングセンター以外の特設取組を担う組織として、「eポートフォリオ開発部会」、「評価指標開発部会」、「社会連携推進部会」の三つの部会を設置している。現在のプロジェクト運営委員会の構成については、8ページに示してある。

なお、これらの部会のうち、「eポートフォリオ開発部会」は、開発作業を円滑に進めるために、さらに、その中に二つのワーキンググループ（「要求仕様WG」・「設計WG」）設けている。

9. 評価体制

プロジェクト運営委員会内に「自己点検・評価委員会」を設置する。自己点検・評価委員会は、本連携取組の具体的な達成目標に関する数値をまとめ、プロジェクト運営委員会外の学内関係者およびステークホルダーから構成される内部評価委員会に報告する。内部評価委員会は、評価のための実施細目を策定し、自己点検・評価委員会の報告に基づき、事業内容を点検・評価し、改善を提案する。

さらに、早稲田大学の佐渡島紗織教授と、岡山大学の二宮祐講師、および、産業界からの委員2名からなる「外部評価委員会」を設置し、内部評価委員会の報告をもとに、取組成果を評価し、具体的な改善を勧告する。

なお、これらの評価はすべて取組ホームページを通じて情報公開するとともに、その詳細を報告書に掲載する。



図4：評価体制

II

2013（平成25）年度の 取組の概要

本取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」では、「準備期間」である2012（平成24）年度に続く2013（平成25）年度および2014（平成26）年度を「環境整備と実践」と位置づけ、本事業の本格的な環境整備と、それを駆使したさまざまな実践的取組を展開する。2013（平成25）年度は、その前半として、前年度の準備期間の成果を踏まえ、環境整備に取り掛かるとともに、ライティングセンターを中心としたライティング／キャリア支援を本格的に実施した。

この章では、本年度における具体的取組の内容を、取組主体となる委員会・部会の活動に即して報告する。

1. 本年度の位置づけ・実施事業の概要・活動成果の概要
2. プロジェクト運営委員会の活動概要
3. 各部会の活動概要

1. 本年度の位置づけ・実施事業の概要・活動成果の概要

5年間の連携事業の中で、本年度は「環境整備と実践①」に該当し、ライティング／キャリア支援の構築に向けた環境整備を行いながら、本取組の5つの柱のそれぞれについて、具体的な活動を展開した。(以下、その全体のまとめであるが、個々の取組成果の詳細については、各大学の取組成果報告をご覧ください。)

【平成 25 年度における実施事業および成果の概要】

[1] 本補助事業全体に関わる取組

取組項目	取組内容	取組成果
①本格的な取組パンフレットの作成	前年度に作成した取組パンフレットの内容を拡充した取組パンフレットを作成し、本取組の情報発信をより充実させる。	・3月に完成
②ホームページの充実	前年度に作成した取組ホームページの内容を拡充し、本取組の情報発信をより充実させる。	・本格的な取組ホームページを公開
③シンポジウムの開催	本事業の取組の内容をテーマとした連携シンポジウムを、ステークホルダーの協力のもとで開催し、本取組の内容を広く公表するとともに、ライティング／キャリア支援体制の必要性について啓発を行う。	・津田塾大学にて、8月3日に開催
④自己点検評価委員会・内部評価委員会・外部評価委員会による評価・改善	自己点検・評価委員会および内部評価委員会を開催し、事業内容の点検・評価・改善を行う。また、外部評価委員会による外部評価を実施する。	・12～3月にかけて実施
⑤取組報告書の作成	本年度の取組内容の報告書を作成し、本取組の点検・評価と改善に役立てる。	・3月に完成

[2] ライティングセンターの整備に関わる取組

取組項目	取組内容	取組成果
①TA (チューター) の募集・任用および研修	ライティング指導の主体となるTA (チューター)・SA (学部留学生を含む) を募集・任用し、指導のために必要な研修を実施する。	・両大学のライティングセンターで募集・任用し、研修を実施
②ライティングセンターのホームページの充実	ライティングセンターのホームページを充実させ、より効果的な利用ができるように改善する。また、ホームページを通して、ライティング支援に関わる情報公開等を行う。	・関西大学：ライティングラボのHPを新たに作成し、公開 ・津田塾大学：既存のHPを改修
③ライティングセンターにおけるライティング指導の実施	ライティングセンターの運用を本格化させ、TA (チューター) によるライティング指導を実施する。	両大学において実施
④ライティングセンターでの新企画の実施	メール、パワーポイントを使用したスライド作成、発表レジュメ作成、およびキャリア支援に関わる多様な文書作成を視野に入れた指導を、順次試行的に実施し、ライティングセンターの機能を拡張・充実させていく。さらに、「思考力向上プログラム」・「発信力向上プログラム」を企画し、実施に向けた準備を整える。また、英語ライティング支援やライティングカフェを試行的に実施していく。	・両大学において実施

⑤各種ガイドブック・リーフレットの作成	ライティングに関するガイドブック・リーフレットを利用し、ライティング指導を実施する。	・両大学のライティングセンターにおいて、実施
⑥TA (チューター) の研修プログラムの策定	TA (チューター) の効果的な研修プログラムと指導法を再検討・再構築し、指導ガイドライン、指導マニュアルを試行的に作成する。	・両大学で検討中
⑦TA (チューター) 合同研修の実施	TA (チューター) 合同研修をステークホルダーと協力して実施し、TA (チューター) の指導力の向上を図るとともに、研修プログラムの内容改善を行う。	・8月3日(土)・4日(日)にTA合同研修会を実施
⑧教職員合同FD・SDの実施	教職員合同FD・SDワークショップを企画・実施し、教職員の能力向上を図る。	・8月4日に津田塾大学、12月14日に関西大学で実施
⑨啓発行事 (講演会) の実施	ステークホルダーと協力して、ライティングおよびキャリア支援をテーマとした講演会を開催し、学生の啓発を図る。	・各大学で数回実施
⑩共同して作文コンテストを実施	関西大学は、ステークホルダー (伊丹市教育委員会) と協力して、作文コンテストを企画・実施し、学生の自己発信の支援を行う。津田塾大学は「高校生エッセー・コンテスト」を実施し、高大連携を推進する。	・各大学で作文コンテストを実施
⑪海外視察、調査、研修の実施	米国を中心に海外のライティングセンターの取組を視察し、海外での先進的なライティング支援について実地での調査、研修を行い、本取組での支援体制の改善に反映させる。	・10月にシカゴ、シアトルを中心に海外視察を実施
⑫他大学のライティングセンターの運営とライティング支援に関する国内調査の実施	国内の他大学で運営されているライティングセンターを訪問し、運営や学生指導に関する実地調査を行ない、その現状と問題点を明らかにする。	・他大学の視察を数回実施

[3] eポートフォリオの開発に関わる取組

取組項目	取組内容	取組成果
①eポートフォリオシステム開発のための調査の実施と、設計のための要件定義	eポートフォリオシステムの開発に向け、前年度からの調査を引き続き実施する。さらに、調査をもとに、設計・開発のための要件定義を行う。	・eポートフォリオ開発部会において、実施中
②eポートフォリオシステムの開発	要件定義に基づき、eポートフォリオシステムの設計・開発を行う。	・基本機能を開発

[4] 評価指標の策定に関わる取組

取組項目	取組内容	取組成果
①ライティングをめぐる評価指標に関する調査	ステークホルダーと連携して、海外における実態調査、研究文献の調査、学生に対するアンケートの実施等の基礎的調査と実態調査を、前年度に引き続き実施する。	・調査を実施
②ライティング力を測るための客観的評価指標の作成	調査結果に基づき、ライティング力を客観的に測るための評価指標を試行的に作成する。	・調査をもとに、試行版を作成中
③ライティング力の向上を自己評価するための自己評価指標の作成	調査結果に基づき、ライティング力を学生が自己評価するための自己評価指標を試行的に作成する。	・調査をもとに、試行版を作成中

[5] 教育カリキュラムとの連動に関わる取組

取組項目	取組内容	
①既存授業の内容改善	「文章力をみがく」(関西大学)、「日本語ライティング」(津田塾大学)などの既存の授業について、ライティングセンターの活用のあり方、TA(チューター)の活用のあり方等の検討を引き続き行う。	・ 検討を実施
②ライティングセンターと連携した授業の試行的実施	モデルクラスを選び、ライティングセンターとの連携を試行的に実施する。	・ 春・秋学期の授業において、数クラスと連携
③新しい学生参加型授業、ステークホルダーとの共同授業等の試行的実施	アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた学生参加型の新しい授業を企画し、試行的に実施する。また、ステークホルダーと連携して共同実施する授業を企画し、試行的に実施する。	・ 既存の授業の中で、試行的に実施

[6] 社会連携に関わる取組

取組項目	取組内容	
①高大連携による啓発行事の実施	高大連携に関して、ステークホルダー(伊丹市教育委員会)と連携して各種の啓発行事を実施すると共に、新しい高大連携の企画を実施する。	・ 作文コンテスト、出張セミナー等を実施
②ステークホルダーとの連携企画の実施	社会連携に関して、ステークホルダーとの連携企画を実施する。	・ 企画中

[1] [2] [5] については、当初予定していた取組項目の大部分について、すでに実施済か実施中であり、年度中に大部分の取組は完了する見込みである。当初予定していた通りの、あるいはそれ以上の取組成果が得られたと考えている。

[3] [4] [6] についても着実に成果を上げているが、取組を次年度に継続するものもある。

2. プロジェクト運営委員会の活動概要

昨年度に引き続き、「プロジェクト運営委員会」を、ほぼ月1回のペースで、TV会議によって開催し、重要案件を審議した。開催の日時および議事内容については、以下の通りである。

2013 (平成 25) 年度 プロジェクト運営委員会開催記録 (4 ~ 12月)

回	日時	主な議事内容
1	2013年4月3日(水) 9:00-10:30	・ 実績報告書について ・ プロジェクト運営委員会の組織構成について ・ 内部評価委員会と外部評価委員会について ・ 今年度の事業について
2	2013年5月15日(水) 9:00-10:10	・ プロジェクト運営委員会の組織構成について ・ 内部評価委員会と外部評価委員会について ・ 今年度のeポートフォリオ関係の事業について ・ 本連携取組のホームページについて ・ 海外視察について ・ シンポジウムについて

3	2013年6月5日(水) 9:00-10:10	・ 本連携取組のホームページについて ・ 海外視察について ・ シンポジウムについて ・ FDワークショップについて
4	2013年7月3日(水) 9:00-10:20	・ 本連携取組のホームページについて ・ 海外視察について ・ シンポジウムについて ・ 今年度のeポートフォリオ関係の事業について
5	2013年8月4日(日) 13:50-14:50	・ 海外視察について ・ FDワークショップについて ・ eポートフォリオについて
6	2013年9月18日(水) 12:00-13:00	・ 海外視察について ・ FDワークショップについて ・ eポートフォリオについて
7	2013年10月30日(水) 9:00-10:15	・ 海外視察報告 ・ 取組パンフレットについて ・ eポートフォリオについて
8	2013年12月4日(水) 9:00-10:30	・ 内部評価委員会、外部評価委員会について ・ 取組パンフレットについて ・ 今年度の成果報告書について ・ FDワークショップについて ・ eポートフォリオについて
9	2014年1月15日(水) 9:00-10:00	・ 内部評価委員会、外部評価委員会について ・ 取組パンフレットについて ・ 今年度の成果報告書について ・ eポートフォリオについて
10	2014年2月19日(水) 9:00-10:00	・ 内部評価委員会、外部評価委員会について ・ 平成26年度調書について ・ 今年度の成果報告書について
11	2014年3月5日(水) 9:00-9:45	・ 外部評価について ・ 今年度の成果報告書について ・ eポートフォリオについて

会議は当初の予定通り実施されており、綿密な情報共有と意思疎通のもとで、事業が展開できていると考える。

3. 各部会の活動概要

それぞれの大学のライティングセンターの運営に関わる個別的な議案については、それぞれの大学において当該部会が開催され、方針決定される。両大学における部会の活動については、それぞれのライティングセンターの活動報告をご覧いただきたい。以下、今年度の各部会の活動概要をまとめる。

3.2 eポートフォリオシステム開発部会

本部会は、eポートフォリオの開発のために結成された部会であり、両大学で協力しながら開発を進めている。

今年度の部会の開催記録は、下記の通りである。

2013 (平成25) 年度 eポートフォリオシステム開発部会 開催記録 (4月～12月)

回	日時	主な議事内容
1	2013年4月18日 (木) 13:00～	・eポートフォリオシステム開発について
2	2013年6月18日 (火) 9:00～	・eポートフォリオシステム開発の進めかたについて
3	2013年7月16日 (火) 9:00～	・システム開発のロードマップについて ・行動観察調査の分析状況について
4	2013年9月18日 (水) 13:00～	・TECfolio ベースシステムの開発スケジュールについて ・TECfolio ZendFramework のライセンスについて ・要求仕様策定作業の状況について
5	2013年10月11日 (金) 12:15～	・要求仕様策定について ・TECfolio ベースシステムの開発スケジュールについて
6	2013年11月15日 (金) 12:15～	・津田塾大学ライティングセンターの利用状況と要求仕様について ・関西大学の要求仕様と部会での検討内容について
7	2013年12月13日 (金) 12:15～	・現状報告
8	2014年1月24日 (金) 12:15～	・現状報告
9	2014年2月28日 (金) 12:15～	・現状報告 ・来年度にむけて

現在、ベースシステムの開発はほぼ終了し、両大学のライティングセンターの予約システムの設計を実施するとともに、ライティング支援機能の要求仕様策定に向けて、作業を継続中である。なお、システムの基本部分については今年度中に完成し、来年度の早い時期での試験的運用を予定している。

3.3 評価指標開発部会

評価指標開発部会では、現在、ライティングをめぐる評価指標（ルーブリック）の開発に向けての調査および研究会を定期的に開催し、鋭意開発作業を進めている。今年度中の完成には至らなかったが、来年度の早い時期に試行版を作成し、ライティング支援や授業内での試験的活用を行っていく予定である。

3.4 社会連携推進部会

社会連携推進部会では、講演会の開催など、各種の連携事業の実施のためにステークホルダーと協議するとともに、高大連携の推進のために、作文コンテスト等に取り組んでいる。また、各ステークホルダーと協議を重ねながら、新たな企画を検討中であり、これらについては、準備が整い次第、実行に移していく予定である。

III

関西大学
ライティングラボの取組

関西大学教育推進部によるアカデミック・ライティング支援は、ライティングラボ（第1学舎1号館）およびライティングエリア（凜風館1階）で行われている。本章では、今年度のライティングラボ運営に関わる以下の12項目について報告する。

1. 利用実績
2. ライティングラボのスタッフ
3. TA 研修・ミーティング
4. 授業科目との連携・利用指示
5. 利用者アンケート集計
6. 広報活動
7. ワンポイント講座
8. 講演会
9. 出版物『レポートの書き方ガイド[実用篇]』の作成
10. 高大連携事業の企画
11. Learning Café：コラボレーションコモンズにおけるライティングエリアの活用
12. 視察対応・メディア掲載・出張講演

1. 利用実績

①ライティングラボおよびライティングエリアの学年別相談者数

春学期の開室期間は、4月15日（月）から7月26日（金）までの71日間であった。開室期間中にライティングラボ（以下：ラボと略）およびライティングエリア（同：エリア）に467名（延べ人数）の学生が来室した。秋学期の開室期間は、9月30日（月）から1月24日（金）までの73日間であった。開室期間中にラボおよびエリアに220名（延べ人数）の学生が来室した。月別の開室日数と利用者数を表1に、学年別の利用者数を図1に示す。

春学期においては、4月は開室日数が少ないため利用者も少なかったが、5月以降は月に100人以上の学生が来室した。学年別では、1年生が341名、2年生が56名、3年生が13名、4年生が40名であった。また、教員の指示により特別に来室した大学院生が17名であった。春学期全体の利用者数は、前年同期のおよそ2倍に増大した。初年次教育科目である「知のナビゲーター（文学部）」、「スタディスキルゼミ」などを通じた利用が多く、利用者のうち1年生が73%を占めた点が春学期の特徴であった。

秋学期においては、春学期より利用者数は減少したが、前年同期より58名増加した。今年度春学期に比べ、秋学期の利用者数が減少した主要因として、初年次教育科目との連携数が少なくなったことが挙げられる（初年次教育科目との連携数：春学期14件、秋学期8件、授業連携の詳細については項目4を参照）。つまり、1年生の利用者が大幅に減少したことが、ラボ利用者数全体に大きな影響を与えたということである。また、ラボの広報活動（項目6を参照）が秋学期より春学期を中心に行われたことも、秋学期の利用者数減少の理由として挙げられる。

秋学期における学年別の利用者数を見ると、1年生が91名、2年生が46名、3年生が18名、4年生が57名であった。4年生の利用者の割合（26%）が春学期（9%）より増え、卒業論文に関する相談が増えている。さらに、留学の志望理由書や演習授業での発表資料に関する相談が多いことも秋学期の特徴であった。これらの点を考慮し、秋学期の利用者拡大を次年度の課題とする。

表1 ライティングラボおよびエリアの開室日数（日）と利用者数（人）

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	前期合計	後期合計	総計
開室日数	11	21	20	19	1	22	19	17	14	71	73	144
利用者数	19	167	131	150	2	36	74	60	48	467	220	687

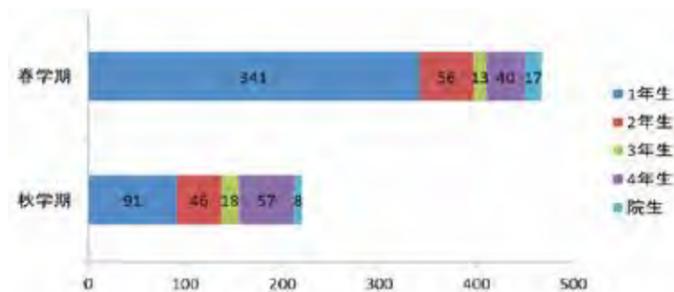


図1 ライティングラボおよびエリアの学年別の相談者数（人）

②利用動機

利用動機では、春学期は後述（項目4を参照）の授業科目との連携による「教員指示による来室」が最も多く、63%を占めた。「チラシやWebサイトによる来室」は17%、「利用経験による来室（リピーター）」は10%、「学生による口コミ」は9%であった（図2）。利用動機は秋学期も同様の傾向にあり、「教員指示による来室」が74%と最も多かった。「チラシやWebサイトによる来室」は9%、「利用経験による来室（リピーター）」は10%、

「学生による口コミ」は6%であった（図3）。

全体的に相談者が多かった春学期は、教員指示だけでなく、チラシやWebサイトを通じての来室者も多く、広報活動が功を奏していたといえよう。前年度同期と比較しても、チラシ・Webサイトによる来室、利用経験による来室者数は大幅に増加している。秋学期は、前年度同期と比較すると利用経験による来室者数が減少している。その一方で、教員指示による来室者数が増加しており、ラボと教員の連携が徐々に強まっていることがうかがえる。

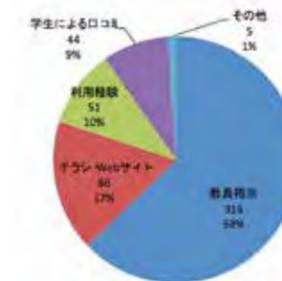


図2 春学期 相談者の利用動機（複数回答可）

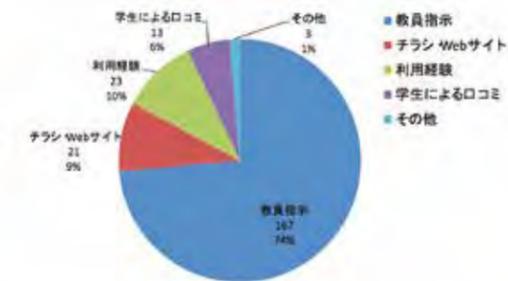


図3 秋学期 相談者の利用動機（複数回答可）

2. ライティングラボのスタッフ

2014年3月現在、特任教員3名、事務員1名、TA23名の体制を敷いている。TAは学生の個別相談を行い、特任教員はコーディネーターとしてライティングラボの運営を管理している。TAはラボに2～6名が常駐し、予約相談に対応するとともに、予約なしで来室する学生の相談にも対応できるようにしている。

新規TAの採用は春学期と秋学期の初めに行った。今年度は、春学期に8名のTAを新たに採用し、前年度より継続していたTAと合わせて20名の体制となった。さらに秋学期には、新たなTAを3名採用し、現在のところ総勢23名のTAで、学生からの相談に対応している。

3. TA研修・ミーティング

新規TAには採用後、導入研修を行っている。また、月に1度、TAと特任教員で研修・ミーティングを行っている。今年度の開催日時とそれぞれの研修・ミーティングの概要は、表2のとおりである。

表2 TA研修・ミーティングの状況

開催日時	概要
(春学期) 5月下旬～6月 (秋学期) 11月下旬	新人研修 ・ビデオ視聴（コミュニケーションスキルの養成：傾聴や質問の仕方） ・先輩TAの相談対応見学後、指導内容についてディスカッション ・学生のレポートを題材に、先輩TAと指導内容検討会 ・先輩TAとの模擬相談（ロールプレイ）
5月30日（木） 16時30分～17時30分	全体討議 自己紹介・勤務の全体確認（システムの使い方、勤務時間、相談の受け方）・今年度の展開について（コラボレーションコモンズでの相談・連携授業での対応・シフトの組み方・HP・他キャンパス）

6月28日(金) 16時～17時	全体討議 自己紹介・新人研修について・コラボレーションコモンズにおける問題・予約枠の問題・HPの更新について
7月29日(月) 14時～17時30分 7月31日(水) 11時～12時30分	模擬セッション ペアになり、学生役とTA役に分かれてセッションを行う。セッション後、ペアでセッション内容を振り返る。さらにセッション内容を発表し、全体で議論することで問題や対応方法を共有する。 全体討議 模擬セッションに引き続き、ラボでの相談対応の方針を検討する。 ・ラボの理念、「内容に踏み込まない」「気づきを促す」 ・サンプルレポートの必要性 ・学生のマナーについて ・秋学期からの業務
9月27日(金) 13時～14時	全体討議 秋学期のラボ運営とその展開について(コラボレーションコモンズ・留学生の対応・他キャンパスでの対応)、業務日誌に書いてある「困ったこと」や「うまくいったこと」のまとめと紹介、その他諸連絡
10月23日(水) 14時40分～16時10分	留学生対応研修 関西大学留学生別科の講師を招き、留学生対応における対応方針の確認・実際のレポートを使った指導内容検討会
11月19日(火)～22日(金) 13時～14時30分	指導内容検討会 サンプルレポートを用いて指導内容の検討会、および、日常の相談業務においてTAそれぞれが感じる問題とその対応法を全員で共有
1月21日(火) 22日(水) 24日(金) 13時～14時30分	全体討議 相談の手引き／チェックリストの作成(内容と作成方法)・部会の設定(ラボTAの自治組織、決定機関を設ける)・今年度の総括と次年度の運営について
2月25日(火) 26日(水) 3月4日(火) 5日(水) 13時30分～16時30分	全体討議 相談の手引き／チェックリストの作成作業 チェックリストの具体的な用途の検討と確認 チェックリストのカテゴリ・カテゴリ内の項目・項目の具体的な文言の検討と作成

4. 授業科目との連携・利用指示

学生の学びを授業外でも支援するために、ラボと教育カリキュラムの連携を進めている。今年度は、年度の初めに、初年次教育科目担当の教員を中心に、ラボに関する資料一式を送付し利用の促進を図った。その結果、前年度に比し、授業時間内でのラボの利用ガイダンス実施件数および科目担当教員から学生に対するラボの利用指示件数が増加した(昨年度：春学期17件、秋学期10件、今年度：春学期21件、秋学期12件)。利用ガイダンスでは、ラボでの相談の様子を紹介し、具体的な予約方法のデモンストレーションを行った。また、利用指示においては、科目担当教員よりラボに課題内容が通知された場合に、その内容をTA間で共有し、課題により適し

た支援を行った。利用ガイダンスを行った授業科目、およびラボに課題内容の通知があった授業科目のうち、春学期開講科目を表3、秋学期開講科目を表4に示す。

表3 春学期に連携した授業科目とその内容

授業科目	配当年次	連携の内容
知のナビゲーター(複数クラス開講)	1年次	利用ガイダンス、利用指示、レポート・発表資料の個別相談
日本語2	1年次	利用ガイダンス、利用指示、レポートの個別相談
経済学ワークショップ1	1年次	利用ガイダンス
心理学基礎研究1	1年次	利用ガイダンス
基礎演習(商学部)(複数クラス開講)	1年次	利用ガイダンス
スタディスキルゼミ(プレゼンテーション)	1年次	利用指示、レポートの個別相談
スタディスキルゼミ(ノートをまとめる)	1年次	利用指示、レポート・発表資料の個別相談
心理学を学ぶ	1年次	利用指示、レポートの個別相談
心理学専門演習	3年次	利用ガイダンス
フランス学総合研究a	4年次	利用ガイダンス、利用指示、レポート・発表資料の個別相談
卒業研究(総合情報学部)	4年次	利用指示、卒業論文の個別相談
メディア教育論	2, 3, 4年次	利用指示、レポートの個別相談

表4 秋学期に連携した授業科目とその内容

授業科目	配当年次	連携の内容
知へのパスポート(映像文化)	1年次	利用指示、発表資料の個別相談
知へのパスポート(哲学倫理学)	1年次	利用ガイダンス
知へのパスポート(国語国文学)	1年次	利用ガイダンス、利用指示
文章力をみがく(複数クラス開講)	1年次	利用ガイダンス、利用指示、レポートの個別相談
スタディスキルゼミ(ノートをまとめる)	1年次	利用指示、レポート・発表資料の個別相談
スタディスキルゼミ(プレゼンテーション)	1年次	利用指示、レポートの個別相談
スタディスキルゼミ(課題探究)	1年次	利用指示、レポートの個別相談
映像文化専修ゼミ2	2年次	利用ガイダンス、利用指示、発表資料の個別相談
英米文学英語学専修ゼミ2	2年次	利用ガイダンス、利用指示
映像文化専修ゼミ4	3年次	利用ガイダンス、利用指示、発表資料の個別相談
英米文学英語学専修ゼミ4	3年次	利用ガイダンス、利用指示

5. 利用者アンケート集計

今後のラボの運営や相談の質の向上のため、個別相談終了後に、学生にはアンケートへの回答を依頼している。設問は以下の3つである。

- (1) TAのアドバイスはわかりやすかったですか？
- (2) TAのアドバイスをもとに文章を改善できそうですか？
- (3) 今回の相談・アドバイスで一番役に立ったことは何だと思いますか？

設問(1)と(2)については10段階評価とし、(3)については自由記述で回答を求めた。設問(1)と(2)についての集計結果を図2に示す。

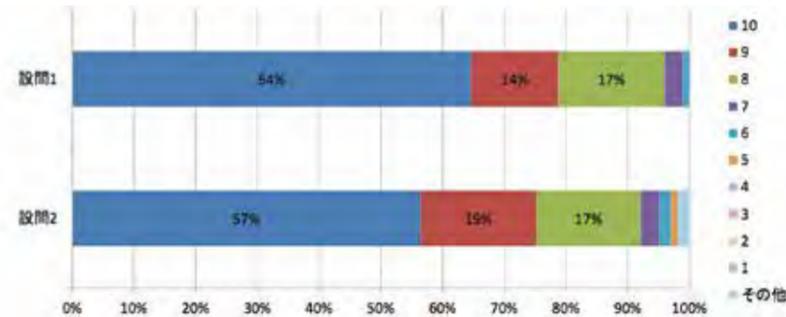


図4 利用者アンケート集計結果 (N=642)

設問(1)はTAのアドバイスに対する評価であるが、10段階評価で最高得点の10、9とした学生が全体の7割以上を占めた。また、8まで含めると全体の9割以上となる。設問(2)は文章改善に対する評価であるが、こちらも10段階評価で最高得点の10、9とした学生が全体の7割以上を占め、8まで含めると全体の9割以上となる。

設問(3)の自由記述の回答結果としては、1年生による「レポートの書き方がわかった」という声が比較的多かった。次いで「レポートの構成」、「言葉遣い」、「段落」についての記述が多かった。

6. 広報活動

ラボの認知や活用を促進するために、次のような広報活動を行った。第一に、「関西大学ライティングラボ」のウェブサイトが6月に開設した (URL <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/>)。同サイトでは、ラボの利用案内やよくある質問、予約の仕方、利用者の声などを掲載している。また、ラボ主催のイベントやワンポイント講座などの情報を新着ニュースとして更新している。

第二に、前年度発行したラボのリーフレットを改訂した。予約の仕方などの利用案内に加え、レポートの作成過程などとあわせて利用の仕方を追記した点が、前年度版からの変更点として挙げられる。

第三に、ラボのポスターを作成し、前年度より広い範囲で掲示した。

第四に、学生への広報紙として、ラボに親しみやすさを感じてもらうため「まなかん通信」を発行した。同誌には、ラボの利用の仕方やスタッフの紹介、およびコラムを載せている。

第五に、教員への広報活動として、初年次授業科目を担当する教員を中心に、ラボのリーフレットと「レポートの書き方



図5 広報活動に関わるリーフレット他

ガイド」(後述)を配布した。

7. ワンポイント講座

レポート・卒業論文を主としたアカデミックな文章を書くためのポイントを簡潔に学ぶ授業外講座を実施した。各講座の詳細については、下記のとおりである。

(1) 千里山キャンパス (春学期)

「レポートの書き方ワンポイント講座」と題し、昼休みの時間帯(12:20 - 12:50)に開講した。内容の詳細については表5のとおりである。全9回の参加者総数は、137名であった。

表5 「レポートの書き方ワンポイント講座」の詳細

回	日付	担当	講座タイトル	講座目標
1	5月20日(月)	小林至道	なんでレポートなんか書かなアカンねん?	レポートを書けるようになることの意義を考える
2	5月27日(月)		レポートって、何を書けば良いの?	レポートで求められる基本的な「型」を知る
3	6月3日(月)		レポートって、どう書くの?	レポートを書き進めるうえでのポイント学ぶ
4	6月10日(月)		文献って、どう探すの?	レポートを書くための文献の調べ方を知る
5	6月17日(月)		文献って、どう読めば良いの?	レポートを書くための文献の読み方を学ぶ
6	6月24日(月)		文章表現上の注意点	レポートを書く際の文章表現上の注意点を知る
7	7月1日(月)		引用・参考の仕方	レポートへの引用・参考の仕方を学ぶ
8	7月8日(月)		「問い」の絞り込み方	与えられたテーマから「問い」への絞り込み方を学ぶ
9	7月22日(月)		自ら考え、表現し、発信する	これまで学んできたポイントを振り返る

(2) 高槻ミューズキャンパス (春学期)

キャリアセンターからの依頼に基づき、大学における学習から就職活動まで広く必要となる「文章力」をテーマに、短期集中講座を行った。「文章スキルアップ ワンポイント講座」と題し実施した全3回の参加者総数は、61名であった。講座内容の詳細は、表6のとおりである。

表6 「文章スキルアップワンポイント講座」の詳細

回	日付	担当	講座タイトル	講座目標
1	6月19日(水)	林田定男	「書く」ということ	「書く」と「話す」の違いを再認識する
2	7月3日(水)	小林至道	レポートを書けるようになることの意義	自分の考えを文章で他者に伝えることの重要性を知る
3	7月10日(水)		レポートで書くべき型と内容	レポートを書く際に求められる基本的な型と内容を知る

(3) 堺キャンパス (春学期)

「レポートがすらすら書ける! ワンポイント講座」と題し、7月11日(14:40 - 16:10)に開講した。書き言葉の特徴を林田が、レポートにおける表現を西浦が、それぞれ45分ずつ講義した。参加者総数は、17名であった。詳細は、次の表7に示すとおりである。

表7 「レポートがすらすら書ける！ワンポイント講座」の詳細

回	日付	担当	講座タイトル	講座目標
1	7月11日(木)	林田定男 西浦真喜子	伝わらないは当たり前 レポートの流れと作り方	書き言葉の特徴を知り、それをレポート作成に活かす

(4) 千里山キャンパス (秋学期)

「文章表現ワンポイント講座」と題し、昼休みの時間帯（12：20 - 12：50）に開講した。内容の詳細については表8のとおりである。全9回の参加者総数は、52名であった。

表8 「文章表現ワンポイント講座」の詳細

回	日付	担当	講座タイトル	講座目標
1	10月8日(火)	林田定男	文章の基礎 (1) なぜ伝わりにくいのか?	書き言葉と話し言葉との違いを意識する
2	10月15日(火)		文章の基礎 (2) 文章のタイプ	感想文、意見文といった文章の違い(目的)を理解する
3	10月22日(火)		文章の基礎 (3) レポートとは何か?	レポートの文章の特徴を理解する
4	11月12日(火)		文章を読む (1) 読み方のいろいろ	目的に沿った文章の読み方を修得する
5	11月19日(火)		文章を読む (2) ショートショートを読む(初級編)	文学的文章の読み方を理解する
6	11月26日(火)		文章を読む (3) ショートショートを読む(上級編)	文学的文章の読み方を理解する
7	12月3日(火)		レポートを書く (1) 全体の構成	序論、本論、結論という型を再確認する
8	12月10日(火)		レポートを書く (2) 段落の構成	パラグラフライティングの手法を身につける
9	12月17日(火)		レポートを書く (3) 引用の方法	引用することの意味を考える

(5) 堺キャンパス (秋学期)

「レポートがすらすら書ける！ワンポイント講座」と題し、1月16日（10:40 - 12:10）に開講した。レポート提出直前という時期を考慮し、実際に課されているレポート課題を基にレポート作成ワークを行った。内容の詳細については表9のとおりである。参加者総数は、10名であった。

表9 「『レポートがすらすら書ける！ワンポイント講座』の詳細

回	日付	担当	講座タイトル	講座目標
1	1月16日(木)	西浦真喜子	とにかくレポートを完成させよう!	序論の立て方、引用の仕方を学び、レポートを完成させる

8. 講演会

主催講演会：実践！ 社会に出て役立つ「伝える力」！

講師：植木まり子氏（株式会社パソナ 執行役員）
日時：2014年1月17日（金）13：00～14：30
場所：第1学舎1号館 A201 教室

本講演会は、ステークホルダーである株式会社パソナグループからの協力により実施された。様々な学部から42名が参加した。学外からの参加者も散見された。

本講演会のテーマは「伝える力」であり、特に文章力とプレゼンテーション力を育成することを目的として、講義とグループ作業が行われた。これらの力は、大学においてだけでなく社会に出てからも必要であり、その点が強調された内容となっていた。

まず、文章力育成を目的としたワークが実施された。「文章を書くときの悩み」、「なぜ文章力を身につけたいか」を個人で書き出し、それを隣の学生とペアになって共有するというものであった。このペアワークによって、普段意識せずに書いている文章が自分にとってどういうものかを理解することができ、また、文章力を身につける目的を考えることで、文章を書くモチベーションも明確になったことであろう。先のワークに続き、「愛」や「自己紹介」というテーマを用いて、思考整理を行った。植木氏は、思考整理の方法として「枠」を作成することを提案された。一枚の紙を折って16個のマスを作成し、そこに1つずつ要素を書くことで、要素同士のつながりが見えやすくなると解説した。これについても個人で整理を行ったのちに、ペアでの共有を行った。参加者は、整理された紙を見ながら相手に話すことで、より説明しやすくなることを実感していたようである。

また、プレゼンテーション力の育成を目的として、喫茶店のコンサルティングをするというグループワークが行われた。店の立地や看板メニューなどの情報を踏まえ、どうしたら店の売り上げを伸ばせるかをグループで話し合った。ここでは、それまでに解説された思考の整理法を応用することと、説得力をもって自分の意見を話す、ということに重点が置かれていた。

以上のように、本講演会は「伝える力」の重要性と、どうしたら伝わるのかを、参加者の実践を通して身につける機会となった。講演会後のアンケートでは参加者の約85%が「参考になった」と回答しており、学生にとって有益な講演会であった。

9. 出版物『レポートの書き方ガイド [実用篇]』の作成

今年度は、昨年度に作成した初年次生向けのライティング・ハンドブック『レポートの書き方ガイド』の姉妹編として、『レポートの書き方ガイド [実用篇]』(A5判、30頁程度)を作成した。本冊子の刊行目的は、レポート作成と大学生活との関係学ぶということである。レポート作成の各段階において、学内のどの部署・施設を利用すれば良いか、という実用的事項を集成した。

また、昨年度に作成した『レポートの書き方ガイド』は、ライティングラボにおけるライティング支援の指針として活用された。それだけではなく、関西大学の各学部の授業でも活用された。2013年3月に4,000部発行し、その後10月に300部、12月に500部、それぞれ増刷した。主に初年次生対象の授業で配布、利用されている。



図6 『レポートの書き方ガイド [実用篇]』表紙

10. 高大連携事業の企画

(1) 高校生対象セミナー

関西大学社会連携部高大連携センターが実施する高校生対象セミナーに、今年度より本取組からもセミナーを提供した。具体的には、次のとおりである。

■リレー講義型プログラム「Kan-Dai ネットレス・セミナー」

ネットレス・セミナーは、関西大学千里山キャンパス近郊の高校生を対象に実施されている高大連携の取組である。全6回の授業を複数名の教員が代わる代わる行いながらも、「一つ一つのテーマはネットレスのようにつながる」という企図が、セミナー名の由来となっている。

本取組からは春学期に、「〈アクティブ・ラーニング〉で大学生の学びを体験しよう!」というテーマで、各回90分の講座を開講した。大阪、奈良、京都、兵庫の12校、計79名の高校生が受講した。各回の詳細については、表10のとおりである。

表10「Kan-Dai ネットレス・セミナー」のテーマと担当者

回	開講日	テーマ	担当者
1	5月25日(土)	わかりやすい文章を書く	林田定男
2	6月1日(土)	読解力を身につける	小林至道
3	6月8日(土)	論理的に考える	中澤務
4	6月15日(土)	プレゼンテーション入門	岩崎千晶
5	6月22日(土)	ディスカッションでアイデアを練る	西浦真喜子
6	6月29日(土)	ディベートで議論する力を身につける	中澤務

■出張講義型プログラム「Kan-Dai 1 セミナー」

高等学校からの依頼に基づき、本学の教員が高等学校を訪問し、約50分～90分の模擬講義を行う高大連携の取組である。

本取組からは、7月に「ロジカルシンキング入門」というテーマ(担当:中澤務、実施校:関西大学第一高等学校)で1回実施し、受講生は411名であった。秋学期には、「文章の日本語」というテーマで5回実施し、大阪、京都、兵庫の4校、計154名の高校生が受講した。その詳細は表11のとおりである。

表11「Kan-Dai1 セミナー」の依頼校とテーマ

回	日付	依頼校	講座テーマ	講座目標	担当者
1	9月17日(火)	伊丹市立伊丹高等学校	文章の日本語	文学的文章の読み方を学ぶ	林田定男
2	10月16日(水)	京都府立京都八幡高等学校		書き言葉の特徴を学ぶ	
3	10月19日(土)	関西大学北陽高等学校		書き言葉の特徴を学ぶ	
4	10月29日(火)	昇陽高等学校		書き言葉の特徴を学ぶ	
5	10月31日(木)	伊丹市立伊丹高等学校		文学的文章の書き方を学ぶ	

(2)「考動力」作文コンテスト

ステークホルダーである伊丹市教育委員会の後援を得、文章を書くことを通じて考える力を培い、身につけたそれらの力を発信する場として作文コンテストを実施した。本コンテストでは大学生の部と高校生の部を設け、それぞれエッセイ部門、ショートショート部門で募集を行った。

なお、今年度のコンテスト実施は試行的なものである。そのため、高校生の部では伊丹市立伊丹高等学校および関西大学併設校の生徒、大学生の部では関西大学の学部生のみを応募資格者とした。11月末締切の高校生の部では、総計598編の応募があった。また、1月末締切の大学生の部では、総計92編の応募があった。

中澤務・取組責任者を審査委員長に、CTL運営にかかわる教員・スタッフ4名、教育推進部特任教員3名、事務職員3名の計11名で審査を行った。



図7 高校生の部ポスター

11. Learning Café : コラボレーションコモンズにおけるライティングエリアの活用

本年度に開設されたコラボレーションコモンズ内のライティングエリアにて、Learning Caféと題したワークショップを開催した。各回のテーマは、大学生活で必要となる基礎的なスタディスキルを取り上げた。コラボレーションコモンズに最も学生が集まりやすい時間帯を考慮し、開講時間は14時40分から15時40分までとした。学生が茶菓を取りながら気軽に学べる場として、好評を博した。

ファシリテーターは岩崎千晶(教育推進部助教)、齊尾恭子(教育開発支援センター研究員)、佐々木知彦(同研究員)の他、LA数名が務めた。春学期に4回、秋学期に9回開講し、受講者総数はそれぞれ25名、49名であった。詳細は表12、13を参照されたい。

表12 Learning Café 春学期開催内容(受講者総数:25名)

回	日付	担当	タイトル
1	6月24日(月)	岩崎千晶	論理的に話そう!
2	6月28日(金)	岩崎千晶	伝わるプレゼンをしてみよう!
3	7月1日(月)	岩崎千晶	伝わるスライドを作ろう!
4	7月5日(金)	佐々木知彦	期末レポートの書き方対策!

表13 Learning Café 秋学期開催内容(受講者総数:49名)

回	日付	担当	タイトル
1	10月7日(月)	岩崎千晶	相手に自分の意図を分かりやすく伝えるコツ!
2	10月21日(月)	齊尾恭子	『ノートテイクに悩んでいませんか?』第1回「ライブレコーディング」
3	10月25日(金)	岩崎千晶	「いいね!」と言われるスライドをつくるコツ!
4	10月28日(月)	齊尾恭子	『ノートテイクに悩んでいませんか?』第2回「インデント」
5	11月8日(金)	佐々木知彦	文献を速く読むコツ①短い文章編
6	11月15日(金)		文献を速く読むコツ②本まるごと一冊編
7	11月22日(金)		クリティカル・リーディングとは?
8	12月2日(月)	齊尾恭子	【応用編】『議事録を作ってみませんか?～ノートテイクのスキルの応用～』第1回「議事録を作成してみよう」
9	12月9日(月)		【応用編】『議事録を作ってみませんか?～ノートテイクのスキルの応用～』第2回「議事録を作成してみよう」 ※第1回、第2回同内容だが、ワークの題材を別とした

12. 視察対応・メディア掲載・出張講演

本取組では今年度、学外・学内の機関を対象に、下記の活動を行った。

- (1) ライティングラボへの学外からの視察対応
- (2) コラボレーションコモンズへの学外からの視察対応
- (3) メディア取材への対応および活動内容のメディア掲載
- (4) 学内他部署からの依頼を受けての講演

(1) ライティングラボへの学外からの視察対応

①熊本大学

- ・日 時：2013年6月7日（金）14:00～16:00
- ・訪 問 者：熊本大学工学部 鳥越一平氏
- ・対 応 者：西浦真喜子
- ・訪問趣旨：実際にラボでどのようなライティングの支援を行っているのか。
- ・対応内容：ライティングラボの概要説明、資料配布、施設（ラボ・commons）の見学、セッション見学、TAへのヒアリング

②大阪大学

- ・日 時：2014年1月15日（水）14:00～15:30
- ・訪 問 者：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 姚馨氏
- ・対 応 者：西浦真喜子、林田定男、小林至道
- ・訪問趣旨：ライティング支援プロジェクト（研究者向け）を立ち上げるにあたり、各大学のライティングセンターの現状把握を行っている。その一環として。
- ・対応内容：ライティングラボの概要説明、資料配布、施設（ラボ・commons）の見学、特任教員との情報交換

③金沢工業大学

- ・日 時：2014年1月17日（金）14:40～15:20
- ・訪 問 者：金沢工業大学ライティングセンター 垣内聡子氏
- ・対 応 者：西浦真喜子、小林至道
- ・訪問趣旨：ライティングの講座（ワンポイント講座）では、どのような内容を扱っているのか。
- ・対応内容：ライティングラボの概要、ワンポイント講座の概要、資料配布、施設の見学

④青山学院大学

- ・日 時：2014年2月25日（火）16:00～18:00
- ・訪 問 者：青山学院大学人間教育科学部 野末俊比古氏
- ・対 応 者：小林至道
- ・訪問趣旨：授業、カリキュラム、他部署、他施設と、どのような連携のもと、ライティングラボの運営を行っているのか。
- ・対応内容：ライティングラボの概要説明、資料配布、施設（総合図書館・commons）の見学

⑤帝京大学

- ・日 時：2014年3月1日（土）12:30～15:00
- ・訪 問 者：帝京大学総合教育センター 上岡真紀子氏
- ・対 応 者：小林至道
- ・訪問趣旨：ライティングを中心として学習支援をどのような体制で行っているのか。
- ・対応内容：ライティングラボの概要、資料配布、施設（総合図書館・commons）の見学

⑥大阪大学・国際基督教大学・東京大学

- ・日 時：2014年3月3日（月）14:00～15:00
- ・訪 問 者：大阪大学未来戦略機構戦略企画室 小貫有紀子氏 国際基督教大学教務部 アカデミックプランニング・センター 大枝さやか氏、森川園子氏 東京大学教育学研究科博士課程 国立大学協会特別研究員 蝶慎一氏
- ・対 応 者：小林至道
- ・訪問趣旨：どのような施設、体制のもと、ライティング（学習）支援を行っているのか。

- ・対応内容：ラボの現状・課題、TA研修のあり方、ライティング支援内容（相談記録）の共有方法についてなどの質問に対して回答した。commonsの視察。

⑦兵庫大学

- ・日 時：2014年3月27日（木）14:00～16:00
- ・訪 問 者：兵庫大学学習支援センター 光武一成氏
- ・対 応 者：小林至道
- ・訪問趣旨：ライティングを中心として、学習支援を全学的にどのように展開しているのか。
- ・対応内容：ラボの現状・課題の説明、関西大学教育推進部の組織体制のあり方の説明、本取組に関する質疑応答。commonsの視察。

(2) コラボレーションcommonsへの学外からの視察対応

①立教学院（立教大学）

- ・日 時：2013年7月18日（木）15:30～17:30
- ・訪 問 者：立教学院（立教大学） 職員2名
- ・内 容：池袋図書館とは別にcommonsの設置を予定されており、本学コラボレーションcommonsの現状と、設置の経緯などのヒアリングに來られた。

②大学コンソーシアム京都

- ・日 時：2013年7月25日（木）15:00～17:30
- ・訪 問 者：大学コンソーシアム京都 職員2名
- ・内 容：近畿圏の大学でcommonsを設置した大学への調査ということで、本学の現状などの意見交換を実施した。

③美作大学

- ・日 時：2013年9月2日（月）10:00～12:00
- ・訪 問 者：美作大学 図書館長、職員2名
- ・内 容：ラーニングcommonsの設置を検討されており、本学の現状及び設置の経緯等のヒアリングに來られた。

④神戸女子大学

- ・日 時：2013年9月2日（月）15:00～17:30
- ・訪 問 者：神戸女子大学 職員2名
- ・内 容：ラーニングcommonsの設置を検討されており、本学の現状及び設置の経緯等のヒアリングに來られた。

⑤筑波大学

- ・日 時：2013年10月1日（火）14:30～17:30
- ・訪 問 者：筑波大学 教員4名、学生スタッフ9名
- ・内 容：春日のラーニングcommonsの学生スタッフを連れて、本学コラボレーションcommonsの現地見学と、ライティングラボのTAとの情報交換を実施した。

⑥大阪工業大学

- ・日 時：2013年10月22日（火）10:00～12:00
- ・訪 問 者：大阪工業大学 教員1名、職員3名
- ・内 容：ラーニングcommonsの設置を検討されており、本学の現状及び設置の経緯等のヒアリングに來られた。

⑦大阪大学

- ・日 時：2014年1月24日（金）13:30～15:30

- ・訪問者：大阪大学 職員1名
- ・内容：本学のコラボレーションコモンズの現状、改善事項等のヒアリング及び情報交換を実施した。

⑧滋賀大学

- ・日時：2014年1月24日（金）13:30～15:30
- ・訪問者：滋賀大学 職員1名
- ・内容：本学のコラボレーションコモンズの現状、改善事項等のヒアリング及び情報交換を実施した。

⑨大谷大学

- ・日時：2014年1月25日（土）10:30～12:00
- ・訪問者：大谷大学 教員1名
- ・内容：大谷大学の学習支援室で展開している学習支援の有り方を検討するため、本学のコラボレーションコモンズの現状、改善事項等のヒアリング及び情報交換を実施した。

⑩山形大学

- ・日時：2014年2月20日（木）15:00～16:30
- ・訪問者：山形大学 教員2名
- ・内容：本学のコラボレーションコモンズの現状、改善事項等のヒアリング及び情報交換を実施した。

⑪大阪工業大学

- ・日時：2014年2月25日（火）10:30～12:00
- ・訪問者：大阪工業大学 教職員2名（図書館長、教員）
- ・内容：大阪工業大学で4月より開設予定のラーニング・コモンズの学習支援を検討するため、本学のコラボレーションコモンズの現状、改善事項等のヒアリング及び情報交換を実施した。

（3）メディア取材への対応、および活動内容に関するメディア掲載

①NHK

- ・日付：2013年5月18日（土）10時～
- ・内容：関西大学特集の施設紹介の一部として、コラボレーションコモンズについて放映された。

②朝日新聞（電子版）

- ・日付：2013年5月27日（月）
- ・内容：<http://www.asahi.com/ad/daigakuryoku/kansai/kansai-u/>

③日経新聞（朝刊）

- ・日付：2013年7月1日（月）
- ・内容：添付資料①のとおり

④読売新聞（朝刊）

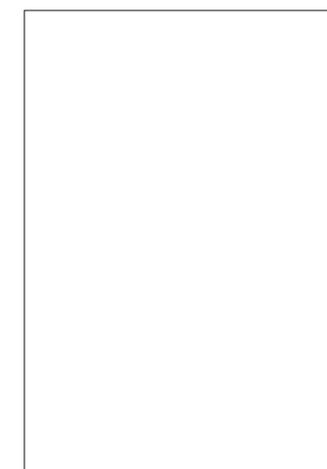
- ・日付：2013年8月11日（日）
- ・内容：添付資料②のとおり

⑤読売新聞（夕刊）

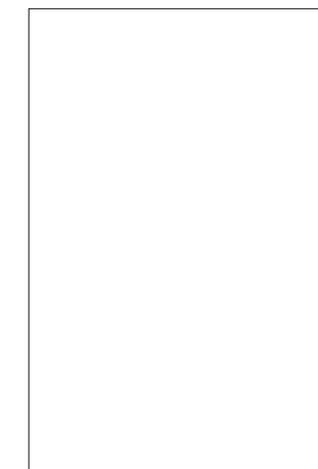
- ・日付：2013年8月23日（金）
- ・内容：添付資料③のとおり



添付資料①：日経新聞（朝刊）



添付資料②：読売新聞（朝刊）



添付資料③：読売新聞（夕刊）

（4）学内他部署からの依頼を受けての講演

本取組では今年度、他キャンパス・他部署からの依頼を受け、下記の講演を実施した。

- ①高槻ミューズキャンパス・キャリアセンターからの依頼：ワンポイント講座（計3回）
- ②堺キャンパス・キャリアセンターからの依頼：ワンポイント講座（計2回）
- ③商学部からの依頼：「商学部入学前教育特別登校教育」の講演

なお、①、②についての詳細は「7. ワンポイント講座」の箇所を、③については、当日配付資料の一部を次ページに添付する。

IV

津田塾大学 ライティングセンターの取組



 商学部入学前教育 特別登校教育
大学での文章記述講座
 教育推進部
 林田定男 小林至道 西浦真喜子
 関西大学

大学では、「書くこと」に追われます。
成績評価の対象となるのも主として文章です。

ボク、ライカンです！



読み手の存在を意識しないと
商売もできません。
 その例が資料Aです。
 どういうところが、残念ですか？

下のチラシ(資料A)を見て、不自然な点を指摘してみよう！



- ・マンションの場所が不明
- ・問い合わせ先が不明

考える時間
2分

文章で伝えるとはどういうこと？



改善例(主部と術部との不対応)

a. 特急の停車駅は、十三、淡路、茨木市、高槻市、長岡天神、桂、烏丸に停まります。

→ 停車駅が止まるの？ そら動いてはいいけどな、

- ・特急の停車駅は、十三、淡路、茨木市、高槻市、長岡天神、桂、烏丸です。
- ・この電車は、十三、淡路、茨木市、高槻市、長岡天神、桂、烏丸に停まります。

2008年に設立された津田塾大学ライティングセンターは、関西大学との本大学間連携共同教育推進事業により、2012年度から新たな発展を目指して活動してきた。取組2年目の2013年度はライティングセンターの機能を拡張し、学生への支援をさらに充実させるための体制の整備を進めた。以下、2013年度の成果を報告する。

1. 個別相談
2. 講演会「書くということと私」
3. 講演会「女性のリーダーシップから学ぶ」
4. 日本語ライティング講座
5. 実践英語ライティング講座
6. 授業科目
7. 高大連携事業の企画
8. キャリア支援
9. 啓発・広報

1. 個別相談

活動の中心は学生との1対1の個別相談である。課題のレポートや論文などアカデミックな文章だけでなく、進学や就職に関する書類、あるいは手紙やサークルで発表する文章など、幅広い文章の相談に応じるのが本学センター設立以来の特徴である。

2013年度は学生の多様なニーズにこたえ、より多くの相談に応じられるよう、以下の通り、体制を整えた。

(1) スタッフ

特任教員1名、特任助教1名、職員（派遣職員）1名ほか、兼任で専任職員1名、特任職員1名がライティングセンターの日常業務にあたる。

日本語の文章相談に応じるのは特任教員と特任助教、チューター2名（国際関係研究所員1名、国際関係学専攻後期博士課程在籍者1名）の計4名だったが、12月に新たなチューター（国際関係学専攻後期博士課程）を1名採用した。アカデミック・ライティングや留学・コース志望理由などの相談はチューターと特任教員が、就職に関する文章の相談は原則特任教員のみが担当するが、新たに採用したチューターは企業で人事を担当した経験もあるため、就職関連の相談にも応じる。

2013年2月、英語ネイティブの教員も1名採用し、新たに英語文章の相談にも応じられる体制にした。学生の評判は良く、2013年度は常に予約が埋まっている状態になった。

(2) 開室期間・時間

2011年度は週3日、2012年12月からは週4日だった相談日を、2013年度は週5日に増やすことができ、月曜日から金曜日まで毎日午前9時40分から午後4時15分まで、1回45分のコマを8コマ、予約できるようにした。原則、前日の午後4時までにライティングセンターのウェブから申し込む。月曜日と木曜日以外は2名体制となり、同じコマ内で2人の学生の相談に応じることでもできた。

1コマ目の相談は、午前9時45分からだったが、年度の途中、チューターからの提案で開始を5分早めた。「相談の終了が10時30分だと2限の授業開始と重なるので、1コマ目は予約しづらい」という学生の声をチューターが汲み上げた結果だ。

学生が休みに入る8、9月、および2、3月には原則チューターは業務を行わず、相談日や相談時間を短縮しながら特任教員2名で対応した。2、3月は就職関連の相談が増えるため、特任教員2名とチューター1名で対応した。英語の個別相談は毎週金曜日の午後1時45分から4時15分までの3コマ。7月から9月まで、また12月と1月には、相談日や相談時間を臨時に増やすなどし、金曜日の限られたコマでは利用できない学生にも相談機会を増やした。日本語の個別相談は、別の建物内にある相談室で行っているが、英語の相談は今年度もライティングセンターの事務室がある部屋で行った。

(3) 利用実績

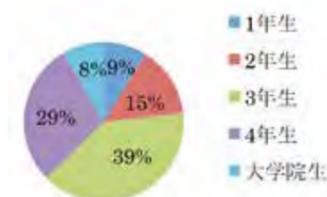
2013年度の日本語文章の相談件数は2014年2月末現在、439件となった。2012年度1年間の相談件数309件を大きく上回った。英語の相談は2014年2月末現在、81件。英語相談を本格的に始めたのは今年度からなので昨年度との比較はできない。



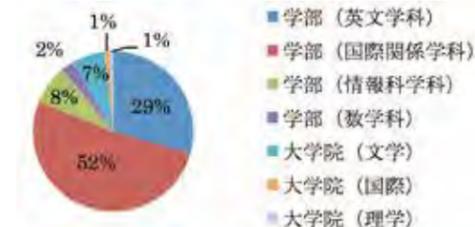
*注：2013年度は2月末までの集計 2012年度/13件、2013年度/81件の英語ライティングを含む

相談者の内訳は1年生（9%）、2年生（15%）、3年生（39%）、4年生（29%）、大学院生（8%）。学科別では国際関係学科が一番多く（52%）、英文学科（29%）、情報科学科（8%）、数学科（2%）と続く。国際関係学科の学生の利用が多いのは、日本語のレポートなどを書く機会が一番多い学科だからと考えられる。

学年別利用実績



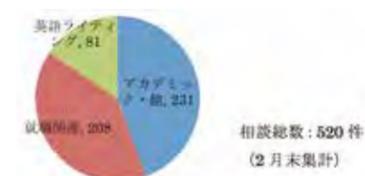
学科別利用実績



(4) 相談内容

2013年度の日本語の相談件数439件(2月末日現在)のうち、就職関連は208件、就職関連以外の相談は231件だった。もともと本学ライティングセンターでは就職関連の相談が多かったが、今年度はアカデミック関連の相談を増やすことに力を入れ、告知に努めた。その結果、アカデミック関連の相談が急増した（前年比218%）。なかでも、コース志望理由書や留学志望理由書（両者ともアカデミック関連）などの件数が多い。「前年利用した先輩にライティングセンターを勧められた」と言う学生も多く、学生の口コミが利用者増につながっていることがわかった。

種別相談実績



種別月別実績推移

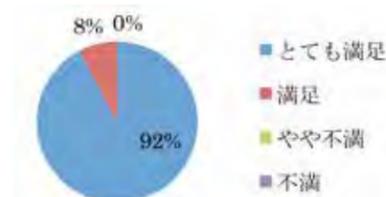


(5) アドバイスの効果・評価

個別相談の「効果」を測定することは難しいが、センターでは相談を終えた学生に対するアンケートから、学生がセッションをどのように評価したかを探ってきた。今年度はアンケートの集計率を上げることを意識し、また質問を少し変え、より細かく学生の声を拾うことに努めた。

アンケートの回答者数（1月末延べ人数）は、日本語275人（回収率73%）、英語19人（同24%）である。
①「チューター、教員の対応はいかがでしたか」の問いに「とても満足」は92%、「満足」は8%。「やや不満」「不満」と答えた学生は一人もなく、学生の満足度は極めて高いことがわかった。これは設立以来、当センターが誇る数字である。

アンケート結果：チューター、教員の対応はいかがでしたか？



「とても満足」「満足」の理由を尋ねると、多くの学生が「親切に丁寧に対応してくれた」「一緒に考えてくれた」「話しやすかった」「話をじっくり聞いてくれた」「話し合うなかでどのように書けばよいか見えてきた」といった点を挙げていた。当センターが心がけてきた「添削はしない」「対話を通して気づきを促す」「一緒に改善策を考える」方針が、学生の満足度につながっていることがわかった。

- ②「今後もライティングセンターを利用したいですか」との問いにも99%が「利用したい」と答えている。実際、2回以上利用している学生は全体の49%に上る。
- ③「相談してよかったと思う点」の問いには、多くの学生が「自分では気づくことのできなかった問題に気づけた」「客観的な視点を獲得することができた」「考えを整理できた」といった点を挙げていた。また「アウトラインの作り方がわかった」「引用の方法がわかった」「足りない部分などがわかった」など、文章を作成するうえで必要なことや約束事などが具体的にわかったり、不足している点などが明確になったりしたようだ。英語の個別相談では「冠詞の使い方」「単語の選択」や「さまざまな表現」を学ぶことができた、と答える学生が多かった。
- ④今年度から新たに「残った課題は何ですか」という設問も加えた。セッションを終えた学生は、これからさらに文章と向き合い、推敲を重ねることになる。セッションで浮かび上がった課題を整理し、明確にしたうえで退出してもらいたい、と考えたからである。「構成を考え直す」「重複部分を削る」「テーマを絞ってオリジナリティを出すこと」など、学生はさまざまな課題に気づいていた。

(6) チューターの研修

月に1回、45分間のチューター勉強会を行い、対応が難しかった事例を共有したり、今後相談が増えそうな事案(コース志望理由書などは、毎年同じ時期に募集・締め切りがある)の対策を話し合ったりした。また「文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み」(ひつじ書房)や『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』(ミネルヴァ書房)などのテキストを、空き時間を利用して読みこんだ。チューター勉強会の開催日時と各回のおもな議題は下記の通り。

日 時	議 題
4月5日(金)	・アカデミック・ライティングの個別相談件数を増やすために、学生にどう呼びかけたらよいか。
4月26日(金)	・ライティング・カフェ実施に向けて、内容と広報の検討。 ・メディアワークショップの課題、公務員・教員試験対策の相談にどう対応するか。
5月17日(金)	・ライティング・カフェ実施に向けて、最終調整。 ・セッションにおけるホワイトボード活用法。 ・事例研究。
6月14日(金)	・ライティング・カフェ第2弾の検討。 ・事例研究(学生に質問するときの言葉づかいの工夫)。
7月26日(金)	・後期の活動予定。 ・TECfolioのためのインサイト。
9月27日(金)	・多文化・国際協力コース志望理由書相談への対応。
11月1日(金)	・多文化・国際協力コース志望理由書の相談を受けての反省。 ・ライティング・カフェ第3弾の検討。
12月6日(金)	・マニュアルをどう作るか。
1月31日(金)	・来年度の活動計画。 ・繁忙期のリピーターに利用制限を設けるべきか。 ・リピーターをセンターに「依存」させないためには、どう指導すればよいか。

チューター、特任教員は、毎回相談が終わると学内のポートフォリオシステム「マイ・ライティング・ポッド」に報告書をアップし、全員で相談内容、対応、引き継ぎ事項などを確認・共有した。詳細な報告を残すことは、本学ライティングセンターの大きな特徴である。その分、チューター、教員の負担は大きいですが、報告書を丁寧に書くことが振り返りや学びに役立っている。また、対応に悩んだ点、相談後に「こう対応すればよかった」と気づいた点などもマイ・ライティング・ポッドに書き込み(チューター、教員のみが閲覧できる)、互いに知恵を出し合ったり、問題を共有したりした。

報告書は以下のような流れで書いている。

実施日時 ××年××月××日 ×時×分～×時×分
 対応者 ○○ ○○

【相談内容】

- ・××のブックレポート。2000字程度。
- 本全体をまとめるか、興味のある部分をピックアップして論じるか。
- 相談者Aさんは、興味のある部分をピックアップして論じたいとのこと。
- 締め切りは×月×日。
- ・書いてみたが、2000字も埋められなかった。
- ・しかも、書いているうちに混乱してきた。そのため、下書きもしない段階で来てしまった。

【確認した点】

- ・テーマを絞る
- テキスト『国際関係学』を読んで、特に「文化の問題」に関心を持った。
- しかし、書いてみたところ、全然字数が埋まらないので「経済の問題」についても書こうと思って少し書いてみた、とのこと。
- 確認したところ、本当の関心は文化にあるので、それで2000字書けるのならば文化の問題に限定したい、という。
- ホワイトボードに書きながら、一緒に考えることにした。
- まず「文化の問題」について、本に書いてあることをまとめてもらった。
- Aさんは特に、文化交流には狭義と広義のものがあるという点に着目。狭義のものは「表面的」で、広義のものこそ重要だということで、その理由を聞きながら進めていくと、
- 狭義の文化交流(外交など) — 国家主体
 一部の人のもの。国家同士の関係を反映
- 広義の文化交流(留学・旅行・文学を読むなど) — 個人主体
 誰でもできる。自分で情報を得られる
- そのため、広義の文化交流が他国の人を理解するのに役立つと整理してくれた。

では、広義の文化交流の中で特に何に関心があるのか、と尋ねると「文学」だという(もともとの作文でも少し第三世界の文学に触れていた)

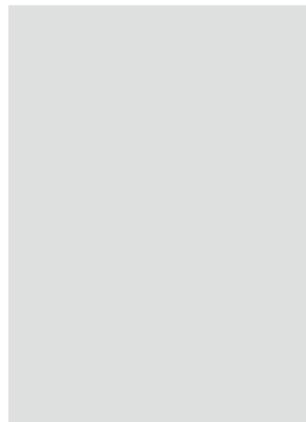
- 課題図書に基づき、国際関係と文学についてまとめてもらうと、以下のようになった。
- 世界文学—ヨーロッパ中心主義
- 第三世界の文学—民衆の立場にたったもの
- 世界文学の「普遍性」を批判しうる

そして、筆者のこの考えには「賛成」とのこと。
 その理由を聞く。

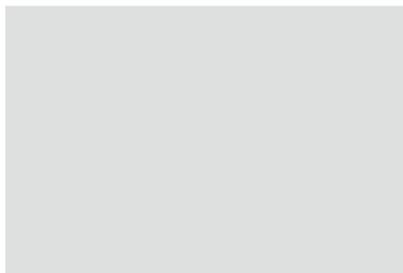
昨年の平和研究の授業でパレスチナ人の文学を読んだ経験が背景にあるとのことだった。文学が他者理解において、単なる情報の伝達以上に果たす役割に気づいたようだ。

ここで時間切れになってしまったが、自分でホワイトボードに整理しながら書きだしていったため、考えが整理された、この調子でやっていたら2000字くらいは書けそうだ、とすっきりした顔で帰っていった。

今回の相談はホワイトボードの積極的な活用が有効だった。 以上



英語個別相談の様子 (©伊藤真)



個別相談の様子 (©伊藤真)

(7) ライティング・カフェ

ライティングセンターの個別相談には事前予約が必要である。「予約するのは少し面倒」と思っている学生や、センターのことがよくわからず、予約をためらっている学生などを対象に、今年度初めて「ライティング・カフェ」を実施した。昼休みの時間を利用して、予約なしで気軽にセンターに立ち寄ってもらい、その日の担当の教員、チューター、また居合わせた学生と、ライティングに関してざくばらんに話し合う、という企画だ。

①開催日時

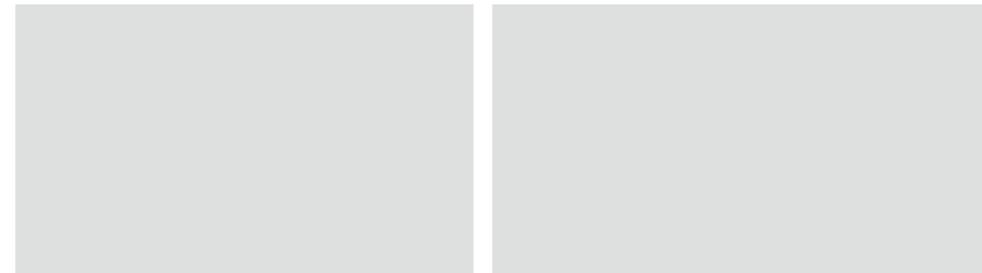
前期は5月20日から31日までの8回と、7月8日から19日までの7回、後期は12月9日から20日までの7回、それぞれ昼休みの12時10分から12時55分まで実施した。場所は本館にあるライティングセンター事務室。お菓子やお茶も用意し、「カフェ」の雰囲気を出した。

②実績

初めての試みだったが、参加者はのべ57名と、予想を上回る数字となった。内容はレポートや授業の課題が23件、就職関連が9件、その他、「ただおしゃべりしたかった」などが8件。

「レポートの書き方がわからない」という1年生に上級生がアドバイスしたり、就職活動に不安を抱える3年生に4年生が答えたりするなど、随所で「ピア・ラーニング」が見られ、日ごろの個別相談とは一味違う「学び」や「気づき」があった。

また、ライティング・カフェに参加した学生が、その後個別相談の予約をするなど、センターを身近な存在として知ってもらい、利用してもらう、という目的も果たせた。今後はテーマを決めて「ミニ講座」形式にする方法なども考えていきたい。



ライティング・カフェの様子

2. 講演会「書くということと私」

さまざまな分野で「書く」ことに携わってきた講師を招き、職業観、書く喜びや苦労などを聞く講演会。学生が一番集まりやすい水曜日の5限（午後4時20分～5時50分）に実施する。2013年度は前期、後期に1回ずつ開催。一般にも公開した。

広報の仕事などを通して社会に貢献してきた女性、視覚障がいを持つ外国人ながら、日本語でエッセイを書いた男性など、「書く」ことで社会に大切なメッセージを発信し、社会にインパクトを与えてきた人たちを講師に迎えた。両講演会とも文部科学省平成24年度私立大学教育研究活性化設備整備費補助金により、TV会議システムを用いて関西大学にも同時中継した。

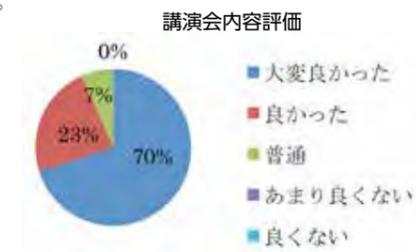
(1) 「人生無駄なし！食と広報で社会に貢献する」

6月26日（水）開催。講師は株式会社 office3.11 代表、井出留美氏。井出氏は外資系食品メーカーの広報室長として長く活躍していたが、東日本大震災を機に退社し、食品ロスと貧困問題に取り組む日本で初めてのフードバンク団体「セカンドハーベスト・ジャパン」の広報室長に転身した。

広報の仕事とはどういうものか。「書く力」が人とのネットワークづくりにいかに役立ち、それが仕事にどのようにつながってきたのか。自身の挫折体験なども交えて、わかりやすく語った。井出氏は「セカンドハーベスト・ジャパン」のプレゼンテーションで、日本PR協会2011年度PRアワードグランプリ、ソーシャル・コミュニケーション部門で最優秀賞を受賞している。話し方、パワーポイントの使い方なども、大いに勉強になった。参加者64名（うち関西大学16名）。

感想抜粋

- ・「書くことは心の健康」という言葉に共感しました。海外でボランティア活動をしていた際に、日記を書くことで自分自身を励まし、前向きになることができました。これからも書くことに向き合って頑張っていこうと井出さんの講演を通じて思えました。
- ・人生の岐路に立ったとき、どのように行動すれば良いのかというお話も盛り込まれていて、大変充実した時間を過ごせました。
- ・タイトル通り、人生に無駄なことは何もないんだなと思いました。
- ・社会人の私が聞いても、とても勉強になりました。





(2) 「わが盲想」を書いて」

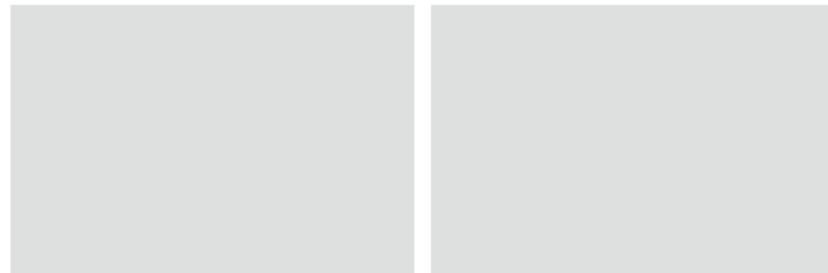
11月20日(水)開催。講師は東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程に在籍するモハメド・オマル・アブディン氏。

アブディン氏はスーダン出身。12歳で視力を失い、19歳で来日した。福井県立盲学校で鍼灸を学んだ後、現在は大学院でスーダンの紛争問題と平和について研究している。講演では目の見えないアブディン氏が日本語をどのように習得し、いかにして日本語でエッセイ『わが盲想』の出版にまでこぎつけたかを、だじゃれも交えながらユーモラスに語った。

「だけれども、その人の中に大きな物語が存在する」「まず自分の生活を冷静に振り返り、文字にしてみる事が大切」というアブディンさんの話に、参加者は耳を傾けた。参加者54名(うち関西大学14名)。

感想抜粋

- ・「書きたい」「伝えたい」という気持ちに素直になろうと思いました。
- ・「目が見えない」ということを感じさせないパワーに圧倒されました。私も冷静に自分を振り返ってみたいと思います。
- ・学ぶということについて、新たな刺激を受けました。
- ・母校での講演をこのように関西でも聴かせていただける機会に感謝いたします。まるでその場にいるような臨場感をもって聴き、笑い、拍手していました。



3. 講演会「女性のリーダーシップから学ぶ」

女性が社会でリーダーシップを発揮するためには、何が必要か。学生に多様なロールモデルを示し、キャリアや生き方を考えるきっかけにする講演会。2013年度は前期・後期に各1回、実施した。水曜日の5限(午後4時20分～5時50分)に開催。一般にも公開したほか、両講演会とも文部科学省平成24年度私立大学教育研究活性化設備整備費補助金により、TV会議システムを用いて関西大学に同時中継した。

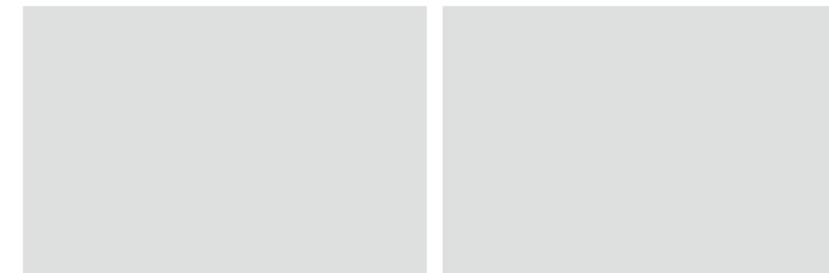
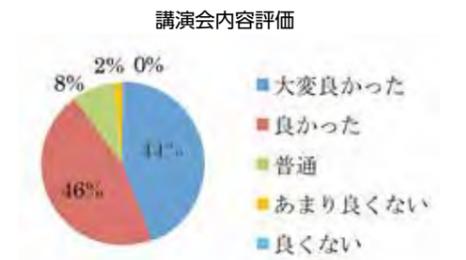
(1) 「自分のメンターを見つけよう!～女子学生の就職とキャリア形成について～」

5月29日に開催。講師はジャーナリストで昭和女子大学特命教授の福沢恵子氏。福沢氏は大学在学中から一貫して女性のキャリアについて考え、研究してきた。専門はキャリア開発論。

講演では「メンターとは何か」に始まり、女性にメンターが必要な理由、良いメンターの条件、そしてメンターはどこで見つけるか、などが具体的に示され、学生たちは熱心に聴き入った。参加者86名(うち関西大学16名)。

感想抜粋

- ・女性のライフスタイルの多様さゆえにメンターは大切な存在なのだと思う。アンテナを立てて他者から学ぶ姿勢を身につけることで、自分の人生選択を豊かにしていける可能性があるのだと感じた。
- ・メンターという視点から就活を考える機会になりました。
- ・社会人との接触を図ろうという思いが高まった!



(2) 「私の歩んできた道～マスコミから国連まで」

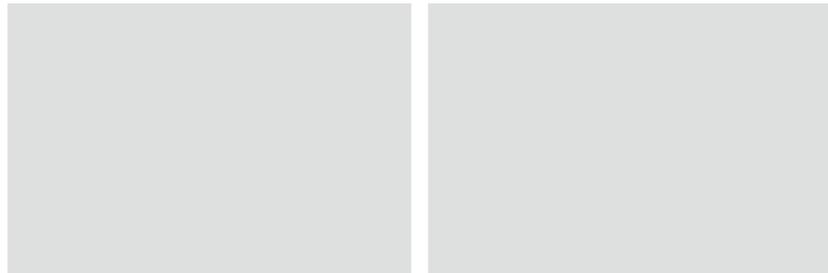
12月4日開催。講師は本学を1957年に卒業。朝日新聞記者、フジテレビニュースキャスターをへて国連婦人の地位委員会日本代表、世界婦人会議日本政府代表などを歴任し、現在は国連女性機関日本国内委員会理事を務める有馬真喜子氏。参加者は51名(うち関西大学13名)。学内の就職ガイダンスと重なったため、学生の参加が予想よりも少なかったのが残念であった。

華々しい経歴をもつ有馬氏だが、「道は意外なところから開ける」というのが実感だそう。自身のキャリアの変遷を振り返りながら、学生たちには「1年後、3年後、10年後の自分を考えよ」「迷ったら、やってみる」「しっかり学べ」「欲張って、チャーミングに生きよ」とエールを送った。

感想抜粋

- ・今後大学生活を送るにあたって、何事にもチャレンジしてやる事が大切だということを知ってよかった。殻を作らないで、やってみようと思ったことに果敢にチャレンジしてみたと思った。
- ・有馬先生の生き方に感動いたしました。国連の仕事で御苦労も多かったと思います。女性の地位についてもよくわかりました。
- ・若い女性に対する三つの提言へのお話のすべてに感銘を受けました。





4. 日本語ライティング講座

「書く」ことに関わる仕事をしているさまざまな分野の職業人を講師に招く「日本語ライティング講座」は、授業が終わった午後6時から7時半まで開く全4回の講座である。単位にはならないものの、書くことを楽しみながら、社会やキャリアについて学べる少人数の実践的な講座は毎回人気を集めている。今年度は「書く」だけでなく、「発信する」力の養成をも意識した講座にした。

前期に2講座、後期に2講座開催。3講座は定員を20名まで増やして実施した。また、アカデミック・ライティングも重視し、レポートを書くための基本の講座も設けた。

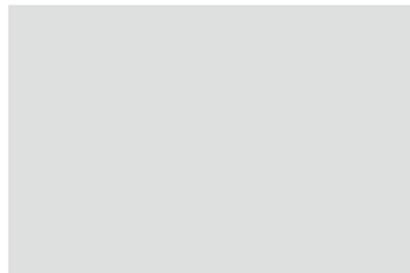
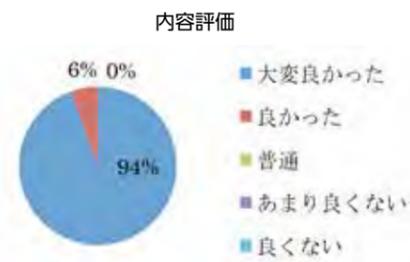
(1) 「ちゃんと伝えるルール。」

6月4日から25日までの火曜日全4回実施。講師は大広クリエイティブディレクターでコピーライターの花岡邦彦氏。コピーライターの仕事に興味をもつ学生はもちろん、広く言葉に関心のある学生を対象にし、エントリーシートや自己PRにも役立つ講座にした。

最終回では「自分を広告する」コピーを学生がそれぞれ考えた。プロのアートディレクターが顔写真を撮影。写真とコピーを合わせてポスターにし、後日学生にプレゼントした。参加者は言葉を考え、選びぬき、表現する苦労、自分の作品がプロの手で作品になる驚き、喜びなどを体験した。受講者19名。

感想抜粋

- ・コピーを考えるのはとても難しかったです。歩いている時や、ふとした時に考えてみたのですが、自分のキャッチコピーというのは自己分析にもなりました。たくさん考えた中から使えるものは少なく、コトバを伝えるってこんなに難しく面白いかと思いました。
- ・言葉がすごく好きで参加したのですが、プロのコピーライターさんは、言葉が生き物だということをとて意識していることに感動しました。



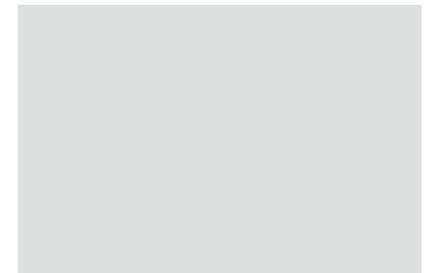
(2) 「『編集力』を磨く！」

6月7日から28日までの金曜日全4回実施。講師は出版社コモンズ代表でジャーナリスト大江正章氏。編集者

の仕事とは何か。どうすれば編集者になれるのか。どんな技が必要か。ベテラン編集者である大江氏が体験に基づきながら話した。講義だけでなく、学生がグループに分かれて雑誌の企画を考え、プレゼンテーションを行うワークショップも実施。社会に出てからも役立つ「編集力」や「発信力」を鍛えた。受講者20名。

感想抜粋

- ・趣味や考え方が異なる人同士で一つのものを作り上げるということがとても新鮮で刺激になりました。
- ・プレゼンや小論文など、課題もあり大変だったが、久しぶりに日本語と向き合った気がします。
- ・わかりやすい文章を書くために、意識しなくてはいけないことがたくさんあることに驚きました。
- ・ただ聞いているだけではなく、実際に書いた文章や考案した企画をみていただけて、とても勉強になりました。

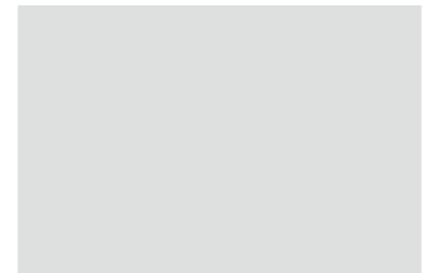
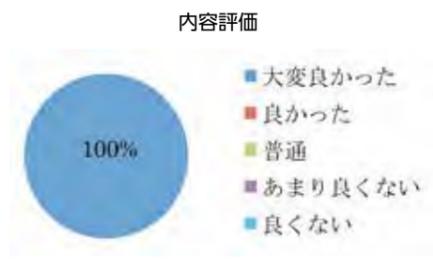


(3) 「伝わる文章を考える」

11月15日から12月6日までの金曜日全4回実施。講師は朝日新聞教育事業担当補佐の薮塚謙一氏。新聞を読んで、自分の意見を述べるグループワークや、「伝わる」文章を書くための実践を行った。受講希望者が多く、3年生を優先した。就活も意識した内容だったが社会に出てからも役にたつヒントが詰まった講座になった。受講者20名。

感想抜粋

- ・「文章の書き方」だけでなく、そのための頭の使い方、自分の見つけ直し方、様々なことを学びました。
- ・ESの練習になるかな、と気軽な気持ちで申し込んだこの講座でしたが、いま本当に充実感であふれています。書き方一つで文章がこんなにもキラキラと輝くとは！
- ・毎回課題に対しても頭をフル回転して考えて、何度も直して、とても体力を使うものでしたが、考えること、言葉にすること、書くことがすごく楽しかったです。人生で初めて、書くことが楽しい！と思いました。



(4) 「レポートを書く基本の『き』」

11月18日から12月9日までの月曜日全4回実施。ライティングセンターの飯野朋美・特任助教が担当した。授業の課題レポートはどのように書けばよいのか。感想文と何が違うのか。剽窃ってどういうこと？ 日々、学生の個別相談に応じている教員だからわかる、学生の悩みや不安に丁寧にこたえる講座にした。1年生や2年生

を優先。受講者 16 名。

感想抜粋

- ・「レポート」自体が何なのかわからないところからスタートしたので、一から学べる機会があってよかったです。特にアウトラインづくりは効率的なやり方だと感じたので早速実践してみます。
- ・参考文献の書き方や引用のやり方がわかってよかった。
- ・いまさら聞けないことも細かく教えていただけて助かりました。

内容評価



5. 実践英語ライティング講座

本学の学生は留学に限らず、旅行やサークル、フィールドワークなどで海外に出る機会が多い。そこで、自己紹介や自身の活動について、英語できちんと説明できる力を養ってもらおうと 2014 年 1 月 10 日、小平キャンパスで「実践英語ライティング講座」を開催した。ブリティッシュ・カウンシルの協力を得てネイティブの講師を招き、午前 9 時から午後 4 時 10 分までの集中講座にした。冬休み中にもかかわらず、19 名が参加した。

講座の目標は ①英語で発信することに慣れ親しみ、自信をつける ②メールでの返事書き方や、フォーマル／インフォーマルな書き方の違いを理解する ③アカデミックライティングの基礎を学ぶ の3点。とくにメールの書き方やフォーマル／インフォーマルの度合いによって書き方を変える工夫等は、日ごろ授業ではなかなか学習する機会がなかったようで、学生に好評だった。アンケートの結果を見ても学生の満足度は高く、実践的な英語ライティングを学ぶよい機会になったようだ。

感想抜粋

- ・カジュアルな会話表現から e-mail の書き方、アカデミックライティングまで一日でたくさん学ぶことができたので、参加してよかった。大学の課題や海外へ行ったときなどあらゆる場面で活用していきたい。

内容評価



6. 授業科目

(1) 正課科目

共通科目として、前期に「日本語ライティング Aa・Ab・Ac」を、後期に「日本語ライティング Ba・Bb・Bc」を開講した。いずれも週に 2 時間、2 単位。定員 20 名の少人数クラスである。

「日本語ライティング Aa・Ba」はライティングセンターの特任教員が担当する実践的な文章講座。Ab・Bb では「文章を書くのは苦手」という学生を対象に、ショートエッセイを書く。Ac・Bc はアカデミックな文章から就職活動に必要な文章作成の訓練も行なうなど、それぞれ特色あるライティングの授業を提供した。

受講者数

科目名	履修者数 / 前期・後期
日本語ライティング Aa・Ba	20・20(名)
日本語ライティング Ab・Bb	20・20(名)
日本語ライティング Ac・Bc	19・18(名)

日本語ライティング Aa「授業に関するアンケート」感想抜粋

- ・書くことは考えることである、ということ、この授業を通して学ぶことができました。
- ・自分の文章に自信がありませんでしたが、みんなに読んでもらいたい、という気持ちに変わっていきました。
- ・自分の思っていることをアウトプットする訓練ができて、自分が成長できた気がします。

(2) カリキュラムとの連動

①メディアワークショップとの連携

「電子書籍をつくる」という課題に取り組むメディアスタディーズ・コースの 3 年生必修授業と連携し、4 月 24 日 1 限に、ライティングセンター特任教員が「インタビューの作法」について 1 時間の講義を行った。受講者は 32 名。

同ワークショップでは①受講者がペアになってお互いをインタビューし、記事にまとめる②社会の第一線で活躍する方（おもに卒業生）を呼んで講演会を行い、その後インタビューもして、記事を電子書籍にまとめる（グループワーク）、といった実習がある。

受講者は記事を書く際には必ずライティングセンターの個別相談を利用するよう、指導教員から指示されたため、個人で、あるいはグループで相談に訪れる学生が相次いだ。また、ライティングセンターが実施する「書くということと私」講演会に登壇した講師をインタビューするグループもあり、センターの講演会、日本語ライティング講座などとの連携もあった。

②大学生のための新聞読み方講座

「書く」力を培うためには「読む」力が欠かせない。新聞を読む習慣をつけることで「考える」力も身につけよう、と 5 月 14 日の日本語ライティング Aa の授業時間内に「大学生のための新聞読み方講座」を実施した。授業の受講生以外も参加できるようにし、31 名が参加した（1 年生 5 名、2 年生 5 名、3 年生 18 名、4 年生 3 名）。

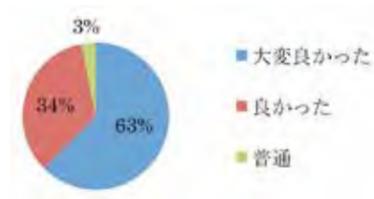
講師は、本学卒業生で朝日新聞社教育総合センターの北郷美由紀氏。「新聞には喜怒哀楽がある。記事を読んで、

自分がどんな記事に反応するか、その反応をどう『意見』に変えていくか、が大事だ」と述べた。実際に新聞をめくりながらの授業は、日ごろあまり紙の新聞を読まなくなっている学生たちに新鮮だったようだ。

感想抜粋

- ・新聞記事や社会の様々な問題に反応するだけでなく、意見し、伝えられるようになりたいです。
- ・新聞のことから就活のこと、働く女性としての言葉まで、心に残るお話ばかりでした。
- ・これからの自分のためになる話ばかりでした。

内容評価



7. 高大連携事業の企画

(1) 高校生エッセー・コンテスト

高校生を対象にした「第14回津田塾大学エッセー・コンテスト」を実施した。募集期間は8月1日(木)から9月3日(火)まで(消印有効)。

米国の公民権運動を推進するうえで大きな影響力をもった一人の女性、ローザ・パークスに手紙を書こう、という課題だった。英語の場合は400words程度、日本語の場合は1200字程度。

ローザ・パークスは中学・高校の教科書にも取り上げられる人物のため、高校生にはなじみのある題材だったようだ。応募作品は769編(英語作品638編、日本語131編、女子504人、男子265人)と昨年と比べ、大幅に増えた。パークスが受けた差別を自らの体験などに引きつけて生き生きと語る作品が多かった。

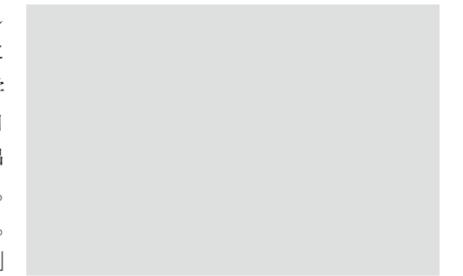
田近裕子・ライティングセンター長を審査委員長に、ライティングセンター運営委員、同特任教員の計3名で審査をし、最優秀賞1名、優秀賞7名を選んだ。本コンテストは「書く力」「伝える力」の大切さを高校生にアピールすることで、高大連携を推進する役割も果たした。



(2) 長野西高校出張講義

5月22日、長野県立長野西高等学校(長野市)の職員小論文研修会にライティングセンターの特任教員 大原悦子を講師として派遣した。同校では全教員が小論文指導にあたるため、本学ライティングセンターの個別相談

ではチューターが学生とどのように対話し、学生の気づきを促しているのか、という点に関心をもっていた。研修会には、同校に教育実習に来ていた大学生も含め、教員約60名が参加した。本学ライティングセンターのセッションの流れや、学生の気づきや自立を促すためにチューターが心がけていることなどを紹介し、出席者全員がグループになって参加するワークショップも実施した。ふだんは教員同士、こうした形で話し合う機会は少ないそうだ。各グループとも熱心に語り合い「思いがけない気づきがあった」という感想が寄せられた。



グループに分かれて、相手から話を引き出すワークショップ。教育実習生も参加し、熱気あふれるセッションになった。

8. キャリア支援

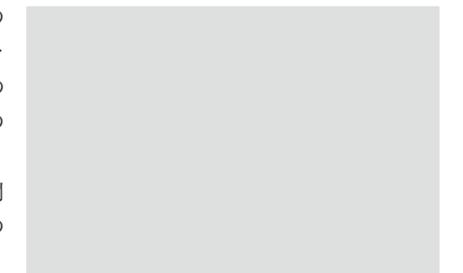
(1) 朝日新聞社土曜見学会

新聞社の仕事に関心のある学生を対象に、土曜日の午後、朝日新聞東京本社を見学する。一般の見学コースでは見ることができない編集局内や論説委員室などにも入ることができ、夕刊当番編集長や論説委員らと意見交換も行える貴重な機会だ。本学だけでなく、都内の他大学からも参加する。

2013年度は前期7月13日と後期12月7日に実施し、前期8名、後期7名の学生が参加した。毎回ライティングセンター特任教員も同行する。

感想抜粋

- ・津田塾のOGで、朝日新聞の記者である方に女性、母親目線での話を聞くことができたことも貴重な経験となりました。社説を書いている方や経済部長からは、記者であるけれども「一人の人間」としての個人的な話、記者を志望した理由や人生経験の話をしていただき、勉強になりました。
- ・会社で働いている自分をイメージするのに役立ちました。大学関係以外の社会人からは、なかなかお話を聞く機会がなかったので、有意義な時間を過ごせました。
- ・まさに「百聞は一見にしかず」だと思いました。



(2) 津田塾大学×朝日新聞「特別キャリア塾」

就職支援推進プログラムとの共催。朝日新聞東京本社の現役記者が学生のエントリーシートを添削し、それをもとに模擬面接も行うという企画だ。2012年度初めて実施し、学生の満足度が98.7%と非常に高かったため、2013年度も実施した。

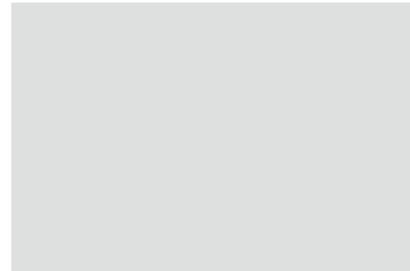
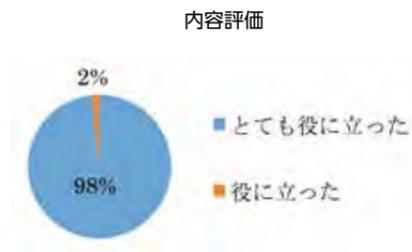
学生は2013年12月18日までにエントリーシートを書き、2014年1月12日、本学千駄ヶ谷キャンパスで模擬面接を行った。

参加者は59人。当日は学生を2つの回に分け、その中でさらに1班5～6人のグループを作り、模擬面接を行った。学生は面接を受けるだけでなく、面接官役も体験する。仲間の課題を見つけながら自分を見つめ直し、就職活動や働く意味を改めて考える機会になった。

感想抜粋

- ・ESの添削をしていただけるだけでなく、模擬面接をグループでできたのがとてもよかったです。自分の練習に

なっただけでなく、他の人がどんなことを話しているのか、そこから学ぶことが多く、とても参考になりました。
 ・面接やESにおいて必要なポイントをわかりやすく説明していただけてとても参考になりました。面接で業界研究・企業研究が必要だということをもっと実感したので、これからしっかりしていこうと思いました。自分の就職活動に喝を入れていただきました。



9. 啓発・広報

(1) 本学ライティングセンターを視察に訪れた学校一覧

①立命館大学

日時：2013年10月22日（火）

訪問者：薄井 道正氏（教育開発推進機構 教授）
 吉岡 路 氏（教育開発支援課 課長補佐）
 今川 新悟氏（教育開発支援課 課員）

目的：ライティングセンターの運営やチューターの育成法などについて

②大谷大学

日時：2014年1月17日（金）

訪問者：村山 保史氏（准教授・高大連携推進室長）
 植垣 光弘氏（高大連携推進室企画課長）

目的：ライティングセンターの運用方法や事務組織の在り方などについて

③大阪大学

日時：2014年1月28日（火）

訪問者：姚 馨氏（大型教育研究プロジェクト支援室）

目的：研究者向けライティング支援プロジェクトを立ち上げるにあたり、センターの現状把握について

④八戸工業高等専門学校

日時：2014年3月7日（金）

訪問者：戸田山 みどり氏（総合学科 教授）
 齋 麻子氏（同 准教授）

目的：ライティングセンターの取り組み・相談指導方法、ライティング関連科目との関係性について

⑤新潟大学（予定）

日時：2014年3月25日（火）

訪問者：ハドリー浩美氏（教育・学生支援機構）

目的：個別相談を含むライティングセンターの活動について

(2) 活動内容に関するメディア掲載

①読売新聞（朝刊）

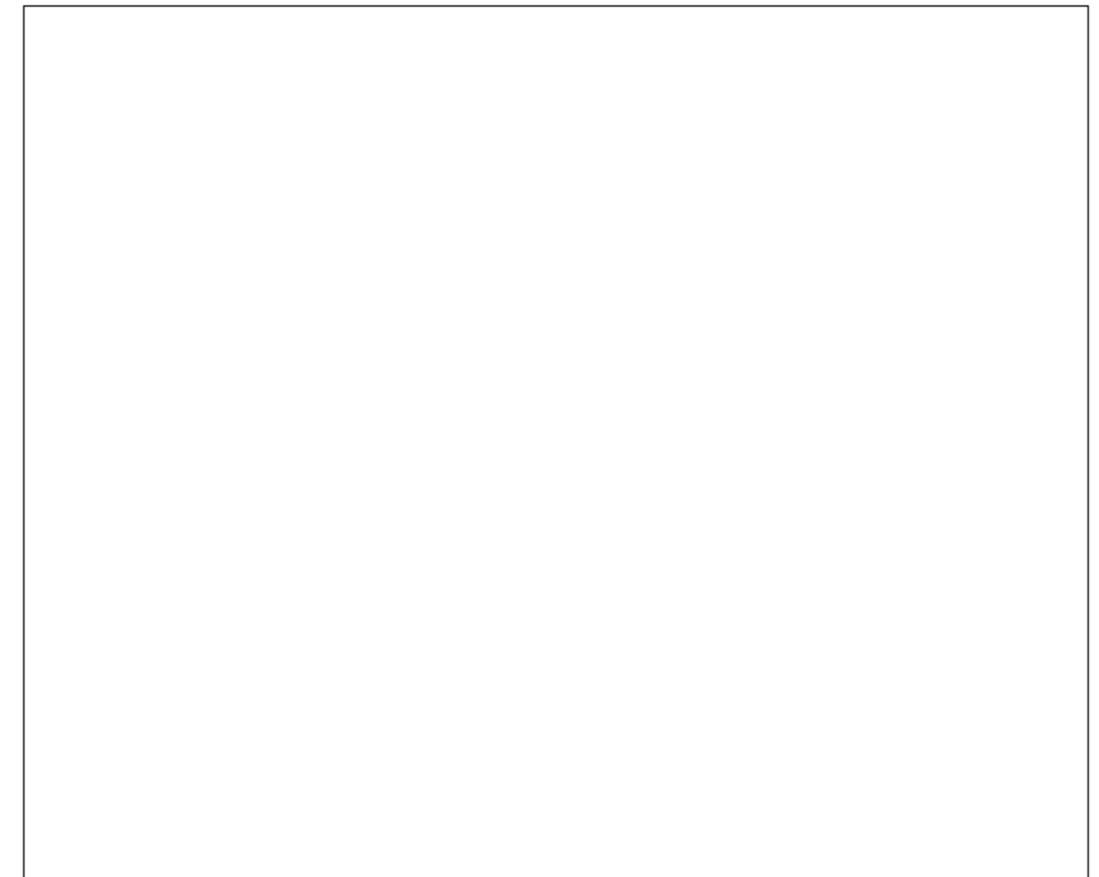
・日付：2013年6月1日（土）

・内容：資料①のとおり

②朝日新聞（朝刊）

・日付：10月22日（火）

・内容：資料②のとおり



資料① 2013年6月1日（土） 読売新聞

V

eポートフォリオシステム
開発部会の取組

本取組では、取組の柱の一つとして、ライティングに特化したeポートフォリオの開発を掲げている。昨年度は、学生のライティングにおける行動と意識、教員のライティングに対する意識と学生指導のあり方、社会において必要とされるライティング力と求められる人物像についての調査を行った。今年度は、その調査結果の分析を踏まえて、eポートフォリオの要求仕様の策定、試験運用システムの実装へと開発プロセスを進めてきた。本章では、その概要と作業プロセスについて報告する。

1. はじめに
2. TECfolioの開発
 1. 開発方針
 2. 開発体制
 3. 開発プロセス
 4. 行動観察調査結果の分析
 5. シナリオ分析
 6. プロトタイプ作成
 1. 全体機能概要
 2. 利用者のロール
 3. 「学生」における機能詳細
 4. 「スタッフ」における機能詳細
 5. 「運営管理者」における機能詳細
 6. その他
 7. 試験運用システムの実装
3. 次年度に向けて

〈資料〉コアチームの活動記録

- A1. 要求仕様策定に向けての行動観察調査の分析
- A2. 要求仕様の検討：ペルソナ・シナリオ分析
- A3. プロトタイプの作成
- A4. 試験運用システム実装に向けての検討

資料② 2013年10月22日(火) 朝日新聞

1. はじめに

2013年度のeポートフォリオシステム開発部会（以下ePf部会と省略）の取組では、2012年度の行動観察調査の結果を踏まえて、2014年度から運用予定のTECfolio試験運用システムの開発を行った。設計のベンチマークとして、国際規格であるISO9241-210“インタラクティブシステムのための人間中心設計”を参照している。すなわち、1)「利用状況の理解と明示」、2)「ユーザ要求の特定」、3)「要求を満たす設計の作成」、4)「設計の評価」の4つのプロセスを反復する。

今年度の開発では、まず、TECfolioの核となるeポートフォリオシステム部分について、1)昨年度に引き続き行動観察調査の結果データのさらなる分析と把握を進め、2)インサイト（要求事項）の抽出を行った後に要求仕様としてまとめた。また、関西大学と津田塾大学のライティング施設の予約システム部分については、1)ヒアリング、2)要求事項の抽出、3)プロトタイプ作成、4)プロトタイプを用いた関係者のレビューを行った後、実装へと移行した。

2. TECfolioの開発

2.1 開発方針

本取組では、〈考え(Think)、表現し(Express)、発信する(Convey)〉能力を備えた人間を養成することを目的として、学生、教員といった枠組みにとどまらず、社会の多くの組織・団体との連携を視野に入れ、世代・立場・性差を超えたライティングによるコミュニケーションの形成を目指している。また、両大学のみならず、他大学への波及も視野に入れている。このため、TECfolioはライティングに特化した支援システムとして、幅広い組織とユーザの要求事項に基づき、これらの課題を解決する機能を備えなければならない。

そこで昨年度は、人間中心設計における1)「利用状況の理解と明確化」を目的として、学生、教員、学外のステークホルダ（企業、団体）について質的調査（行動観察調査）を実施した。なお、関西大学ライティングラボ（以下ラボと省略）については、関西大学における取組「文学士を実質化する〈学びの環境リンク〉」で開発されたライティング支援システム「まなかんウェブ」の要求仕様策定の際に、文学部学生とライティングラボTAに対する行動観察調査とユーザビリティテストを終えている。このため、本取組の調査では対象を全学部、学生、教員、そして学外ステークホルダへと範囲を拡大している（詳細は2012年度報告書を参照）。関西大学の学生を人文学系、社会学系、理工学系の3セグメントに分割し、各セグメントにつき4年次生と2・3年次生から2名ずつ、合計12名の学生を被験者として協力してもらった。また、教員についても先のセグメントから2名ずつ合計6名、ステークホルダについては学外の企業や団体から5団体について調査に協力していただいた。なお、津田塾大学ライティングセンター（以下センターと省略）のスタッフからは、ヒアリング調査を実施することによって「利用状況の理解と明確化」を行っている。その後、これらの結果を踏まえて、2)「ユーザ要求の特定」としてペルソナ/シナリオ法による分析、3)「要求を満たす設計の作成」としてシステムの画面プロトタイプ作成、その結果に基づき実装へと移行した。

2.2 開発体制

関西大学と津田塾大学で共同開発を進めるにあたり、利用者（TA、教員）・運営者（教員、事務局）・開発者（関西大学ITセンター、開発企業）が開発に共同で参画する体制を敷いた（図1）。これらの組織は、開発の段階に応じて随時チーム構成を変更して作業を進めた（図2）。

まず、フェーズ1（6-8月期）とフェーズ2（8-11月期）における「要求仕様検討会」では、関西大学ライティングラボのTA2-3名に協力を得、関西大学専任教員1名と特任教員1名の合計4-5名で合計20回の検討会を開催した。この検討会では、前年度に実施したユーザに対する行動観察調査結果データ分析と要求事項の抽出および解決案の検討を行った。

つぎに、フェーズ3（11-翌1月期）では、開発の中心となるコアチームとして、関西大学より2名の教員、津田塾大学より1名の教員、合計3名の教員が中心となって開発を進めた。コアチームは、合計18回のミーティングを行い、フェーズ1と2で得られた結果から組織（大学、ライティングラボ/センター、ステークホルダ）とユーザ（学生、一般教員、ライティングラボ/センターの教員とスタッフ）の要求事項の把握に努め、問題の分析、解決策としてのプロトタイプを作成した。

その後、フェーズ4（12-翌3月期）では、コアチームに加え、関西大学ITセンターと開発企業とが参加する「開発者ミーティング」を合計10回ほど開催した。コアチームはこのミーティングで開発企業にプロトタイプを示し、実装に際しての課題について検討を行った。

上記一連の経過は各大学のePf部会メンバーにメールリストと対面によって随時報告され、月一回開催されるePf部会ならびにプロジェクト運営委員会への報告が行われた。

このように、両大学の利用者、運営者、開発者が密に協働しながら、ユーザの要求に基づいたユーザブルで汎用性が高いシステムの構築を目指した。

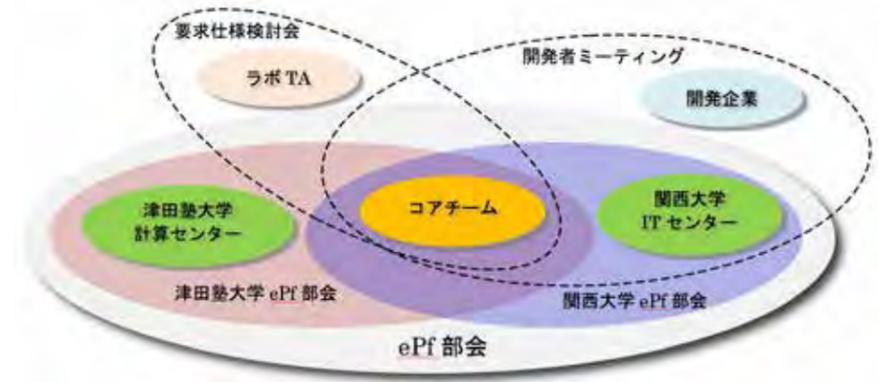


図1 開発体制

年度	月	フェーズ	ePf 部会	要求仕様検討会	コアチーム	開発企業						
H.25	3月			ワークショップ		基盤整備						
H.26	4月	フェーズ1… 調査結果分析	フェーズ2…ペル ソナシナリオ	フェーズ3… プロトタイプ	フェーズ4…試 験システム実装	ベースシステム構築	部会発足	関西大学 ITセンター	開発企業			
	5月						第1回			ベースシステム		
	6月						第2回				検討会発足	
	7月						第3回				インサイト抽出	
	8月						第4回				ペルソナ分析	
	9月						第5回				プロトタイプ	
	10月						第6回					シナリオ分析
	11月						第7回				試験システム 実装検討	
	12月						第8回					試験システム 実装検討委
	1月						第9回					
2月	第10回											
	3月											

図2 開発工程

2.3 開発プロセス

TECfolio 要求仕様策定に際しては、先述の ISO 9241-210 人間中心設計 (HCD: Human-Centered Design) に基づき、ユーザの満足度と利用度が高いシステムの構築を目指している。HCD では以下の (1) - (4) にあげられる開発プロセスが定義されている [1]。

(1) 利用状況の理解と明示

実際の活動例：行動観察調査等の質的調査

(2) ユーザ要求の特定

実際の活動例：ペルソナ・シナリオ法による分析

(3) 要求を満たす設計の作成

実際の活動例：プロトタイプ (試作) の作成

(4) 要求に対する設計の評価

実際の活動例：ユーザビリティテストの実施

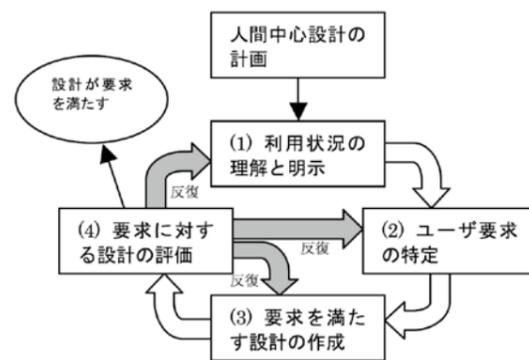


図3 人間中心設計による開発プロセス

このプロセスは、まず(1)から(4)の順に実施され、(4)の評価の結果、不満足な結果となった場合は、(1)(2)(3)のいずれかに戻り、ユーザの満足度が一定のレベルになるまで、かつ、コストが許される限り繰り返される(図3)。ePf 部会では、このHCD プロセスによってプロトタイプを作成し、これをシステム化することによってユーザの満足度と利用度が高いシステムの構築を目指している。

なお、従来のソフトウェア開発方法では、要求仕様策定に際して開発者が発注者(ユーザではない)にヒアリングを実施する。ヒアリング結果に基づいて、開発者は善意で様々な機能を付加してシステム構築を行うが、ユーザの要求を理解していないことが多く、結果的に実際のユーザにとっては不満を残す結果となることが、残念ながら過去の例から予想される。

HCD プロセスの“(1)利用状況の理解と明示”を得るためには、観察や面接による行動観察調査やフィールドワークなどの質的調査が推奨されている [2]。質的調査では、特定の利用状況や課題遂行についてユーザの状況を詳細に把握し、潜在的な要求や新たな仮説を求めめることを目的として実施される。少数の標本について観察や面接インタビューなどを行い、得られた質的データ(テキスト)について、帰納的な方法で探索と洞察を行う。この方法は対象の内面や価値観を記述し理解することに優れているが、調査では虚心かつ謙虚に対象者を観察すること、データ分析に洞察力を要求することから、主観的になりやすい。このため、ePf 部会では、複数人の開発者とユーザからなるワークショップやディスカッションによって分析を進め、方法、プロセス、結果を開示し、詳細な説明をすることによって、検証性が得られるよう努力している。

一方、量的調査では一定の標本数をもって母集団の性質を推定し、既存の理論(仮説)を検証するのに有効である。適切な方法(標本数、標本化手法、検定手法など)を取れば調査の再現性は高く妥当性も得やすい。代表的な手法であるアンケート調査(質問紙法)は、低コストで実施でき集計も簡単であると考えられている。しかし、

量的調査では未知の仮説を抽出することには向いておらず、既存の仮説の検証を行うにとどまる。質問項目として記載できるのは調査者の仮説から導出した項目のみであり、それを越えた未知の知見を質問項目に取り入れることは困難である。また、質問はバイアスを排除する記述が求められるとともに、被験者の読解力や洞察力に依存しない表現が要求されるため、妥当な質問紙を準備するために何度もパイロット調査を繰り返し、項目を練り直さなければならない。結果的に、このような方法はコストがかかる上に、ユーザの潜在的な要求を得る目的に合致しておらず、システム要求仕様の策定には不向きであると判断した。

上記のことから、TECfolio のシステム要求仕様を策定するにあたっては、HCD を採用し、主たるユーザである学生の「利用状況の理解と明示」を目的とした質的調査(行動観察調査)を前年度に実施した。

2.4 行動観察調査結果の分析

TECfolio 要求仕様の策定に際して、レポート・卒業論文など大学でのライティング活動のプロセスでどのような支援が求められているのかを探る必要がある。このため、行動観察調査の結果から、学生、教員、社会(ステークホルダ)の要求を抽出し、それを TECfolio の設計、開発に取り入れることを目的としてさらなる分析を行った。

方法としては、まず行動観察調査のワークショップ(2013年2月3日に実施)で得られた21個のインサイト(要求事項に関する洞察)を基に、2つの分析課題を段階的に設定し、関西大学教員、関西大学ライティングラボ TA でチームを組み、検討会を行った。第1段階では、インサイトの結果から、ライティング活動のプロセスにおいて、TECfolio が提供する機能に関する分析と検討を行った(図4)。

続く第2段階では、第1段階で提起された支援を実現するために、既存のシステムから参考となる機能とその利用コンテキストを抽出し、TECfolio の具体的な機能に関する検討を行った(図5)。

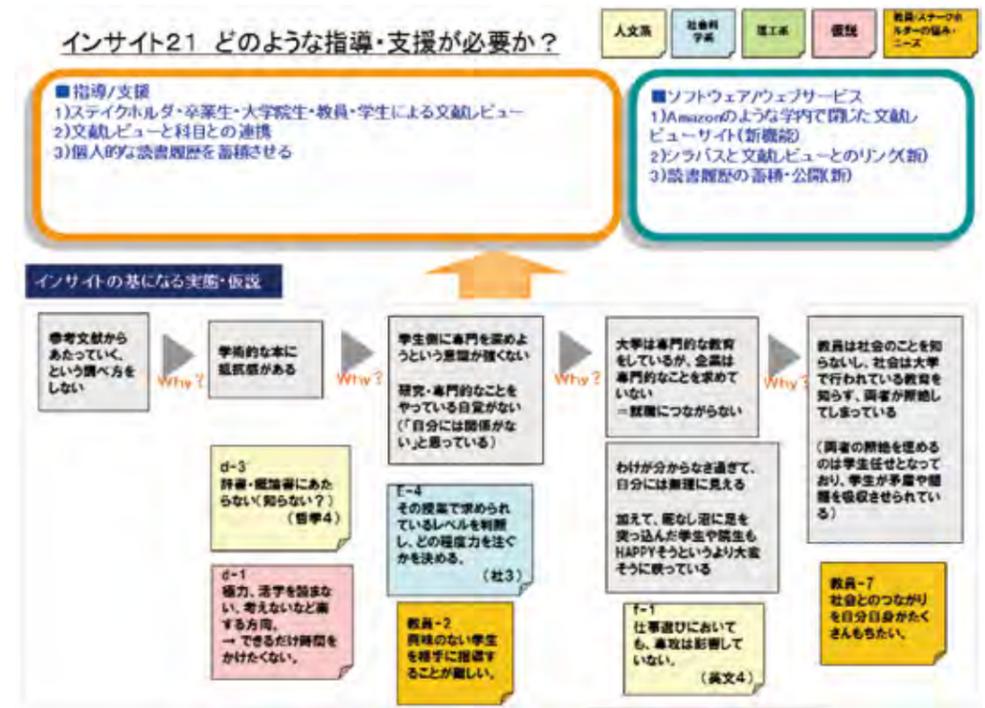


図4 第1段階で分析に用いたインサイトの一例

インサイト	想定される指導 / 支援	ソフトウェア / サービス
21 文献に親しみ、専門分野への導入を支援するとともに、社会との関係を学ばせる	1. 文献情報と科目との連携	1. シラバスと文献情報（書誌情報、レビュー等）とのリンク
	2. 「大学での学び」と「仕事」とを関連付けるために、教員による研究の文献、ステークホルダによる仕事の文献を紹介	2. 教員、ステークホルダ参加による文献レビュー、キャリアセンターシステムとの連携
	3. 気軽に辞書を引ける環境を提供	3. オンライン辞書の提供
	4. Amazon 等の書誌情報を利用した読書記録の検索・蓄積とリスト作成・公開	4. 「私の本棚」ブックログ、Amazon のリストマニア
	5. 学部・専攻・専修・コースごとの論文要旨アーカイブ作成と公開	5. 「レポート・論文リポジトリ」と文献情報との連携

図5 インサイトと支援の例

2.5 シナリオ分析

TECfolio の実装を見据えた要求仕様を策定するため、ペルソナ / シナリオ法に基づき、人文学系、社会学系、理工学系の「典型的な学生像」を分析、考察することを目的とした。

ペルソナ / シナリオ法は、具体的な調査に基づく仮想のユーザ像を用いて、製品やサービスのインタラクションデザインを行うための手法であり、アラン・クーバーが Visual Basic のデザインを行った際に用いたのが最初といわれている [5]。ユーザのニーズにフォーカスした戦略の立案、デザインを可能にする際に効果的な手法である。

ここでいうペルソナとは、実在する人々についての明確で具体的なデータを基に作り上げられた仮想のユーザ像を指す。また、シナリオとは、ペルソナが製品やサービスを用いる際の行動やその背景を、物語風のシナリオとして描いたものである。これらの手法によって、ターゲットユーザが欲しい、あるいは使いたいと感じるシステムをデザインすることが期待できる。TECfolio の要求仕様を策定するにあたっては、このペルソナ / シナリオ法によって、学生のライティング活動を支援するシーンを描き、ユーザ要求を特定することを試みた。

ペルソナ / シナリオのベースとなるライティング活動のシーンについては、上述の行動観察調査の結果（ワークショップから得られたデータ：PowerPoint 全 374 スライドのうち、主にインサイト分析、学生・教員・ステークホルダへのインタビュー部分）と、関西大学ライティングラボの TA 数名との検討会から得られた知見を基にした。

具体的な作業プロセスであるが、関西大学教員 2 名、関西大学ライティングラボ TA 3 名でチームを組み、検討会を行った。上述の目的と方法論について共有しつつ、ブレインストーミングを中心に行ったその作業は、次に示すとおり、3 つの段階に大別される。

・第 1 段階：ペルソナ / シナリオ作成

まず、仮想の学生「千里みどり」さんのペルソナを作成した（図 6）。そして、シーンを設定してシナリオ作成作業に移行した。具体的には、①調べ学習型のレポート（1 年生秋学期）、②文献解釈型レポート（2 年生春学期）、③卒業論文（3 年生春学期）、④就職活動・エントリーシート（3 年生秋学期）、⑤卒業論文（4 年生通年）を、ライティング活動シーンと設定し、それぞれの文章課題に対する千里みどりの行動を物語風にシナリオ化した（トータルで 12,000 字程度）。このシナリオ化は、「2.3 行動観察調査結果の分析」を踏まえて行われた。この他、関西大学ライティングラボ TA の支援現場を通しての知見ばかりではなく、国内・海外の他大学で行われている文章作成支援、eポートフォリオシステムに関する先行事例を適宜参照、検討しながらの作業となった。

・第 2 段階：分析する（問題の抽出）

つぎに、第 1 段階で作成したシナリオを基に、ライティングに際して問題となる学生の行動や必要となる支援

について検討を行った（図 7）。具体的には、千里みどりさんが上述の①～⑤の文章課題に取り組む過程で、改善、支援の必要性がある行動（暗黙のニーズ）を問題点として 63 点抽出した。

・第 3 段階：解決方法の検討

最後に、千里みどりさんの解決シナリオを作成した。具体的には、大学でのライティング活動において、千里みどりさんのような問題を抱えがちな学生に対して、ラボ / センターが、TECfolio システムを通してどのような支援を行うことができるのかを検討した。

第 2 段階で抽出した暗黙のニーズに対応する解決シナリオを作成し、TECfolio で実装可能な具体的機能について検討した。これら一連の分析プロセスの一例を表 1 に示す。

以上の作業プロセスを経て、関西大学の学生に関する要求仕様案を策定した。

表 1 シナリオ分析のプロセス

手順	シナリオから抽出した問題、要求分析、支援（具体的機能）
第 1 段階	「パソコンが嫌いだけれども、仕方なくネットで検索することにしました」
第 2 段階	文献の検索方法、使用方法がわからない
第 3 段階	「検索欄に「西洋史」と入力して検索ボタンを押すと、西洋史に関連した文献の一覧が出てきます。左側のチェックボックスにチェックを入れて「追加」を押すと、マイフォルダに追加されました。文献をクリックすると、Amazon のページが表示され、文献に関する詳しい情報を得ることができました。」

ペルソナ	
人文学系学生のペルソナ基本文書 <フライマリユーザ>	
	氏名：千里みどり、愛称：ミドリちゃん（21歳） 学部：文学部・世界史専攻の4年生（12月時点） ユーザのゴール：単位を取って4年で卒業し、就職する。
●基本情報	
居住地	大阪府堺市
家族構成	父、母、本人
性格/対人関係	既からで社交性がある。友人もサークル・ゼミにたくさんいる。 ※ 年になってからアルバイト先で知り合った同大学の後輩が一人いる。
好きなもの	音楽が好きで、物にかわいさで感じの女性アイドルに興味がある。ファッション（リコシなど）にも興味があり、流行の服装などは常にチェックしている。
就職活動	卒業後は、民間企業への就職を希望しており、大手企業で総合職の内定をもらっている。就職活動については、お父さんのアドバイスを参考にした。大学での勉強と職業との関係はあまり無いと考えている。
●大学での学習	
文章を読み直し	読者の手や新聞を読み直さないと、ファッション雑誌は購読している。就職活動の時だけは、お父さんが定期購読している新聞を読むように心がけていた。スマートフォンでポータルサイトのニュースサイトや有名人のブログとツイッターは時々チェックしている。
授業	科目は友達と一緒で相談しながら、単位がとりやすそうな科目を履修している。授業はたまに休むことはあるが、大抵まじめに出席している。
ゼミ	ファッションに興味があったので文化について勉強したかったが、2年次から授業を受けているA先生がやさしそうだったので、A先生のゼミを希望。
●課外活動(クラブ、サークル、ボランティア)	
サークル	1年次からテニスサークルで活動している。学外のテニスコートで行われる練習に週1回参加している。

図 6 ペルソナの例

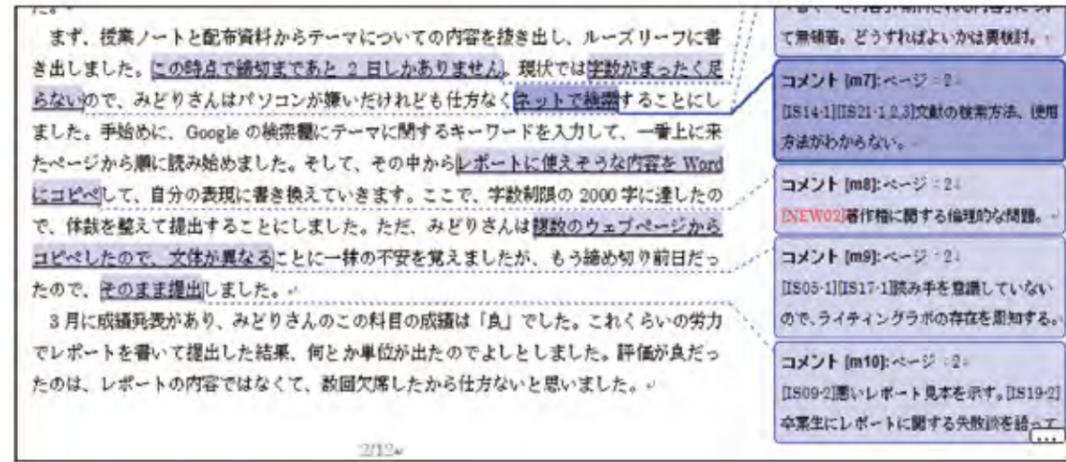


図7 問題シナリオと支援方法の検討

一方、津田塾大学では、2008年度から800件を超えるセッションのカルテに基づき、典型的な津田塾大学学生の相談シナリオを学科および学年の違いにより作成した。さらに、ライティングセンター運営に携わる事務局および特任教員へのヒアリングを行い、ライティングセンターの運営と現状システムの課題を抽出した。これらのシナリオとユーザーズを踏まえ、課題の解決案をシステムベースに検討し、その結果を要求仕様案として共有した。

両大学から提出された要求仕様案は、ePf部会関係者参加のもと定期的に行われたテレビ会議において検討された。これらの検討プロセスを経て、最終的に「TECfolio 要求仕様」が策定された。ここでは、TECfolioの全体機能を、①ライティング施設を支援する「ラボ/センター」、②中核となるeポートフォリオ機能である「Myヒストリー」、③文章作成に関する支援となる「文章作成ガイド」、④社会との交流を実現する「キャリア支援」の4つのカテゴリに分類し、画面プロトタイプ作成の作業に移行した（詳細は「2.6 プロトタイプ作成」で後述）。今年度は、取組の中心となるライティング施設の運営を支援する機能「①ラボ/センター」を優先して開発を行った。なお、今回は人文科学系の仮想ユーザーのペルソナ/シナリオ分析にとどまったため、②③④については、社会学系、理工学系のシナリオ分析を踏まえてすべき次年度の検討課題とした。

2.6 プロトタイプ作成

昨年度実施した行動観察調査結果に基づき、学生のペルソナ作成・シナリオ分析結果を踏まえ、TECfolioのプロトタイプの作成を行った。今回のプロトタイプは、Online Diagram Software for Flow Chart & UMLであるCacoo (<https://cacoo.com/>) を用いて作成を行った。

本節では、まず、検討したシステムの全体の機能と本システムでのロールについて言及し、その後、今年度、設計・開発を行った機能についてロールごとに記述する。

2.6.1 全体機能概要

TECfolioの機能として4つのカテゴリに分類する。

- ①ラボ/センター：ラボ/センターの運営上の機能であり、学生が相談予約・履歴閲覧を行うとともに、相談にあたるスタッフの相談履歴機能・勤務管理、運営事務局の運営支援を行う機能を有する。
- ②Myヒストリー：ポートフォリオ機能であり、学生が在学中にライティングを行った文書を蓄積することができる。その他、授業単位で共有・ディスカッションできる機能、学修履歴（履修科目・専門・実績など）機能を有する。
- ③文書作成ガイド：「基本的な書き方」「文献利用」の支援を行うためのガイド（PDFや動画）のポータル的役割

を担う機能を有する。

- ④キャリア支援：就職活動の支援や社会（OB・OGなど）との交流を実現するための機能を有する。基本的な機能は共有化するが、関西大学、津田塾大学のラボ/センターの運営方針が異なるため、機能をシステム設定時に選択できるなどの考慮をした。これにより、他大などへ今回の開発システムを提供する際に各組織のポリシーにより設定の自由度が高くなり、導入の検討がしやすくなるという意図もある。今年度は、『トップページ』と、4つのカテゴリのうち『ラボ/センター』について、設計・開発を行った。

2.6.2 利用者のロール

TECfolioでは、5つのロールを定義する。

- ①学生：ラボ/センターのユーザー
- ②スタッフ：ラボ/センターの教員とTA/チューターであり、学生へのライティング相談を担当するロールである。
- ③運営管理者：ラボ/センターの事務局であり、TA/チューターのスケジュール・勤務管理を行う。
- ④一般教員：大学において授業をもつ教員
- ⑤システム管理者：TECfolioのシステム設定等を担当する管理者である。

2.6.3 「学生」における機能詳細

(1) トップページ

学生のトップページは、シンプルな構成にする。

- 1) 4つのカテゴリへのリンク
- 2) 新着情報
学生自身の予約に関する情報や相談後のスタッフからのコメント投稿のお知らせが記載される。
- 3) 管理者からのお知らせ
運営管理者およびシステム管理者からのお知らせが表示される。
- 4) スケジュール（カレンダー）
授業の時間割（学事情報）、スケジュール（相談予約およびMyヒストリー内でのカレンダー機能により追加した個人スケジュール）、イベント（ラボ/センターのイベント）がカレンダー上に表示される。
- 5) 問い合わせ
連絡先のMLのアドレスが表示され、ラボ/センターへの問い合わせができる。



図9 履歴詳細画面

(2) ラボ/センター機能

- 1) 予約画面（ラボ/センターのトップページ）
ラボ/センターの相談予約を行う画面である。関西大学ではキャンパスごと、津田塾大学では文書の種類ごとに管理が必要なため、複数のカレンダーを管理し、実現が可能な工夫を行っている。また、学生におけるスマートフォンの普及の面から、モバイル端末からの相談予約が可能なインターフェースの開発も進める。
- 2) 予約詳細・変更画面
同時に複数の予約が可能な状況を想定し、予約一覧から予約詳細の確認や変更を可能とする。
- 3) 履歴一覧
これまで相談した記録を確認できるよう、履歴一覧を用意する。履歴一覧では、スタッフからの相談後のコメントが掲載されており、確認を行えるとともに、1回のみスタッフに返信が可能となっている。さらに、相談後に修正し、最終的に提出した文書をアップロードすることができる。この機能により、相談前後の文書の蓄積が可能となる。

4) お知らせ

トップページに表示されている「お知らせ」の一覧を確認できる機能である。

2.6.4 「スタッフ」における機能詳細

(1) トップページ

スタッフのトップページは、以下の構成にする。

- 1) 4つのカテゴリへのリンク
- 2) 新着情報

学生からの相談関係の情報や学生からのメッセージがあった場合に表示される。

- 3) 管理者からのお知らせ

運営管理者およびシステム管理者からのお知らせが表示される。

- 4) 本日の予約一覧

時間帯ごとに、予約学生の氏名、で相談場所（津田塾の場合には、種別を表記）、担当スタッフ（決定済みの場合）が表記される。

一覧からクリックすると、相談予約の詳細ページにアクセスすることができる。そこで、担当者の登録を行うことができる。



図10 「スタッフ」のトップページ

(2) ラボ/センター機能

- 1) シフトカレンダー+本日の予約一覧（トップページ）

1週間のシフトカレンダーとなっており、スタッフ個人のシフト（担当日時）を確認するとともに、予約状況を把握することができる。また、特定の日時をアクティブにすることにより、右ペインにその時間帯の予約状況と担当者情報の詳細を確認することができる。さらに、当日の飛び込み相談の対応が可能のように、「駆け込み予約」の機能もあり、その場で相談者の追加登録ができるように設計した。



図11 シフトカレンダー画面

- 2) 指導履歴

スタッフ個人の指導履歴の機能である。右ペインに「指導履歴」一覧が表示され、そこからそれぞれの相談内容と相談後報告を行った指導内容の詳細を閲覧することができる。

- 3) 全履歴検索

ラボ/センターの利用履歴の検索を行うための機能である。場所、年度、学部を選択し、検索するためのキーワードを項目別に入力できるようになっている。検索した結果、選択した指導履歴の詳細情報は、別タブにて印刷仕様で表示され、業務上の利便性に配慮した設計とした。

- 4) シフト入力

各学期前に、各スタッフが勤務のシフト登録をする画面である。



図12 全履歴検索と指導履歴詳細画面

2.6.5 「運営管理者」における機能詳細

(1) トップページ

運営管理者のトップページは、以下の構成にする。

- 1) 4つのカテゴリへのリンク
- 2) 新着情報

学生からの相談関係の情報や学生からのメッセージがあった場合に表示される。

- 3) 管理者からのお知らせ

運営管理者およびシステム管理者からのお知らせが表示される。

- 4) スケジュール（カレンダー）

イベント等通知した予定がスケジュール上で確認することができる。「学生への通知」「教員への通知」「スタッフへの通知」「全通知」がタブとなっており、切り替えができる。



図13 「運営管理者」のトップページ

(2) ラボ/センター機能

- 1) 本日の予約一覧（トップページ）

「本日の予約状況」を把握するための画面である。当日の担当スタッフと予約者（学生）が時間帯別に確認することができる。また、担当スタッフの割当も行うことができる。

- 2) 勤務/業務管理

1週間（月～金）のシフト状況と予約状況を管理する画面である。あらかじめ、曜日・時間帯を基に予約可能数を設定してあるが、時期的な影響を鑑み、さらに個別で予約受付可能数の設定ができるようになっている。混雑状況により、シフト（デフォルト）に入っていないスタッフを変則的にシフトに入れる場合にも利用できる設定とした。



図 14 予約状況確認画面

図 15 勤務・業務管理画面

3) 学期前シフト管理

スタッフの学期ごとのシフトを登録・管理するための画面である。また、各時間帯で受入数（スタッフ数との差分）を設定し、予約システムに反映する機能も有する。

4) 全指導履歴

機能的には、「スタッフ」の「全履歴検索」と同じ。

5) お知らせ管理

「学生」「スタッフ」「運営管理者」のトップページに表示される「お知らせ」を設定するための画面である。また、登録時にカレンダーに掲載するオプションも用意した。

6) 利用統計

統計データおよび生データのダウンロードを行うための画面である。

2.6.7 その他

「一般教員」「システム管理者」に関しては、来期の検討とする。

また、プロトタイプ制作にあたり、関西大学と津田塾大学でのライティングラボ／センターの運用ポリシーの差異が明確になってきた。異なる運営ポリシーに基づき、同一のシステムを利用するためには、機能の設定に際してカスタマイズが必要となる。GP 終了後の開発システムの普及を想定し、システム管理者の設定により、運用時に設定の自由度が高くなるような項目の抽出をあらかじめ行った。

2.7 試験運用システムの実装

HCD においては、プロトタイプによるユーザテストを行い評価と改善を重ねて行くのが従来であるが、実際に一連の操作が行える試験運用システムにて、学生やスタッフのエンドユーザによる評価を次年度に行うこととした。プロトタイプ作成前にも、関西大学・津田塾大学それぞれのライティングラボ／センターの運営にあたる特任教員を対象にヒアリング調査を実施しているが、さらにプロトタイプを示した上で、業務フローに関する現実性の観点からの確認も行った。また、同時並行的に、開発者によるシステムの内部設計および実現性の検証を行い、実装を行った。

3. 次年度に向けて

今年度は、TECfolio の中でも、ラボ／センターの運営に関わる機能に関する設計および開発を行った。次年度は、本取り組みの中核であるポートフォリオの設計・開発を行う予定である。TECfolio の特徴としては、従来の e ポートフォリオにはない、作成過程（ミクロ）、学修成果（ミドル）、学修成果の蓄積（マクロ）の各段階での

記録を、ライティングを中心に整理することにより、就職支援などキャリア教育にも活用することを目標としている。そのためにも、評価指標開発部会との連携を行い、システム開発を行う予定である。

参考文献

- [1] 黒須 正明他,「人間中心設計の基礎」,近代科学社,2013.
- [2] 黒須 正明,高橋 秀明,「情報機器利用者の調査法」,放送大学教育振興会,2012.
- [3] Uwe Flick,「質的研究入門—“人間の科学”のための方法論」,春秋社,2011.
- [4] 西條 剛央,「ライブ講義・質的研究とは何か」,新曜社,2007.
- [5] 樽本徹也,「ユーザビリティエンジニアリング」,オーム社,2005.

〈資料〉コアチームの活動記録

今年度の ePf 部会は、TECfolio の試験システムの設計と実装を目標として活動した。TECfolio の実装に向けての検討は、両大学の教員ならびにライティング施設のスタッフ（TA）から成るコアチームによって、下記のとおり4期に分け段階的に行った。

- 1) 要求仕様策定に向けての行動観察調査の分析（2013年5月下旬～8月上旬）
- 2) 要求仕様の検討：ペルソナ・シナリオの作成（2013年8月中旬～11月中旬）
- 3) プロトタイプ検討（2013年11月中旬～2014年1月中旬）
- 4) 試行的実装に向けての検討（2014年12月中旬～2015年3月下旬）

A1. 要求仕様策定に向けての行動観察調査の分析

日付	時間	区分	内容	参加者
4月25日(木)	13:00～15:00	行動観察調査報告会	前年度に実施した行動観察調査の報告	関西大学教職員 津田塾大学教職員 ステークホルダ 調査協力者 調査実施企業
6月13日(木)	13:00～14:30	ミーティング	今年度の検討会の進め方について	本村(関大教員) 樋口・千葉(関大TA)
6月18日(火)	9:00～10:00	部会(TV会議)	TECfolio 開発の進め方について	関西大学 ePf 部会 津田塾大学 ePf 部会
6月25日(火)	13:00～14:30	ミーティング	TECfolio 要求仕様の検討に向けて	本村・小林(関大教員) 千葉・樋口(関大TA)
7月9日(火)	13:00～14:30	ミーティング	TECfolio 要求仕様の検討(インサイト分析から要求仕様案の策定)	本村・小林(関大教員) 千葉・樋口(関大TA)
7月12日(金)	14:40～16:10			
7月16日(火)	9:00～10:00	部会(TV会議)	TECfolio 開発のロードマップについて 行動観察調査の分析状況について	関西大学 ePf 部会 津田塾大学 ePf 部会
7月19日(金)	13:00～16:00	ミーティング	TECfolio 要求仕様の検討	本村・小林(関大教員) 千葉・樋口(関大TA)
7月26日(金)	10:40～18:30			
8月4日(日)	13:50～14:50	部会	TECfolio 要求仕様検討会の経過報告	関西大学の関係者

この時期における検討課題は、次の点であった。
・ TECfolio の基本コンセプトについて、今年度の検討メンバー間で共有

- ・昨年度実施した行動観察調査の再分析を通して、TECfolioの基本機能を考案
 - ・TECfolioの実装を業者委託する段階を見据えて、その要求仕様案を策定
- このような作業課題を設定し、上記表で示した通り、関西大学教員2名、関西大学ライティングラボTA2名の計4名体制で検討会を行った。本取組における関西大学および津田塾大学の関係者が一堂に会した8月4日に、作業経過の報告と今後の検討課題について確認した。

A2. 要求仕様の検討：ペルソナ・シナリオ分析

日付	時間	区分	内容	参加者
8月16日(金)	10:30～18:30	ミーティング	TECfolio 要求仕様の検討(行動観察調査の分析からペルソナ・シナリオの作成)	本村・小林(関大教員) 千葉・樋口・李(関大TA)
8月20日(火)	13:30～19:30			
8月24日(土)	10:30～18:30			
9月3日(火)	13:30～19:00			
9月6日(金)	10:30～18:30			
9月17日(火)	10:30～18:30			本村・小林(関大教員) 千葉・樋口(関大TA)
9月18日(水)	13:00～15:00	部会(TV会議)	TECfolio ベースシステムの開発スケジュールについて TECfolio 要求仕様策定作業の状況について	関西大学 ePf 部会 津田塾大学 ePf 部会
9月20日(金)	14:00～18:00	ミーティング	TECfolio 要求仕様の検討(行動観察調査の分析からペルソナ・シナリオの作成)	本村・小林(関大教員) 千葉・樋口(関大TA)
9月28日(土)	13:30～19:00			
10月5日(土)	13:30～18:30			
10月8日(火)	9:30～12:00			
10月11日(金)	12:15～13:15	部会(TV会議)	TECfolio 要求仕様策定作業の状況について	関西大学 ePf 部会 津田塾大学 ePf 部会
10月11日(金)	15:00～18:00	ミーティング	TECfolio ベースシステムの開発スケジュールについて(行動観察調査の分析からペルソナ・シナリオの作成) TECfolio 要求仕様の検討	本村・小林(関大教員) 千葉・樋口(関大TA)
10月12日(土)	13:30～19:00			
10月15日(火)	10:30～12:30			
10月19日(土)	10:30～19:00			
10月26日(土)	13:30～19:00			
11月9日(土)	13:30～19:00			
11月15日(金)	12:15～13:15	部会(TV会議)	津田塾大学ライティングセンターの利用状況と要求仕様	関西大学 ePf 部会 津田塾大学 ePf 部会

- この時期における検討課題は、次の点であった。
- ・行動観察調査の分析から、実利用者を想定したペルソナ・シナリオの作成
 - ・ペルソナ・シナリオ法による分析を通して、TECfolioの要求仕様を策定
- このような作業課題を設定し、上記表で示したとおり、関西大学教員2名、関西大学ライティングラボTA2～3名の計4～5名体制で検討会を行った。

A3. プロトタイプの実験

日付	時間	区分	内容	参加者
11月16日(土)	13:30～19:00	ミーティング	TECfolio プロトタイプの検討	本村・小林(関大教員) 本村・小林(関大教員) 稲葉(津田塾大教員)
11月21日(木)	13:30～15:00			
11月28日(木)	13:30～19:00			
11月30日(土)	11:30～19:00			
12月5日(木)	13:30～16:30	ミーティング	TECfolio プロトタイプの検討	本村・小林・西浦(関大教員) 稲葉(津田塾大教員) 千葉(関大TA)
12月6日(金)	17:00～19:00			
12月7日(土)	13:30～18:00			
12月12日(木)	13:30～17:30	ミーティング	第1回開発者ミーティング	本村・小林(関大教員) 稲葉(津田塾大教員) 長畑・森田(関大ITセンター) 小路・中島(システムサポート)
12月13日(金)	12:15～13:00	部会(TV会議)	TECfolio 検討会の経過の報告	関西大学 ePf 部会 津田塾大学 ePf 部会
12月16日(月)	13:30～17:30	ミーティング	TECfolio プロトタイプの検討	本村・小林・西浦(関大教員) 稲葉(津田塾大教員) 千葉(関大TA)
12月19日(木)	13:00～16:00			
12月25日(水)	13:30～16:00			
12月26日(木)	13:30～19:00	ミーティング	TECfolio プロトタイプの作成	本村・小林・西浦(関大教員) 稲葉(津田塾大教員)
12月27日(金)	終日			
12月28日(土)	終日			
12月29日(日)	終日			
12月30日(月)	終日			
12月31日(火)	終日			

- この時期における検討課題は、次の点であった。
- ・TECfolio 要求仕様案を踏まえ、プロトタイプを作成
 - ・TECfolio のプロトタイプを踏まえて、その機能を説明する文書の作成
 - ・TECfolio のプロトタイプ、同機能説明の文書を基に、開発者間で検討
- このような作業課題を設定し、上記表で示したとおり、関西大学教員3名、津田塾大学教員1名、関西大学ライティングラボTA2名の計6名体制で検討会を行った。
- TECfolio 要求仕様案の策定、それを踏まえてのプロトタイプの作成を経て、今後の見通しが一定の形となった段階で、関西大学 IT センターおよびシステムサポート社の代表者を交えての「開発者ミーティング」を開催した。

VI

教職員合同FD・SD研修会、
TA 合同研修会

A4. 試験運用システム実装に向けての検討

日付	時間	区分	内容	参加者
1月11日(土)	13:30～18:30	ミーティング	TECfolio プロトタイプ作成 TECfolio 機能説明の文書作成	本村・小林・西浦(関大教員) 稲葉(津田塾大教員)
1月16日(木)	11:00～13:30	ミーティング	第2回開発者ミーティング	本村・小林(関大教員) 稲葉(津田塾大教員) 長畑・森田(関大ITセンター) 小路(システムサポート)
1月24日(金)	12:15～13:15	部会(TV会議)	TECfolio 開発の経過について	関西大学 ePf 部会 津田塾大学 ePf 部会
2月1日(土)	13:30～17:30	ミーティング	第3回開発者ミーティングに向けての資料の検討	本村・小林(関大教員) 稲葉(津田塾大教員)
2月6日(木)	10:00～12:00	ミーティング	第3回開発者ミーティング	本村・小林(関大教員) 森田(関大ITセンター) 小路・森村(システムサポート)
2月8日(土)	18:00～19:00	ミーティング	第4回開発者ミーティングに向けての資料の検討	本村・小林(関大教員) 稲葉(津田塾大教員)
2月13日(木)	15:00～16:30	ミーティング	第4回開発者ミーティング	本村・小林(関大教員) 稲葉(津田塾大教員) 長畑・森田(関大ITセンター) 小路・森村(システムサポート)
2月15日(土)	16:00～18:00	ミーティング	第5回開発者ミーティングに向けての資料の検討	本村・小林(関大教員) 稲葉(津田塾大教員)
2月20日(木)	15:00～16:30	ミーティング	第5回開発者ミーティング	本村・小林(関大教員) 稲葉(津田塾大教員) 長畑・森田(関大ITセンター) 小路・森村(システムサポート)
2月27日(木)	16:00～17:30	ミーティング	第6回開発者ミーティング	本村・小林(関大教員) 稲葉(津田塾大教員) 長畑・森田(関大ITセンター) 小路・森村(システムサポート)
2月28日(金)	12:15～13:15	部会(TV会議)	TECfolio 開発の経過について	関西大学 ePf 部会 津田塾大学 ePf 部会

この時期における検討課題は、次の点であった。

- ・TECfolio のプロトタイプ、同機能説明の文書を基に、開発者間で検討
- ・TECfolio システムの開発

このような作業課題を設定し、上記表で示したとおり、関西大学教員3名、津田塾大学教員1名、関西大学ITセンターおよびシステムサポート社の代表者を交えての「開発者ミーティング」を開催した。

今年度は、2回の教職員合同FD・SD研修会と、1回のTA合同研修会を実施した。この章では、これらの研修会の概要を報告する。

1. 第1回 教職員合同FD・SD研修会
(2013年8月4日 津田塾大学小平キャンパス7号館)
第1回 TA合同ミーティング
(2013年8月3日・4日 津田塾大学小平キャンパス7号館)
2. 第2回 教職員合同FD・SD研修会
(2013年12月14日 関西大学千里山キャンパス第2学舎)

1. 第1回教職員合同FD・SD研修会・TA合同ミーティング

日 時	2013年8月4日(日) 9:30～13:00
場 所	津田塾大学小平キャンパス7号館
参加者	34名

1. 概要

本取組主催シンポジウム(8月3日開催)の翌日、「教職員合同FD・SD研修会、TA合同研修会」を実施した。両大学TAをはじめ、シンポジウム出席者が参加、10大学から34名の参加を得た。「考える力」を養うために「書くこと」を重んじる初年次教育のあり方や、大学教育におけるライティングセンターやピア・チュータリングの重要性について、シンポジウムで基調講演を行った米国からの2講師が講演。その後全体で活発なディスカッションが行われた。

○ジェニー・ジョンソン氏(ウェルズレー大学)

“Strategies for Engaging College Writers: The Uses of Peer Tutoring”

ライティングセンターの基本理念にのっとり、ライティング技術と合わせてチューターに必要とされる資質や、チューターの採用方法、独自のテキストを使った研修、ライティングセンターを周知させるための戦略などについて、同大での取組を紹介。ライティングにかかわるすべての過程で、またライティングが苦手な学生だけでなくすべての学生に対して、チュータリングが有効であることが強調された。

○レイモンド・リケッツ氏(プリンマー大学)

“Strategies for Engaging College Writers: In-Class Activities”

初年次教育において「読む力」と「書く力」をどのように涵養していくかを自身のライティング・クラスでの事例とともに紹介した。テキストを文字通り「順目」に読み、その後、矛盾点などを見つけながら「逆目」に読むことで、批判的に読む力がつけられる。ライティングに関しては、まず自分のライティング力の強みと弱みを自覚し、課題をこなすなかで、自問自答を繰り返しながら力をつけていく。また、少人数のグループでテキストの文章構造を分析することで、そこでつかんだ論証の方法などを文章作成に生かしていくという例が紹介された。クラスでは、読むことも、書くことも、自己評価を重ねてスキル向上が図られている。

講演後は、参加者との質疑応答を行った。

2. TA合同ミーティング

日 時	2013年8月3日(土) 12:00～13:00 4日(日) 13:00～15:00
場 所	津田塾大学小平キャンパス7号館
参加者	関西大学 TA: 李 裕美、佐々木知彦 (教員: 西浦真喜子) 津田塾大学 TA: 寺本めぐ美、山田朋美 (教員: 飯野朋美)

シンポジウムに先立ち、両大学のTA(チューター)が合同ミーティングを行った。ミーティングは、翌日のFD・SD研修後にも行われ、活発な情報交換がなされた。

今年度初めての顔合わせのため、まず自己紹介を行い、ふだんの相談・セッションのなかで感じていることや心がけていること、困っていることなどについて話し合った。また、相談において実践してみてよかったことや今後の課題など、情報の共有を図った。

2日間では時間が足りないほどの盛況ぶりであった。テレビ会議などでTA同士が交流を図れるとよいのではとの提案があり、実現に向けて担当者で検討することとなった。

<相談やセッションで心がけていること>

- ◆相談のスキルのみならず、TAとしての心構えや、相談の振り返りがとても大事だと感じている。
- ◆相談者の状況に合った相談ができるように、セッションの目標設定を具体的にすることを心がけている。

<困っていること>

- ◆自分の文章の重要なミス(序論と結論がねじれている等)に気付いていない相談者が、より軽微な問題(漢字の間違いがないか等)を相談に来たときの対応。
 - ⇒ 最初に問題点を把握し、相談者とセッションでの優先順位を確認する。重要なミスを優先。
 - ・軽微な問題(間違い)は、先に指摘する。
 - ◆相談者が受け身で正答を求めてくるときには、どこまで応じていたらよいか、難しいところがある。
 - ◆相談者(留学生)がネイティブチェックを求めてきたときの対応。
 - ⇒ 留学生の相談は、留学生チューターに対応してもらう。
 - ・学内の日本語学習支援担当との連携が必要。
 - ◆自分とまったく違う専門の学生の相談。しかも、レポートなど書くものの読み手が、一般人ではなく、大学の先生など専門家の場合。
 - ⇒ その分野の論文のサンプルを見せてはどうか。
 - ・サンプルにより、論文が画一的になることはないか?
 - ◆何度も相談に訪れるものの、それまでに指摘されたことを踏まえていないという事例。「ライティングセンターに行けば何か教えてもらえる」と依存してしまっているのではないか。継続的に相談に訪れることで試行錯誤しながら完成させていくことは重要だが、依存してしまっただけでは自立した書き手にはなりえない。

<実践してみてよかったこと>

- ◆書き手に作業をさせる(ブレンストーミングやKJ法など)。
- ◆ホワイトボードの使用。学生の考えの整理だけでなく、注の付け方の説明についても役立った。
- ◆まず学生を褒めること。そうすると、その後、自信を持って意見・考えを述べてくれることが多い。

<今後の課題>

- ◆TAの能力(文章診断者としての能力/コミュニケーション能力)の育成や維持のために何をすればよいか。
- ◆書き手の要求に応えることと書き手の成長を促すことへのバランスをとることが重要だと認識しているが、TAとしてもよいTAとなっているのか振り返られる指標がほしい。

2013年8月4日(日) 津田塾大学ライティングセンター主催 合同FD・SD研修会 開催 参加者募集 各大学のライティングセンターから

〈考え、表現し、発信する力〉を培う ライティング・キャリア支援 教職員合同FD/SD研修会 TA合同研修会

ピアチュータリングや初年次セミナーとの連携等から、日本の大学教育におけるライティングセンターの可能性を探る研修会です。米国からの招聘教員の講義のあと、グループに分かれてディスカッションを行います。興味のある方は奮ってご参加ください。

日時：2013年8月4日(日) 9:30~13:00

会場：津田塾大学小平キャンパス7号館・7101教室

プログラム (逐次通訳あり)

- 9:30~ 開会あいさつ 田近 裕子(津田塾大学)
- 9:35~ ジェニーン・ジョンソン氏(ウェルズレー大学)
"Strategies for Engaging College Writers: The Uses of Peer Tutoring"
- 10:45~ レイモンド・リケッツ氏(プリンマー大学)
"Strategies for Engaging College Writers: In-Class Activities"
- 11:50~ ディスカッションと質疑応答
- 13:00 終了

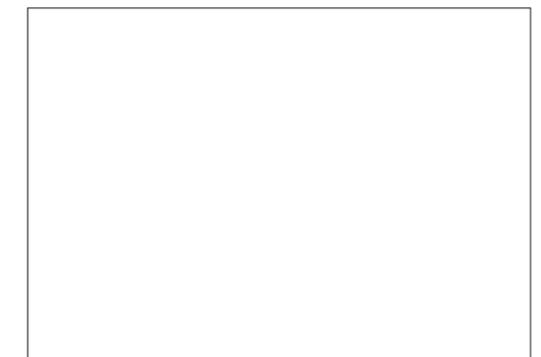
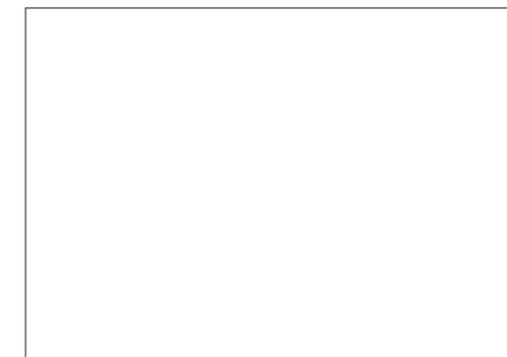
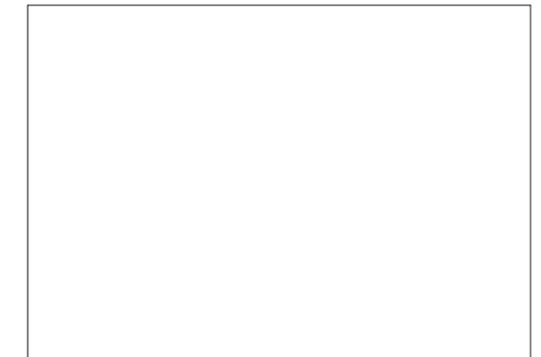
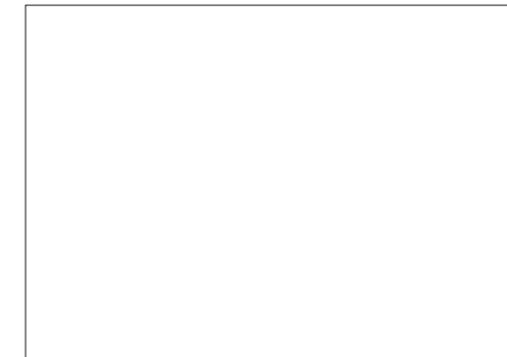
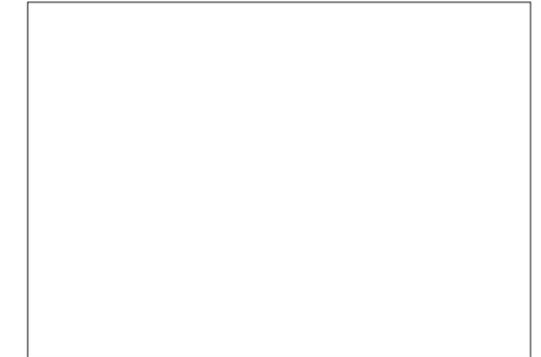
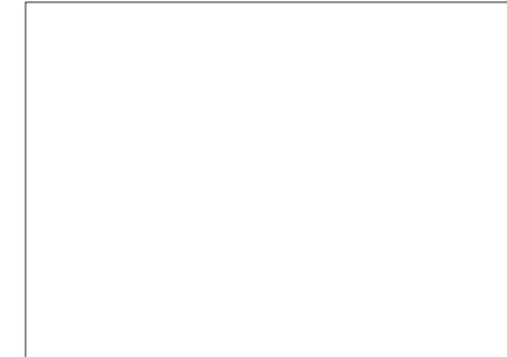
お申込方法：7月25日(木)正午までに津田塾大学ライティングセンターHPの申込フォーム
<http://twc.tsuda.ac.jp/contact/index.php>より ①研修会参加希望、②氏名、
③住所・所属、④電話番号を明記の上お申込み下さい。

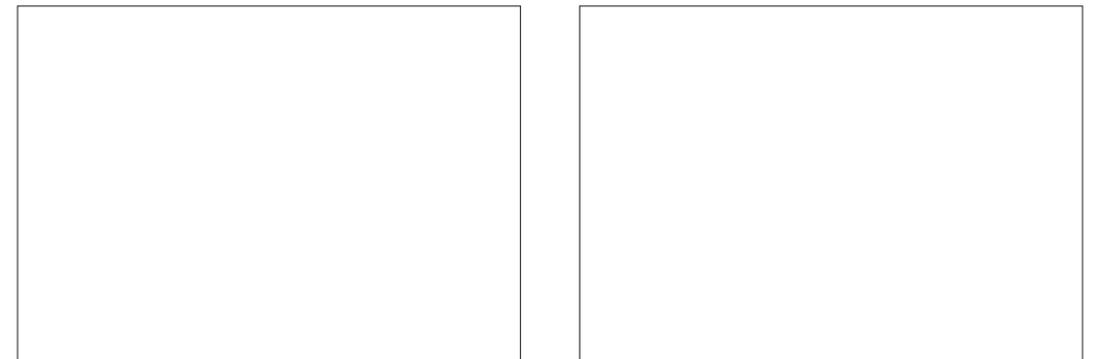
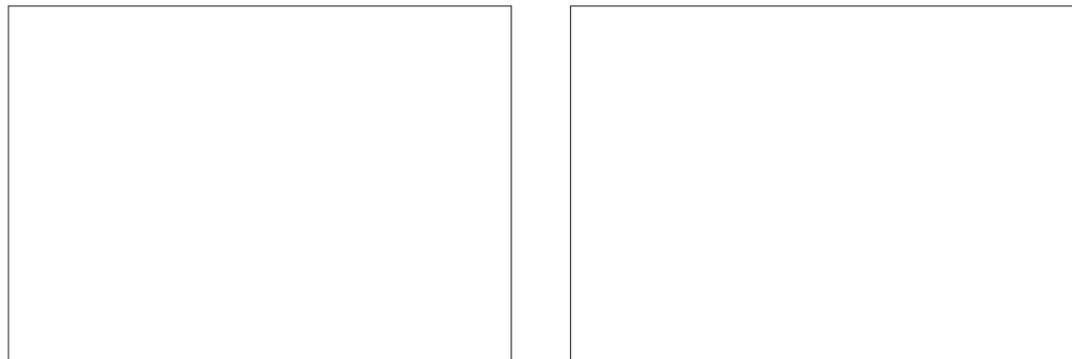
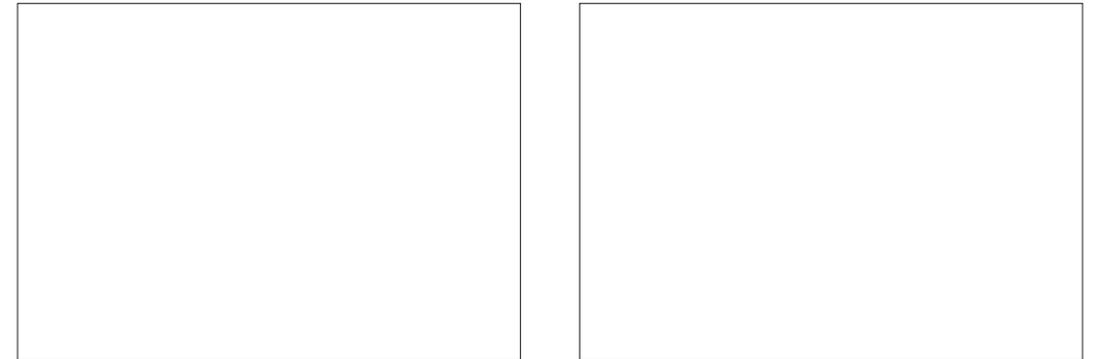
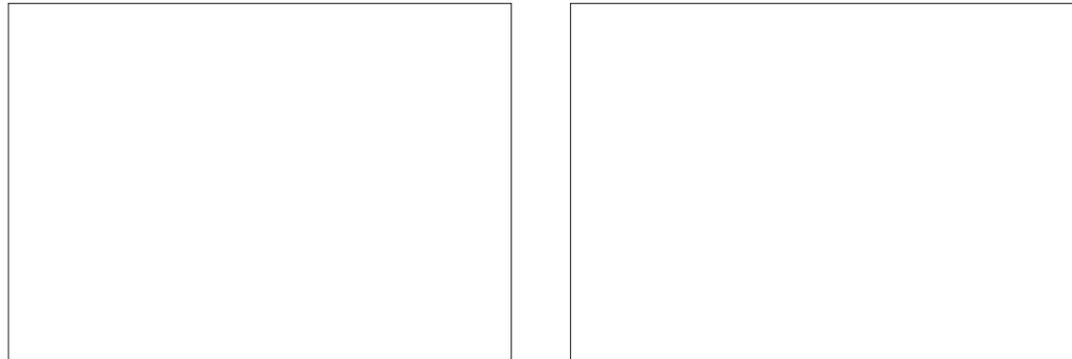
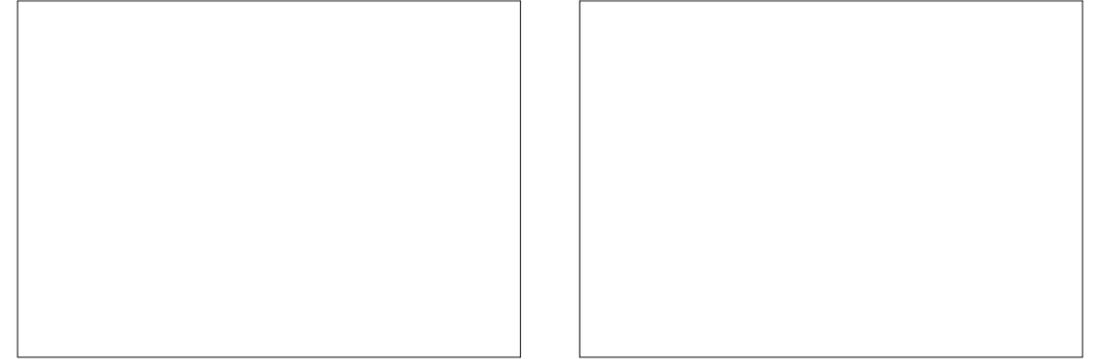
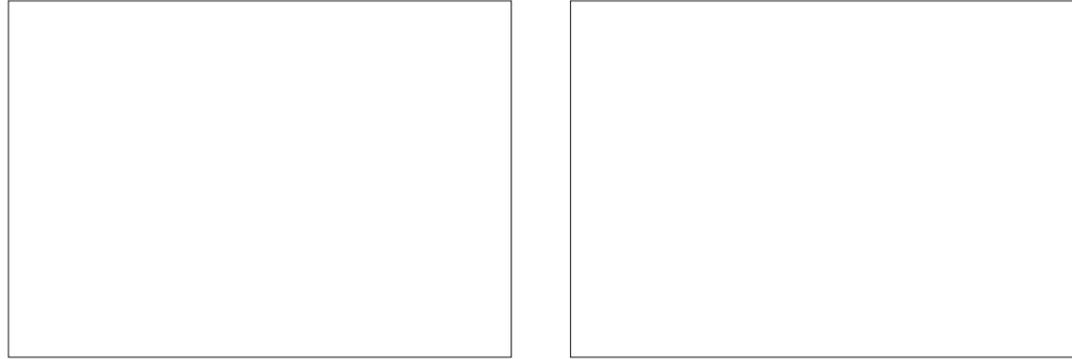
定員：定員40名
(申し込み多数の場合は参加しただけない可能性があります。ご了承ください。)

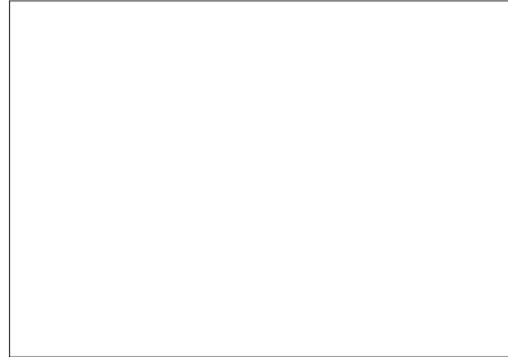
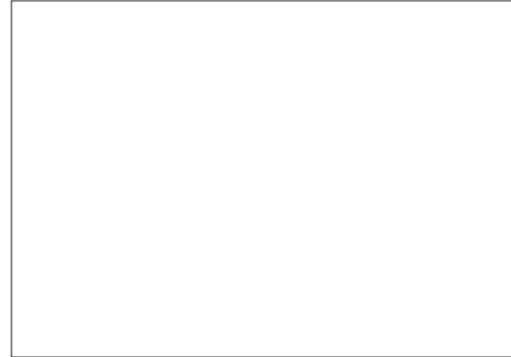
お問合せ先：津田塾大学ライティングセンター TEL/FAX: 042-342-5129
URL: <http://twc.tsuda.ac.jp/> E-Mail: WritingCenter@tsuda.ac.jp

主催：津田塾大学・関西大学

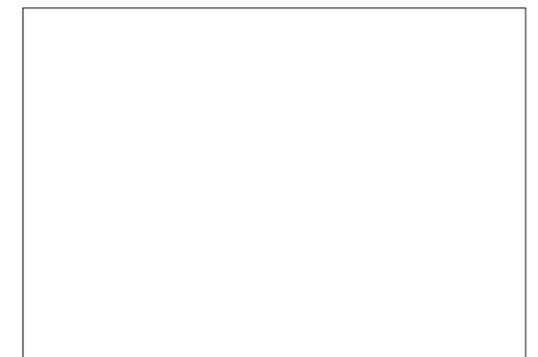
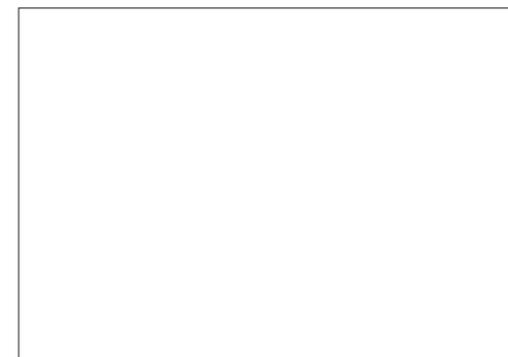
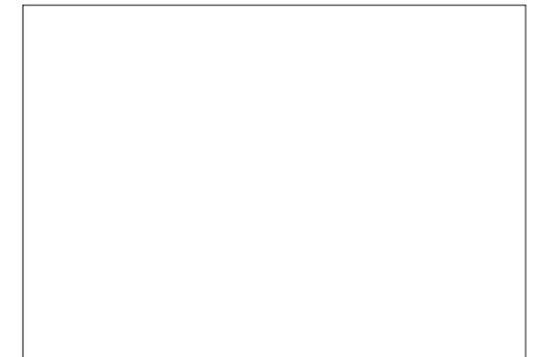
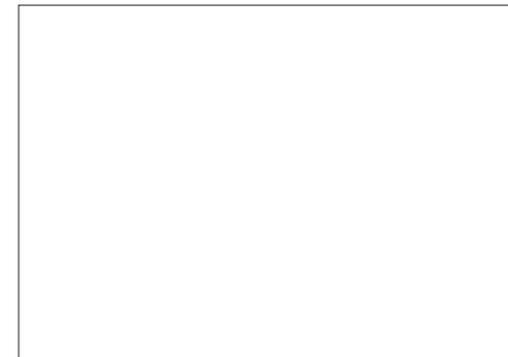
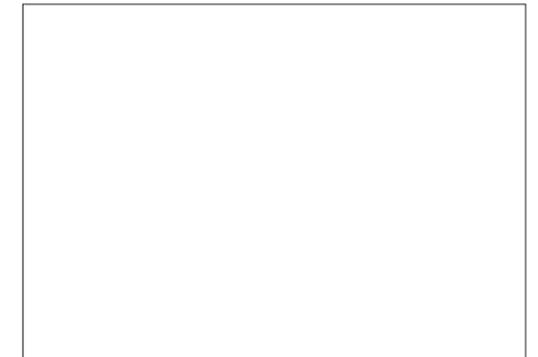
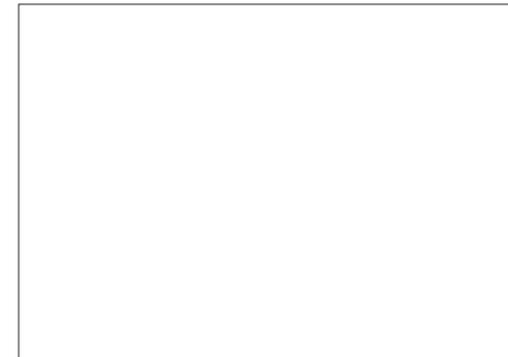
①ウェルズレー大学 ジェニーン・ジョンソン氏

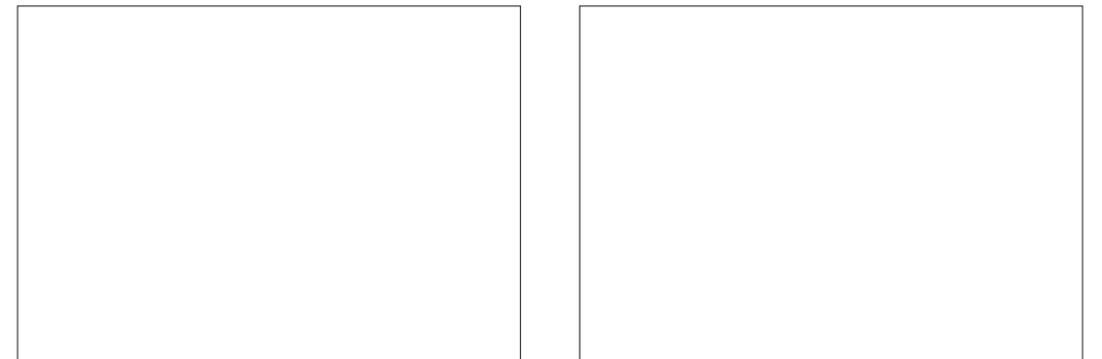
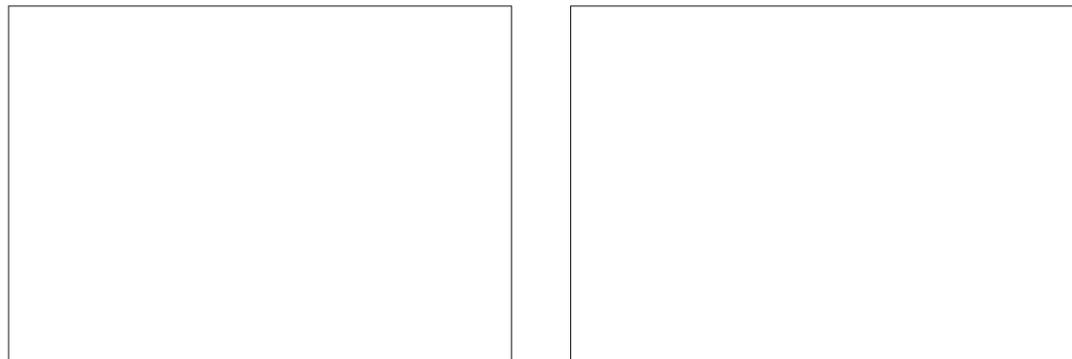
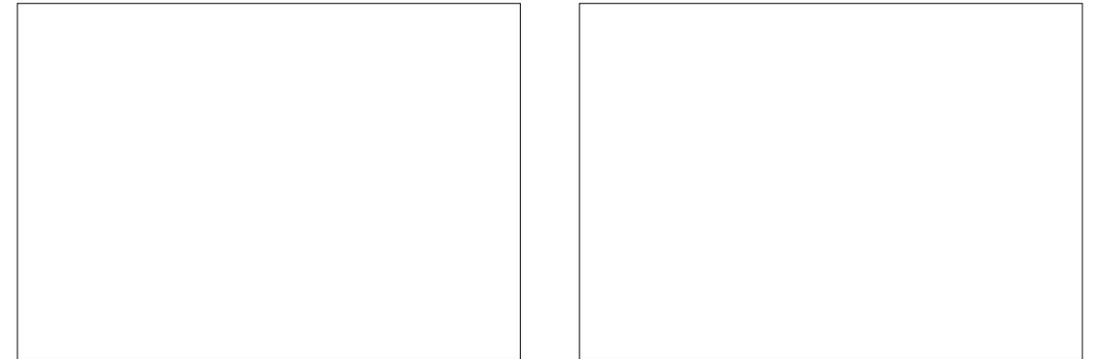
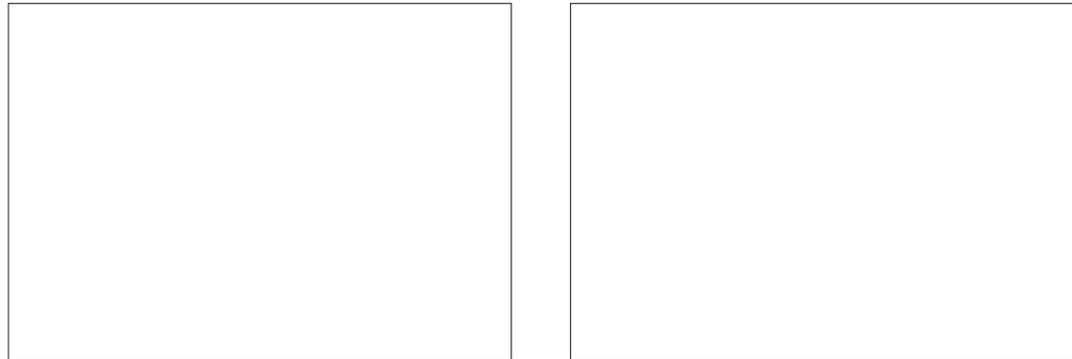
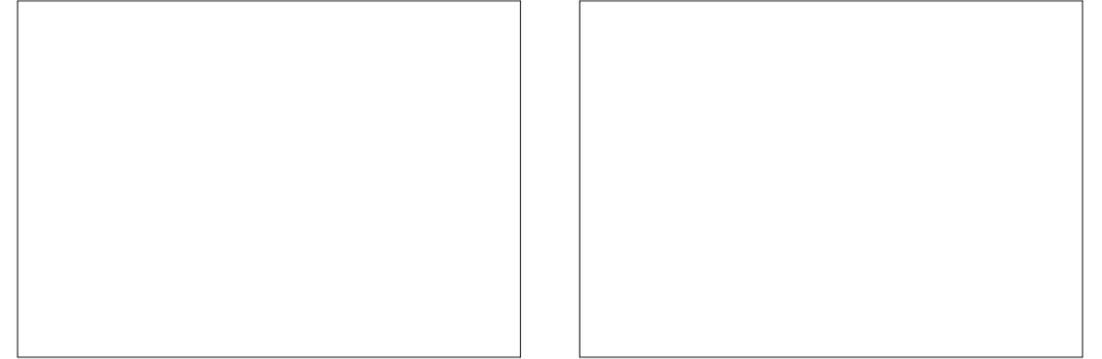
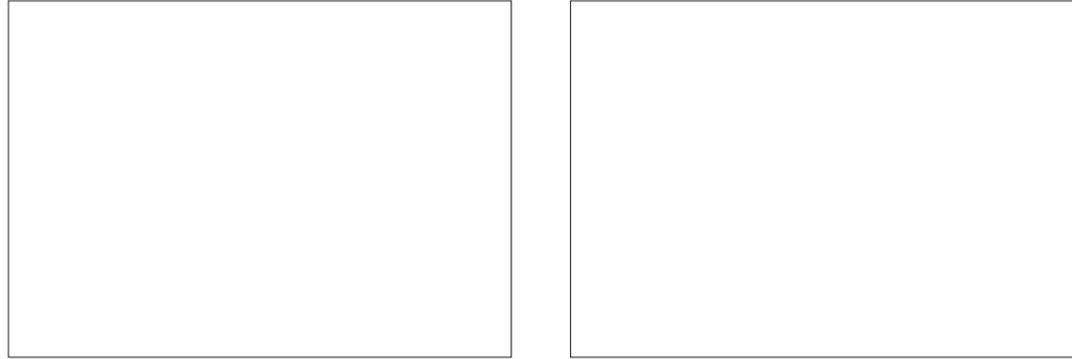


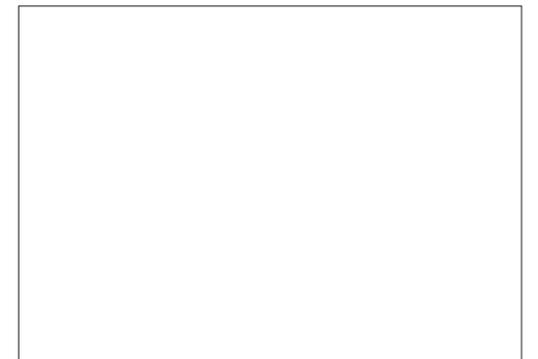
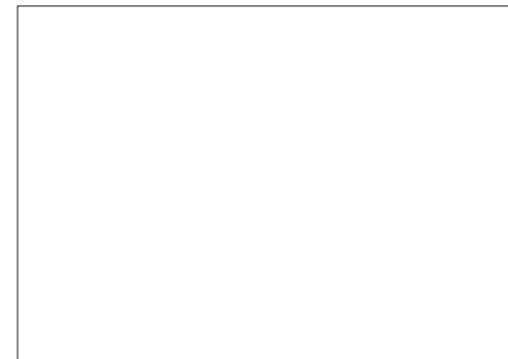
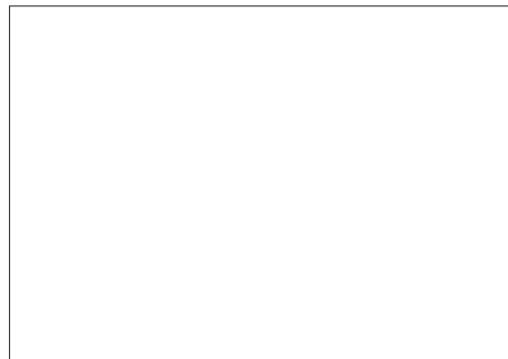
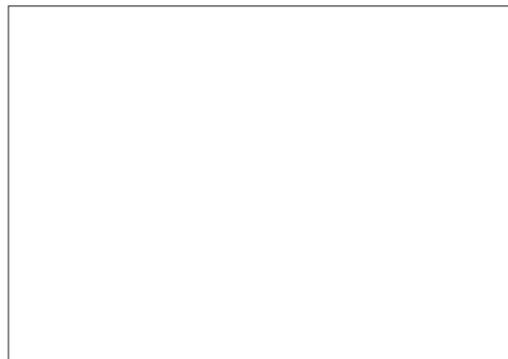
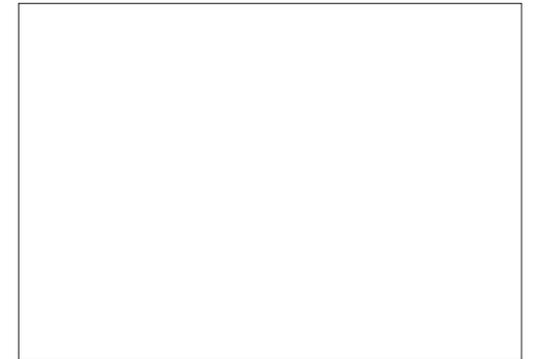
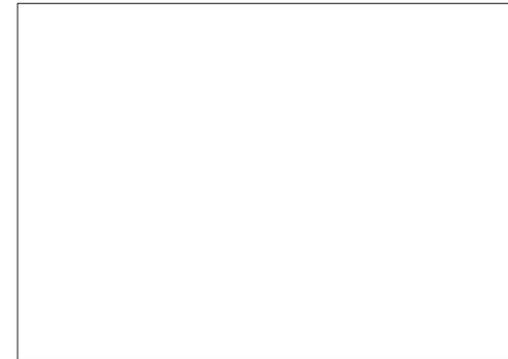
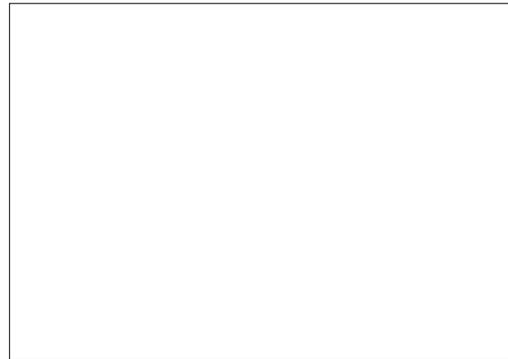
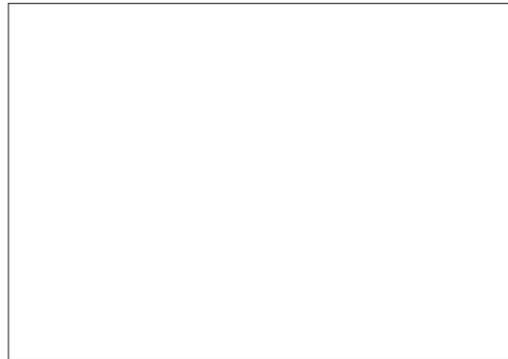
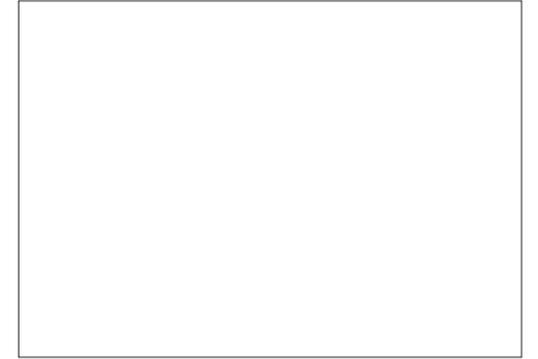
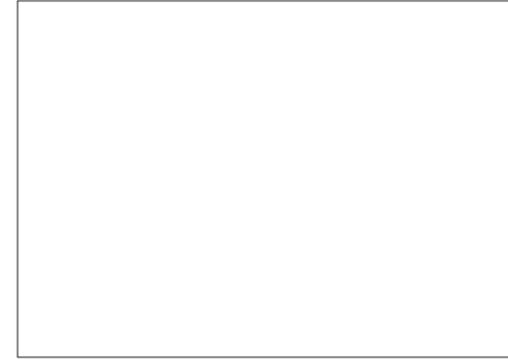
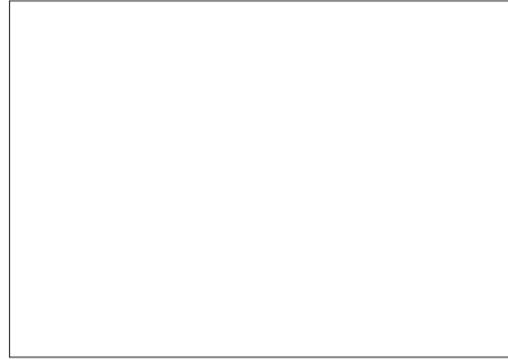
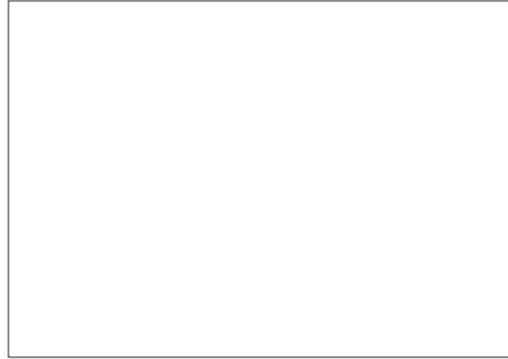


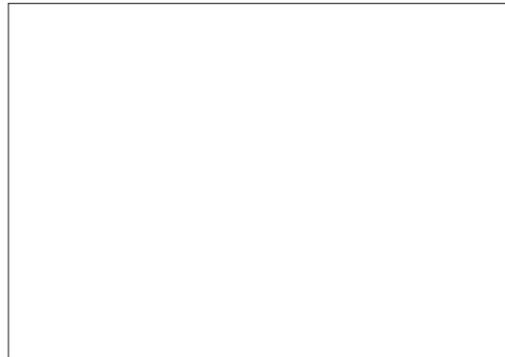
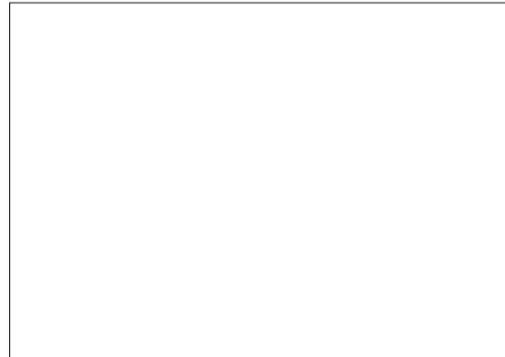
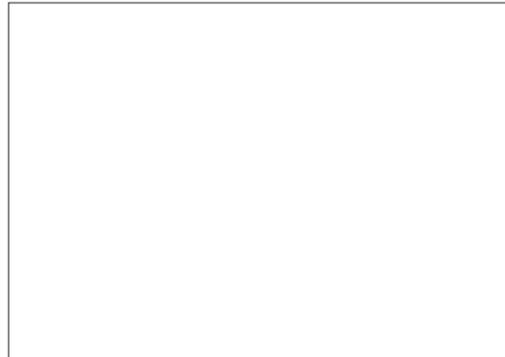


②プリンマー大学 レイモンド・リケッツ氏









2. 第2回教職員合同FD・SD研修会

1. 概要

2013年(平成25)12月14日(土)13:30より、関西大学千里山キャンパス第2学舎2号館C301教室において、関西大学・津田塾大学主催、関西地区FD連絡協議会共催のワークショップ「思考し表現する学生を育てるV-レポート・ライティングに関する授業設計を考える」を開催した。

「思考し表現する学生を育てる」ことをテーマとして実施したワークショップは、今回で5回目となる。前回は、関西地区FD連絡協議会(2012年9月現在、関西地区の143大学が加盟)が主催していた。今回は、関西地区FD連絡協議会の幹事校である関西大学が本事業に取り組んでいることから、ワークショップの主催を依頼された。同ワークショップの意義は、ライティングセンターの支援体制充実や教育カリキュラムとの連動を進めるうえで重要な知見を得られる点、ライティング支援に関わる教職員のFD・SDという点にある。これらの点は、本事業の目的や推進上の課題とも合致するため、今回のワークショップは、津田塾大学との共同主催という形で、本事業の一環として行われることになった。

これまでの4回のワークショップを通して、大学生のアカデミック・ライティングを指導するうえで、特に「担当する教員間の連携不足」や「何を(What)・どう書くか(How)について、どのように指導していくのか」といった指導の方向性に関する問題点が明確になってきた(松下・田川・坂本,2013)。こうした背景を踏まえ、今回のワークショップにおいては、ライティング支援に関する問題解決を図ることも目的の一つであった。

実施の結果、年末の多忙な時期にもかかわらず、全国の大学から51名の参加があった。関東や九州の大学からの参加者が複数あったことから、テーマへの関心が全国的に高まっていることが窺えた。プログラムの内容は後述するが、本ワークショップの前半では、レポート・ライティングに関する授業設計や学生の実態、支援のニーズなどに関する基調講演や現状報告がされた。続く後半では、「教員・職員・学生スタッフが連携した授業デザインについて考える」というテーマでグループディスカッションが行われた。教員・職員・学生スタッフといった異なる立場の参加者間ではあったが、大変活発な議論がなされた。5件法で尋ねた事後アンケートの結果(N=36)によれば、基調講演で80.6%、現状報告で61.8%、グループディスカッションで61.8%の参加者が「大いに参考になった」と回答した。全体を通して、参加者に有意義なワークショップを実施できたと考えられる。

(参考文献)

・松下佳代・田川千尋・坂本尚志(2013)「イントロダクション—ライティングを指導するということ」、関西地区FD連絡協議会、京都大学高等教育研究開発推進センター編『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』、ミネルヴァ書房、pp.1-8

2. 第I部：講演

(1) 基調講演：「レポート・ライティングの授業デザインを考える」

青山学院大学の杉谷祐美子氏により、標題の基調講演が行われた。杉谷氏は、教育社会学、高等教育論を専門としており、ご自身が担当されているライティングの授業や大学生に対して行った調査データをもとに、ライティングの授業デザインにおける観点をまとめられた。

まず、ライティングの授業の位置づけと現在の大学生の状況が確認された。杉谷氏の行った大学生の学習状況に関する調査から、近年の大学生は、大学での学びは答えのない問いを自分で探究するものであるという意識を持っているものの、負荷の大きい演習などの授業を好まず学習に対して受動的である傾向が見られるという。意識面でも学生が多様化する現在、その導入部にあたる初年次教育がますます重要になってくる。知的な動機づけを高め、勉強すること自体の意味を学生が意識できるように授業を展開する必要がある。

次に、杉谷氏がどのようなライティング授業を実践されているのかが紹介された。杉谷氏が担当する基礎演習は、教育学科の初年次生を対象に前期の間で約4,000字の論文を、学生自らの力で書きあげてを課題として

いる。その授業は、学生が論文を段階的に書き進められるよう設計されている点に特徴がある。特に、序文の書き方に重点を置き、協調学習をベースとした学生同士のディスカッションや振り返りの機会が、緻密な授業計画のなかに組み込まれている。

授業実践を通して、学生の状況や杉谷氏の関心に年々変化が生じており、それに合わせるように授業計画における各テーマの配分を変えてきているという。たとえば、論文を書くためには先行研究の検討は不可欠な作業であるが、特に初年次生にはその必要性の認識からしてなかなか身につかない。そこで次年度の授業計画では、文献の「批判的読み」の時間数を増やしたり、その位置づけを他のテーマ、作業との関連を考慮したうえで変えたりしてきているというわけである。そうした前年度の授業実践を通しての知見を、次年度以降の授業計画に反映することで、受講した学生の論文の書き方に対する理解度が徐々に高まっていることが、6つの観点で評価するルーブリックを用いた序文に対する評価点の変化とともに実証的に示された。

このように、授業でさまざまな工夫を凝らしても、大学で初めてレポートや論文が課されると文章作成の困難さを感じる学生は多く、杉谷氏はそういった学生の「初期状態」を知ることの重要性を近年特に感じている。また、たとえば図書館や学習支援センターなど、授業外でのライティング支援の動きが大学全般に広まるなかで、提出期限が迫らないとそういった支援機関に訪れないという、学生の学びの本質に関わる問題もあるのではないかと。大学生とは、大学での学びとは、何なのか。文章作成の技術的な問題を解消するとともに、学生の受動的な学習姿勢を少しでも改善できるような工夫も授業デザインには必要である。

最後に、レポート・ライティングの授業をデザインする際のポイントをまとめられた。授業内容（時間配分や作業単位）や授業外学習の計画等も指摘されたが、その中で杉谷氏が強調されたのは、学生の「失敗経験と躓きの自覚」の大切さであった。学生が分からないなりに論文を段階的に書きながら、学生同士のディスカッションやピア・レビューなどの作業、教員やTAからのコメント・添削を通して、自分のできない点を発見し、反省し、次の機会に活かすことが、学びとなるのではないか。授業デザインについてのメッセージをもって、同氏の講演は終了した。

(2) 現状報告：「初年次教育の経験—読んだ、書いた、わかった？」

続いて、津田塾大学の大島美穂氏より、ご自身が担当されている授業での事例紹介が行われた。大島氏は、初年次教育において学生を書く動機を高めるためのさまざまな工夫を行っている。たとえば、少人数の授業ではeポートフォリオを活用して学生の提出したレポートを公開している。また、大教室の授業では、授業のはじめに学生の書いたリアクションペーパーの中から学生が持った意見や質問を提示し、全員での討論を行っているという。

基調講演の杉谷氏の話を受けて、大島氏もご自身の授業実践の中で、学生の失敗が次の学びに活かされたという事例の紹介をされた。大島氏のゼミと他大学との合同ゼミにおいて、学生が、自分たちの議論が思ったとおりに進まないと感じることがあった。その際に、学生に初年次のセミナーで議論の方法について学習したことに気付かせ、初年次の授業の重要さと議論の方法について再度見直す契機を与えたという。

報告の最後に、大島氏からは、自身が所属する学生の長所や短所などの特徴を考慮したうえで、初年次教育を考えることが重要であると指摘された。

3. 第Ⅱ部：ラウンドテーブル

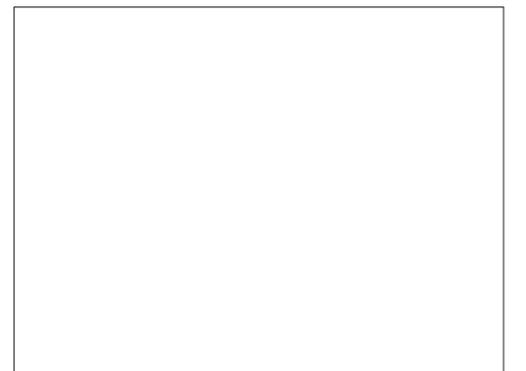
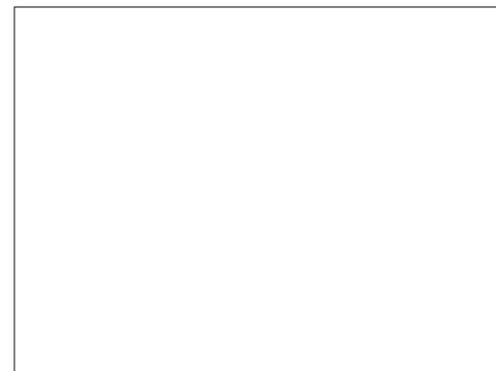
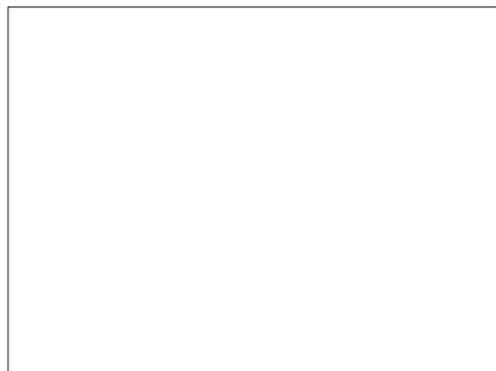
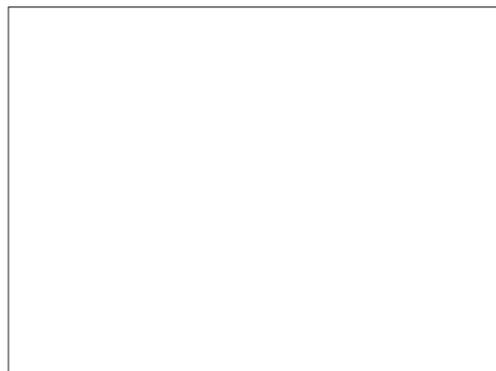
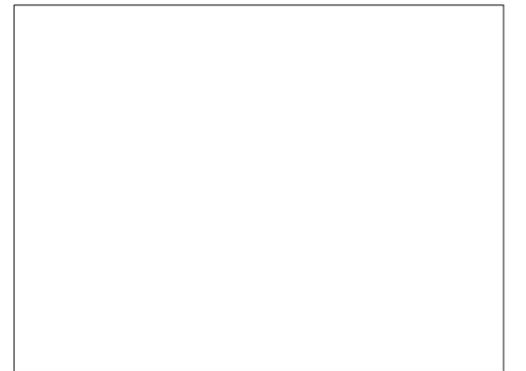
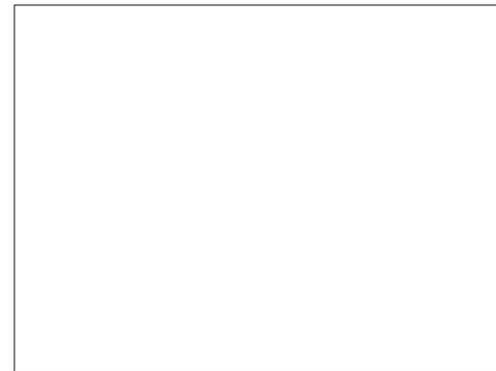
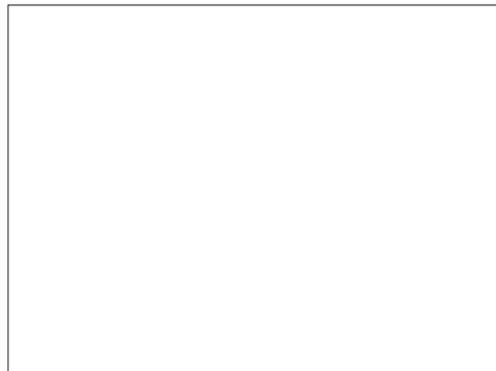
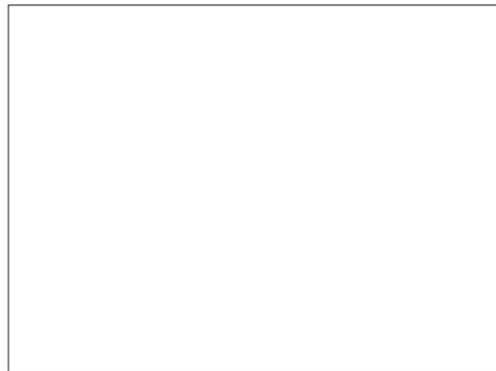
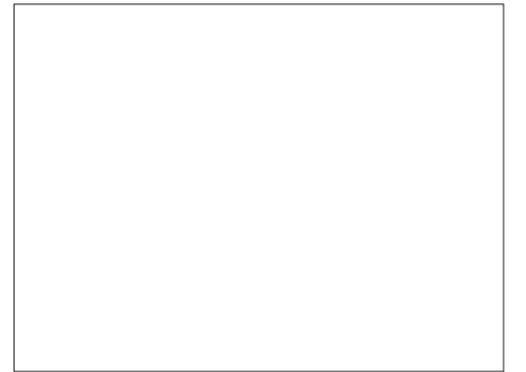
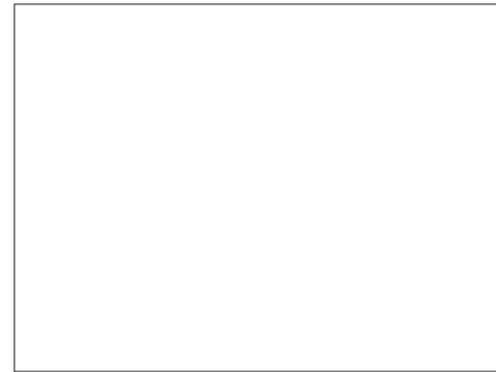
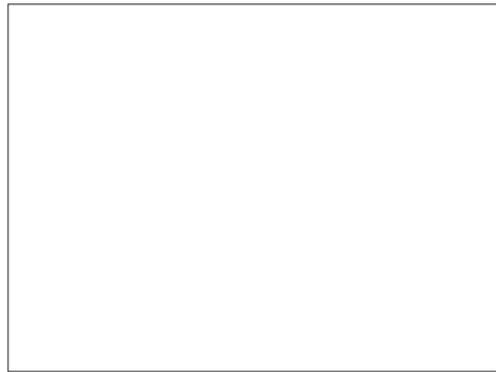
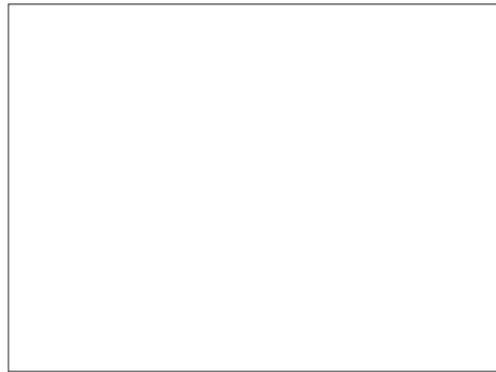
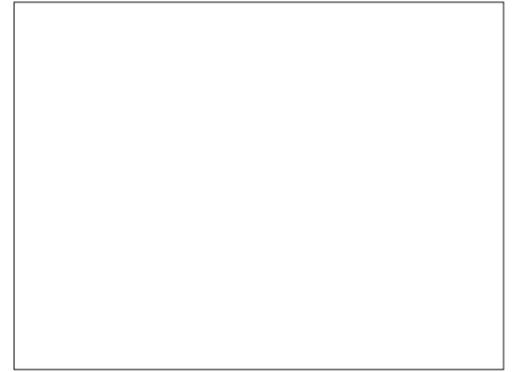
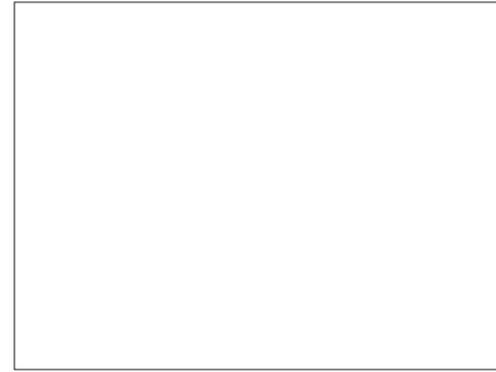
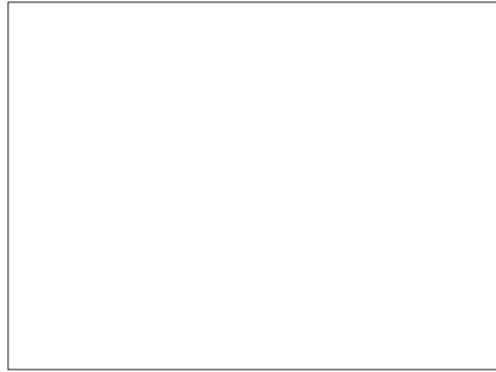
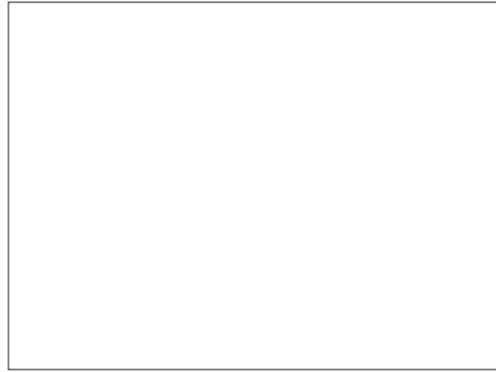
後半は、関西大学教育推進部特任教員の小林至道がファシリテーターを務め、「教員・職員・学生スタッフが連携した授業デザインを考える」というテーマで、グループディスカッションを行った。参加者を教員・職員・学生スタッフが混在するように5～6名のグループに編成し、「ライティングの授業案を練る」という設定で用意されたシラバス案を提示した。それをもとに、教員だけではなく職員や学生スタッフが連携することで、どのようなライティングの授業がデザインできるかを検討した。

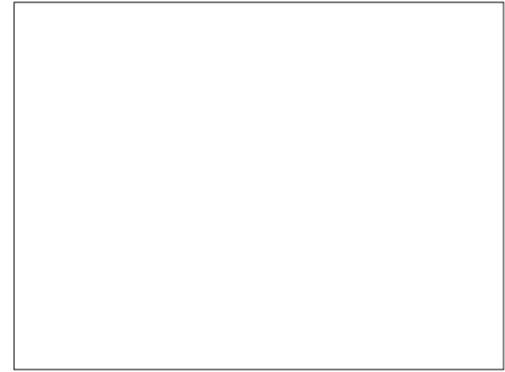
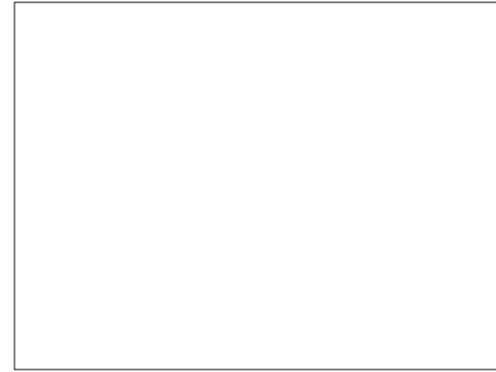
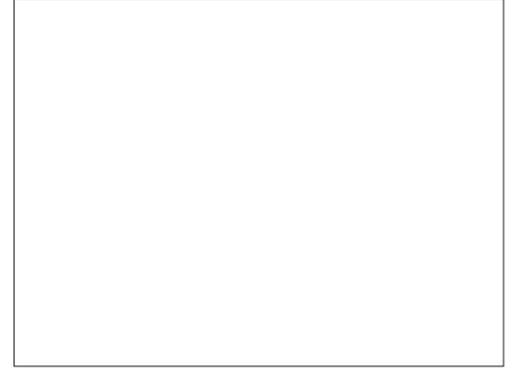
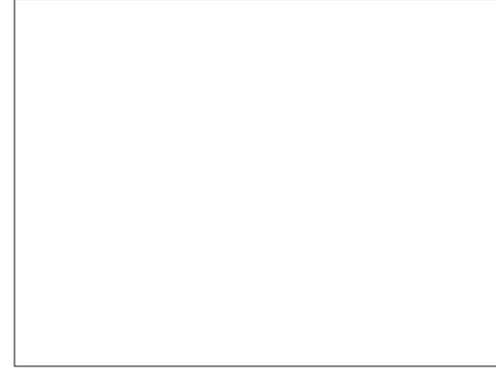
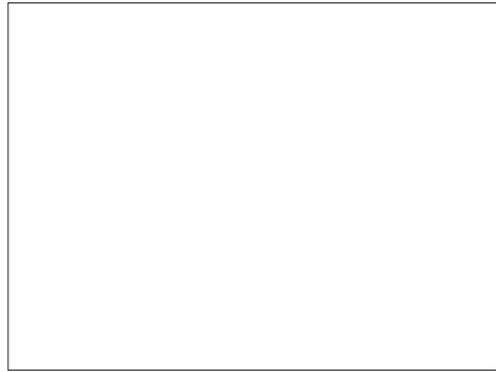
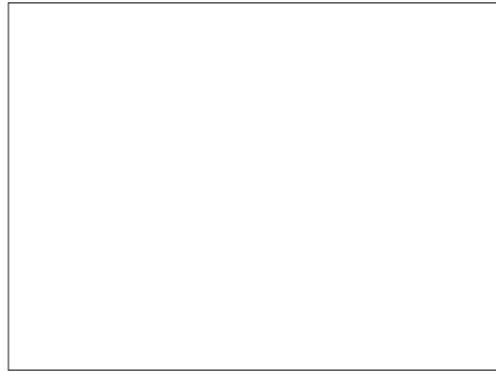
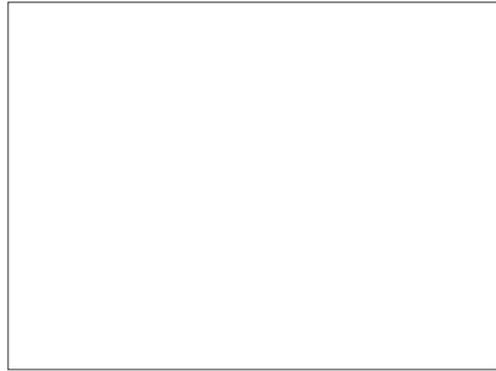
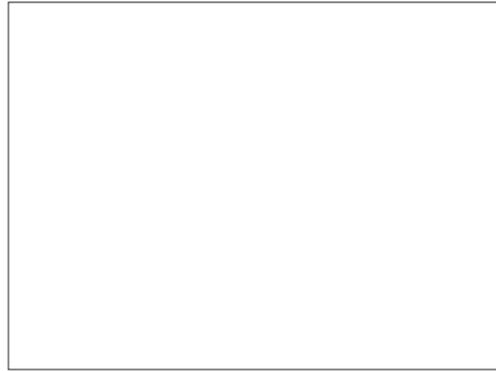
グループディスカッションの後、各グループより議論の内容が発表された。「図書館やキャリアセンターの職員が講師となり、レポートやエントリーシートの書き方について講座を開催する」「異文化理解をテーマに設定して留学生にインタビューを行い、概要をまとめる」などの具体案を発表するグループもあれば、所与の設定に

とらわれず開講学期や授業概要、シラバスそのものを変更することで、より幅広く連携授業を考えるグループもあった。

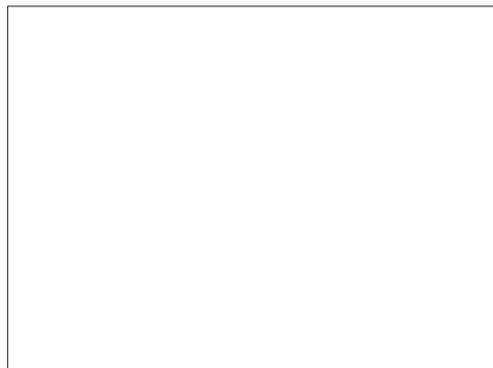
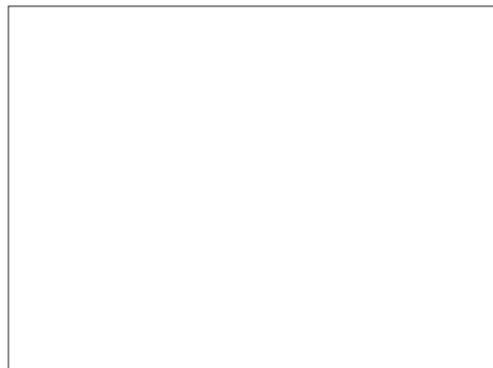
これらの発表に対して、杉谷氏からは、教員以外の職員や学生スタッフの役割を考えることで授業デザインが多様に広がる可能性について言及がなされた。その中で、学生の状況を踏まえて教員がどのように目標設定をするかが重要であるとコメントされた。

参加したグループすべての発表は時間の都合上行われなかったが、各グループの議論の内容をまとめ、本ワークショップの後日、メールで参加者全員にフィードバックするという試みも行われた。





津田塾大学学芸部国際関係学科 大島 美穂



文部科学省平成24年度大学間連携共同教育推進事業
 主催：筑波大学、津田塾大学、并産 関西地区FD連絡協議会
 「専攻し表現する学生を育てるV-レポート・ライティングに関する実態
 調査を考える」

「現状報告：初年次教育の経験—読んだ、書いた、
 わかった？」

津田塾大学学芸部国際関係学科
 大島 美穂

1.はじめに
 —初年次教育の楽しさ、難しさ—

- ・ 「感想文」「社会科調べ」「受験小論文」
 からの脱却
- ・ 問題意識⇔論証、独自性⇔先行研究
- ・ 「鉄は熱いうちに打て」

2.本学・本学科の特徴

- ・ 津田塾大学学芸学部＝リベラルアーツ（少人数教育、教養教育、参加型）
- ・ 国際関係学科International Relations
 ⇒ 広領域学、学際研究
 ⇒ 社会科学・人文科学の融合
 多様な方法論、目標

4つのコース
 （単位の取り方で交換可能な柔軟性）
 専門教育の多様性⇨問題意識の必要
 卒論の必修化（3,4年ゼミの最大の目標）

3.1年セミナーの役割と経験

- ・ ①研究報告、討論、授業理解のためのスキル
 ⇨考える力
- ・ ②レポート、卒業論文作成のためのスキル
 ⇨書く力
- ・ ③資料収集・読解・批判のためのスキル
 ⇨読む力
- ・ ★大学生としての自主性・問題意識の醸成、
 コミュニケーション力の獲得

レポート作成に関して

- ・ 構成：問題設定⇨問題・概念の定義⇨先行研究検討
 ⇨資料の検討⇨結論
- ・ 技術的問題 ex)注のつけ方、言葉の選び方（口語
 ×「丁寧語」）、作文作法
- ・ 資料収集：図書館ツアー、ネットの検索方法
 ・ 読書会の実施：複数の新書、「古典」
 ex) クラウド・リーディング、4コマ対談、レクチャー
- ・ 問題意識の構築：自由テーマ⇨作成とゼミでの報告

マイ・ライティング・ポッドの利用

4.大教室での入門授業

- ・ 国際関係概論（比較文化論、地域研究序説）
- ・ 初めての大学での専門に関する講義
 ⇨受験の記憶の払拭、最初のやる気
- ・ CD津田の受験問題の特殊性：記述問題の多さ
 国語（800字）、世界史（500字）

ライティングの課題

①毎回リアクション・ペーパー提出
 →次回講義で質問への回答、意見の紹介
 ・同期の学生の文章がインセンティブに
 →全員による「討論会」

②教科書：百瀬宏『国際関係学』（東京大学出版会）のレポート作成
 →初志を記すことで、今後のインセンティブに

5.おわりに—問題点—関西の大学との国際政治の合同ゼミの経緯から

【本学科の長所】

- ・資料の検討、実証性
- ・過度な単純化・感情的推論・二分法・流行・貼りとは無縁
- ・時系列による**累積的思考**・帰納法による実証
- ・「我々の周りの事象、現代社会の諸問題とは何か」
- ・issue-oriented

【本学科の短所】

- ・論理的思考の希薄さ
- ・普遍理論構築への志向性の弱さ
- ・演繹法、問題解決型（problem solving）と隔たり

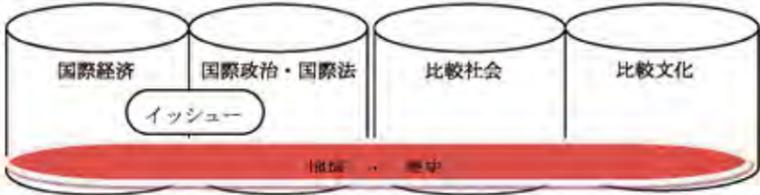
今後の展望

- ・調和ではなく、議論の構築
- ・批判理論Critical Theoryへの接近

（このブロックは空欄です）

文部科学省平成24年度大学間連携共同教育推進事業
 主催：関西大学、津田塾大学、共催：関西地区FD連絡協議会
 関西地区FD連絡協議会ワークショップ 2013/12/14
 「思考し表現する学生を育てるV-レポート・ライティングに関する授業設計を考える」
「現状報告：初年次教育の経験—読んだ、書いた、わかった？」
 津田塾大学学芸学部国際関係学科大島美穂

- はじめに—初年次教育の楽しさ、難しさ
 「感想文」、「社会科調べ」、「小論文」からの脱却
 問題意識⇔論証、独自性⇔先行研究
 「鉄は熱いうちに打て」
- 本学・本学科の特徴
 - ・津田塾大学学芸学部＝リベラルアーツ（少人数教育、教養教育、参加型）
 - ・国際関係学科＝広領域学、学際研究
 - 4つのコース（単位の取り方で変幻自在な柔軟性）



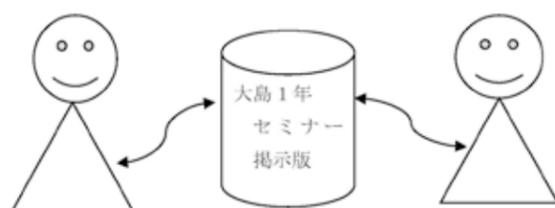
必修の卒論、3、4年ゼミは卒論作成が最終目的
 専門教育の多様性

- 1年セミナーの役割と経験
 - ①研究報告、討論、（授業）理解のためのスキル…考える力
 - ②レポート、卒業論文作成のためのスキル…書く力
 - ③資料収集・読解・批判のためのスキル…読む力
 ★大学生としての自主性・問題意識の構築、コミュニケーション力の獲得

●レポート作成に関して

- ・構成：問題設定⇒問題、概念の定義⇒先行研究の検討⇒資料の検討⇒結論
- ・技術的問題 ex)注のつけ方、言葉の選び方（口語×、丁寧語×）
- ・資料収集：図書館ツアー、ネットの検索方法

- ・読書会の実施：複数の新書、「古典」(ex) リーパー、レノン、メスベリヤイト、バチソン)
- ・問題意識の構築：自由テーマレポート作成とセミナーでの報告、討論、
⇒マイ・ライティング・ポッドの利用



4. 大教室での入門授業

- ・国際関係概論 AB (比較文化論、地域研究序説)
初めての大学での専門に関する講義→受験の記憶の払拭、最初のやる気
CD津田の受験問題の特殊性：記述の多さ 国語(約800字)、世界史(約500字)
- ・毎回リアクションペーパー提出→次回講義で質問への回答、意見の紹介
⇒全員討論形式
- ・教科書：百瀬宏『国際関係学』(東京大学出版会)のレポート作成

5. おわりに (問題点)：関西の大学との国際政治の合同ゼミの経験から
本学科の学生の長所

- ・資料の検討、実証性の担保
- ・過度な単純化・感情的推論・二分法・レッテル貼りは回避
- ・時系列による累加的思考 帰納法による実証主義
「我々の周りの事象、現代社会の諸問題とは何か」、issue-oriented

短所

- ・論理的思考の欠如
- ・普遍理論構築への志向性一欠如
- ・演繹法、問題解決型 (problem solving) との距離

今後の展望

批判的思考 critical thinking の必要性

関西大学教育推進部特任助教 小林 至道

関西地区FD連絡協議会ワークショップ
第2部 ラウンドテーブル

**教員・職員・学生スタッフが連携した
授業デザインを考える**

小林至道
(関西大学教育推進部特任助教)

主旨

- ・教員一人でとなると、実現が難しい授業
⇒連携するからこそ可能となる授業を考える
- ・講演内容、各大学の事情・事例を踏まえながら、
「授業案を練る」という作業を各グループで行う

検討課題

○ 半期15回の授業計画(別紙参照)をもとに…

教員・職員・学生スタッフが連携した授業デザインを考える

- ・初年次生を対象とした「ライティングスキル入門」
- ・全15回のうち、1回～複数回の「連携」のあり方を考える
- ・連携＝自分以外の教員、職員、学生スタッフ
- ・授業内のみではなく、授業外まで含めて

講演内容、各大学の事情・事例を踏まえながら検討する

タイムスケジュール

(1) 自己紹介 ①お名前 ②大学名 ③ご所属	55分
(2) ディスカッション	
(3) グループ案を発表	20分
(4) 講師からのコメント・全体での横断会	20分

- ・司会、書記、発表役を決める
- ・各自ワークシートにメモを取りながら、ディスカッションを行う
- ・書記役は、机上のPC(word)に議事録を直接入力する

振り返り

- 教員・職員・学生スタッフが連携した授業
- ・ どのような形で、連携し合えるのか
- ・ 実現するまでにクリアしなければならない課題

(当日出てきた意見・アイデアを列記)

関西地区FD連絡協議会ワークショップ 第2部 ラウンドテーブル
「教員・職員・学生スタッフが連携した授業デザインを考える」

参考資料

■授業科目名：ライティングスキル入門

■学部：全学部 ■対象年次：1年 ■単位：2 ■期別：秋（後期）

■受講可能人数（制限あり）24名まで

■授業概要

本講座では、大学入学以降の生活で求められるさまざまなタイプの文章を想定し、それらに対応できるように基礎的な「ライティングスキル」を身につけることを目標とします。

■到達目標

- ①大学以降、どのような文章を書く機会があるのかを知る
- ②さまざまな形式の文章に対応できる基本的な書き方を身につける

■授業計画（テーマおよび学習内容）

- ・第1回 現時点での自分のライティングスキルを知る：意見文を書く
- ・第2回 正しい文を書く（一文一義・句読点の打ち方、話し言葉と書き言葉の違いなど）
- ・第3回 第1回の課題文の返却・解説・書き直し
- ・第4回 レポートを書く：自分の興味関心あるテーマからレポートを書く
- ・第5回 レポートの書き方①：レポートを書くためのポイント概説
- ・第6回 レポートの書き方②：レポートを書くための文献の探し方・読み方
- ・第7回 レポートの書き方③：テーマを絞り込む/アウトラインを作成する
- ・第8回 レポートの書き方④：パラグラフライティング・接続詞の使い方
- ・第9回 口頭発表の仕方のポイント概説：スライド・レジュメのまとめ方
- ・第10回 口頭発表①：自分が書いたレポートの概要を発表する（前半：受講者の半数）
- ・第11回 口頭発表②：自分が書いたレポートの概要を発表する（後半：受講者の半数）
- ・第12回 自分の将来を考える：就職活動の流れと必要となるライティングスキルを知る
- ・第13回 メールの書き方：企業への問い合わせメールを書く
- ・第14回 エントリーシートの書き方：自己PR文を書く
- ・第15回 自分がこれまでに書いてきた文章を振り返る

※授業時間内に終わらなかった課題は、授業外の課題（翌週までの宿題）とします

■評価方法

- ①受講態度（出席回数含む）
- ②課題（第1回～3回：意見文、第4回～8回：レポート、第9回～11回：スライド・レジュメ、第14回：エントリーシート（自己PR文）を清書し、秋学期（後期）試験期間終了後に提出してもらいます ※試験期間中の筆記テストは行いません

関西地区FD連絡協議会ワークショップ 第2部 ラウンドテーブル
「教員・職員・学生スタッフが連携した授業デザインを考える」

ワークシート

■グループ番号：

■グループメンバー：

■以下の視点や例示を参考に、各グループでご検討ください。結論だけでなく、議論の経緯もお書きください。

①第何回の授業に？ ※複数回の授業にまたがっても構いません

②どういった人が？ ③どうかかわるか？

例1) 第6回の授業で、図書館職員が、図書館OPACの使い方やCiNiiの引き方をレクチャーする

例2) 第5回～8回の授業で、学生スタッフ（TA）が、提出された文章を添削し、翌週までに返却する

VI

シンポジウム報告

本取組の趣旨を広く公開するとともに、米国のライティング支援の先進事例を紹介するシンポジウム「日本の大学教育におけるライティングセンターの可能性—米国の先進事例をふまえて」を2013年8月3日(土)に開催した。本章では、このシンポジウムの報告を行う。

1. 概要
2. 基調講演・事例紹介資料

1. 概要

2013年8月3日(土)13:30より、津田塾大学小平キャンパス7号館で両大学主催の2回目のシンポジウム「日本の大学教育におけるライティングセンターの可能性—米国の先進事例をふまえて」を開催した。2013年3月に実施した1回目のシンポジウム同様、ステークホルダーであるThe Writing Centers Association of Japanが協賛。夏の暑い時期にもかかわらず、全国約30大学から教職員や学生ら78名が参加した。また、シンポジウムは関西大学千里山キャンパスにも同時中継され、19名が参加した。

基調講演

総合司会は、津田塾大学の大島美穂教授。國枝マリ津田塾大学学長の開会挨拶の後、米国からの2講師が基調講演を行った。

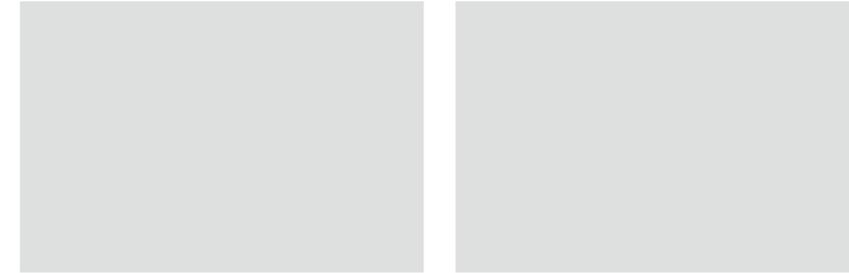
まず、プリンマー大学で初年次セミナーを担当する英文学科講師レイモンド・リケッツ氏が“Supporting the College Writer: The Emily Balch Seminar for First-Year Writers and the Writing Center at Bryn Mawr College”と題し、同大ライティングセンターの特徴や初年次セミナーについて語った。同大の卒業生でノーベル平和賞を受賞したEmily Balchの名前を冠した初年次セミナーは、テキストを深く読み込む力と、書くことを通じた「考える」力を養う、1年生必修のコースである。ライティングセンターはこのセミナーと密接に連携し、「書き手」目線の文章から「読み手」目線の文章へと推敲していくプロセスを大事にしているという。「書くことは自分を変えていくための実験である」という、フーコーの言葉などを引用しながらの講演は多くの示唆に富んだものとなった。

次に、ウェルズレー大学のライティング・プログラム講師ジュニー・ジョンソン氏が、“Building on the Positive: Best Practices for Writing Centers”と題し、同大ライティングセンターの役割や実践、学生チューターによる「ピア・チュータリング」の重要性を説いた。ライティングセンターを利用することは、学生が主体的に動き、自らの学びに責任をもつことである。また、学生はチューターと対話することで、書く力だけでなく、話す力も含めたコミュニケーション能力が磨かれている、と指摘。ピア・チュータリングにより、学生だけでなく、チューターも自信とスキルを身につけ、そのことが大学にとっても貴重な財産になると語った。

事例紹介・パネルディスカッション

2氏の基調講演を受けて、桜美林大学心理・教育学系の井下千以子教授が日本のライティング教育の現状や課題の事例を紹介。学生の書く力を育むためには、教員の発達観、学習観、授業観の転換が必要だと指摘した。続くパネルディスカッションには3氏に加え、関西大学の中澤務教授と津田塾大学の田近裕子教授も大学間連携共同教育推進事業の取組責任者として登壇し、日米のライティングセンターが抱える共通の課題や可能性について話し合った。会場からはチューターの研修方法やESLの学生に対するチュータリング法、「ライティングの重要性を大学側にどう理解させるか」といった具体的な質問が多数寄せられ、活発な質疑応答となった。

17時20分からは会場を移して情報交換会を行い、こちらも約40名が参加する盛会となった。



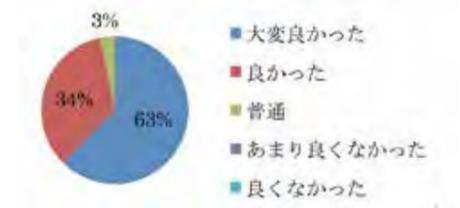
1年目のシンポジウムで日本のライティングセンターの現状と課題を再認識し、2年目は先進事例から学ぶことで、日本のライティングセンターの今後の方向性を探ることができた。次年度は2回のシンポジウムの成果をさらに発展させ、関西大学で実施される予定である。

参加者アンケートには「大変有意義だった」「刺激的だった」との声が多く寄せられた。

感想抜粋

- ・米国や日本での取組などを聞くことができ、大変有意義でした。
- ・今回は大学の教員が多く参加していたが、今後はチューターと教員が参加し、大学間で意見交換ができるとよいかと思えます。
- ・書くことをプロセスととらえて、自らが能動的に考えるための力を養うことが大事であるということも理解できました。

シンポジウム内容評価



文部科学省平成24年度大学間連携共同教育推進事業（考え、表現し、発信する力）を培うライティング/キャリア支援

シンポジウム

日本の大学教育における ライティングセンターの可能性

- 米国の先進事例をふまえて

参加無料

日時 2013年8月3日(土) 13:30~(開場 13:00)
会場 津田塾大学 小平キャンパス 7号館7101教室 同時通訳付き
 (同時中継 関西大学 千里山キャンパス第1学舎1号館ライティングラボ1 同時通訳なし)

米国の大学で生まれた「ライティングセンター」は、近年日本の大学でも広がりを見せています。しかし、学生の日本語・英語を書く力を支援する体制は、日本ではまだ十分整っていないのが現状です。本シンポジウムでは、米国の大学に設置されているライティングセンターなどで実際に指導や運営に携わる講師を招き、ピアチューティングや初年次セミナーとの連携等を含む先進事例を日本の大学教育に活用する方法を探ります。書く力を基盤とした、発信力も視野に入れた総合的なコミュニケーション力の育成や初年次教育に関心のある方、教職員、学生のご参加をお待ち申し上げます。

プログラム		総合司会 津田塾大学 大学院国際関係学専攻委員長 大庭 美穂	交通アクセス
13:30	開会の挨拶	津田塾大学学長 國枝 マリ	津田塾大学 東京都小平市津田町2-1-1 西武国分寺線 鹿の台駅徒歩約8分 JR武蔵野線 新小平駅徒歩約18分 ※駐車場の容量がございませんので、公共交通機関をご利用ください。
13:40	基調講演① "Supporting the College Writer: The Emily Balch Seminars for First-Year Writers and the Writing Center at Bryn Mawr College"	プリンマー大学 英文学科講師 レイモンド・リケッツ 氏	
14:10	基調講演② "Building on the Positive: Best Practices for Writing Centers"	ウェルズレー大学 ライティング・プログラム講師 ライティング・チューター・コーディネーター ジェニー・ジョンソン 氏	お申込み方法 7月29日(月)までに、ライティングセンターHPの申込フォーム http://lwc.tsuda.ac.jp/contact/index.php より、 ①シンポジウム参加の旨 (関西大学で参加の方は、その旨お書きください。) ②氏名 ③住所 ④電話番号 前記の上お申し込みください。 (本学学生は①シンポジウム参加の旨②氏名③学籍番号)
14:50	事例紹介 「日本のライティング教育の現状」	桜美林大学 心理・教育学系 教授 井下 千以子 氏	お問い合わせ先 津田塾大学 ライティングセンター TEL/FAX: 042-342-5129 URL: http://lwc.tsuda.ac.jp/ E-Mail: WritingCenter@tsuda.ac.jp
15:25	パネルディスカッション	レイモンド・リケッツ 氏 ジェニー・ジョンソン 氏 井下 千以子 氏 関西大学 文学部教授/本取組責任者 中澤 務 モアレーター 津田塾大学 学芸学部教授/本取組責任者 田近 裕子	
16:55	閉会の挨拶	関西大学 副学長/本事業推進責任者 林 宏昭	
17:20	情報交換会 7号館1階ラウンジ (一般参加可です。参加を希望される方は情報交換会費3,000円をご用意ください。)		

主催：津田塾大学・関西大学 協賛：The Writing Centers Association of Japan ※講演タイトル等は仮議です。

2. 基調講演・事例紹介資料

基調講演① プリンマー大学 英文学科講師 レイモンド・リケッツ氏

基調講演② ウェルズレー大学 ライティング・プログラム講師
ライティング・チューター・コーディネーター ジェニーン・ジョンソン氏

事例紹介 桜美林大学 心理・教育学系 教授 井下千以子氏

VIII

海外視察調査報告

海外のライティングセンターの状況を調査するために、2013年度は米国の2か所で行われたライティングセンターの学会に教員を2名ずつ派遣した。ライティングセンターの発祥地・米国での動向を探るとともに、学会開催地周辺の大学のライティングセンターも視察し、情報を集めた。本章では、その成果を報告する。

1. MWCA Biennial Fall Conference
2. Harold Washington College
3. De Paul University
4. Columbia College Chicago
5. TYCA-PNW & Pacific Northwest Writing Center Association Annual Conference
6. Cornish College of the Arts
7. University of Washington
8. Seattle University
9. Ivy Plus Writing Consortium Conference

1. MWCA Biennial Fall Conference

開催日	2013年10月17日(木) - 19日(土)
会場	Holiday Inn Chicago North Shore
参加者	(関西大学) 西浦真喜子、(津田塾大学) 大原悦子

Midwest Writing Center Association (MWCA) は米国中西部（イリノイ、アイオワ、カンザスなど10州）のライティングセンター関係者で組織する団体である。学会は2年に1度開かれる。シカゴで開催された第30回学会に参加した。

学会に先立ち、16日にはシカゴ周辺の3大学のライティングセンターを視察したが、こちらの詳細は別途報告する。

今回の学会のテーマは Writing The “L”。Lの呼称で知られるシカゴの高架鉄道・地下鉄は、ダウンタウンと郊外とを結ぶシカゴ自慢の交通システムである。ライティングセンターも様々な空間やモノ、人と連携しながら、外に向かって動き出そう、という主催者の決意を表していた。

参加者は約330名。2日間で100を超える分科会(発表やワークショップ、パネルディスカッションなど)があった。参加者の60%は学部生・院生のチューターたちで、学生が自分たちの実践や調査結果などを堂々と発表する姿が印象的だった。たとえば「チューターにとって、一番効果的なトレーニング法は？」という発表もあった。「模擬セッション。他のチューターのセッションを見学すること。チューター同士で小さなグループをつくり、お互いの失敗例などを話し合うこと」などが最も有効だったという調査結果は、日本のチューターにも当てはまりそうである。

分科会のテーマは多岐にわたっていたが、なかでも Multilingual Writers に関連したものが目立った。米国の大学では留学生や移民が急増し（とくに中国からの留学生が前年比4倍になった大学も）、ライティングセンターの個別相談に占める Multilingual の学生の割合が1割を超えているセンターも少なくない。彼らの語学レベルは様ではなく、英語力が低い学生が相談に訪れると、構成等を論じる以前に「何が言いたいかわからない」文章を前に戸惑うチューターが多いという。また、「文法ミスのチェック」を期待する学生と、「添削はできない」方針に忠実なチューターとの間で、セッションに対する認識のズレが生じがちである。日本のライティングセンターでも留学生に対して行われているセッションや、日本人の学生が英語のライティング相談に訪れる場合に見られる問題であろう。

分科会やワークショップなどでは、Multilingual Writers へのチュータリングの難しさ、問題点などが共有された。論文全体の構成といった「大きな問題」よりも、言葉の選び方・使い方、といった「小さな問題」が、ときに「大きな問題」にも勝るとも劣らない、といった考察があった。また「英語が第二言語である学生の気持ちを理解してみよう」というアクティビティでは、デタラメなルール（たとえば、「主語である名詞のあとには必ずaをつける」「動詞の前には必ず前置詞を入れる」など）のもとで、文章を書いてみることに挑戦した。参加者が頭をかきながら、文章と格闘する姿が見られた。

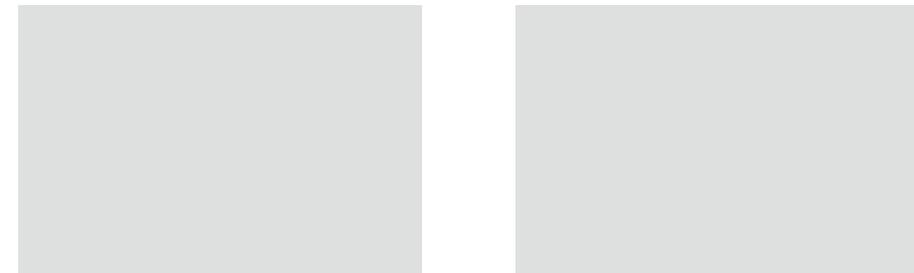
Multilingual と一口にいっても、学生一人ひとりの背景や経験はまちまちである。たとえば、「中国から来ている留学生」がおかしやすい間違いなど、それぞれのニーズにあわせたハンドアウトや教材などをつくっていく必要性が指摘されていた。

Multilingual に限らず、米国の高等教育機関は日本とは比較にならない多様性をもっている。学生たちの出身、年齢はさまざまで、経済的な理由や学力不足などから中退していく者も少なくない。多様な学生のニーズにどのようにこたえ、落ちこぼれそうな学生をどうつなぎとめるか。できるだけ多くの学生をサポートしていくために、ライティングセンターはどうあるべきか、といった点にも参加者の関心は集まっていた。アフリカ系アメリカ人の発表者は、アフリカ系アメリカ人のライティングセンターの利用率の低さが課題であると述べていた。

新たにオンラインチュータリングを実施したり、ライティングセンターをさまざまセンターと統合し、Learning Studio や Academic Success Center などといった名称に変えたりしているのも、多様なニーズに対応する動きの一環といえよう(財政的な理由もある)。Academic Success Center という名称に変えたある大学は、

以前は Academic Support Center と名乗っていたようだ。しかし、「サポート」というと、「成績の悪い学生が行く」イメージになり、成績上位の学生を呼び込めない。すべての学生の「成功」につなげるセンターという名称に変えた、という話が興味深かった。

また、ある大学の調査では、学生の98%がライティングセンターを知っていると回答したが、利用したことがあるのは49%であると報告されていた。利用しない学生の理由としては、「予約の仕方を知らない」、「支援を必要としていない」、「時間がない」、「教員レベルの支援が欲しい」など多岐にわたっていた。一方、学生の8割が自分の文章能力を平均以上だと評価していた。ライティングセンターが学生に提供できることが何であるのかを明確にし、学生に認識してもらうことが利用者を増やすために重要であると感じた。



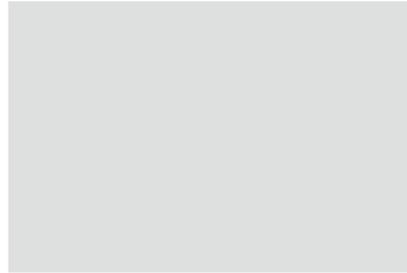
2. Harold Washington College

訪問日時	2013年10月16日(水) 10:30～12:00
訪問場所	ハロルド・ワシントン大学 ライティングラボ(Writing Lab)
大学側対応者	ジョン・カイル(チューター)
訪問者	(関西大学) 西浦真喜子、(津田塾大学) 大原悦子
大学の基本概要	イリノイ州 シカゴ・ダウンタウン 1962年創設 シカゴ初のアフリカ系アメリカ人市長の名前を冠した市立大学で、アフリカ系の学生が36%、ヒスパニック系30% 学生数 約14,000

(1) ライティングラボ概要

- 開室時間 月曜日から土曜日まで、原則午前8時から午後6時まで（月曜は9時から、また金曜日は午後4時、土曜日は午後2時まで）。
- 予約は取らず、ウォークインの相談のみ受け付けている。その方が「運営上、楽だから」という理由である。忙しい時期になると、順番待ちの列ができる。
- チューターはすべてプロフェッショナル（5人）。補助的に入るチューター（5人）も他大学でチューターをしているプロである。
- この日はプロフェッショナル・チューターであるジョン・カイル氏のセッションを見学させてもらった。English 101のクラスの課題エッセイを先生から書き直すように言われた学生の相談だった。カイル氏は学生に文章を音読させることから始めた。「パラグラフごとに間をおきながら、ゆっくり音読するように」と指示し、メモを取りながら学生の音読に耳を傾けた。音読を終えると、今度は学生にラインマーカーを渡し、テーマと関連ある部分（緑色）、テーマからはずれた部分（青色）を色分けさせた。緑と青のマーカーが1文の中に入っていることが一目でわかり、学生も削るべきところなどが理解できた様子だった。「学生の音読を聞きながら、今回はマーカーを使って指導しよう、と決めた。プロのチューターだからできること」とカイル氏は述べていた。
- 相談の記録は紙の報告書に残す。また、課題を出した担当教員にもセッション内容を報告する。ラボを利用すると成績に加点される授業もある。

- ラボにはさまざまなハンドアウトが置いてあったが Grammar Review という 26 ページのプリントの使い勝手がよさそうだった。学生が間違いやすい 15 の文法ミスとその解決法が載っている。指導の際にも「# 6 のアポストロフの項をチェックすること」などと学生に伝えていた。



3. De Paul University

訪問日時	2013年10月16日(水) 12:30 ~ 14:00
訪問場所	デポール大学 Loop Campus UCWbL
大学側対応者	ローリー・ディエツ(ディレクター)
訪問者	(関西大学) 西浦真喜子、(津田塾大学) 大原悦子
大学の基本概要	イリノイ州 シカゴ・ダウタウン 1898 年創設 全米最大のカトリック系大学 学生数 約25,000

(1) ライティングセンター概要

- ライティングセンターは 2006 年につくられた The University Center for Writing -based Learning (以下、UCWbL) の 1 部門である。もともとあったライティングセンターを強化するために、ライティングセンターと the writing fellows program, workshops, the collaborative for multilingual writing & research, faculty development の 3 つの部門を合わせ、「書く」ことを中心に、すべての学生の学びをサポートする体制をつくっている。
- ライティングセンターは 2 箇所あるキャンパスにそれぞれ設置され、「ライティングセンターの理論と実践」などの授業を受けたチューターが対応する。学部生、院生、一部プロのチューターがおり、1 対 1 の個別相談やオンラインの相談に応じている。また「ライティング・フェロー・プログラム」は、教員から要請のあった授業に全学期ピア・チューターを派遣するプログラムである。訓練を受けたピア・チューターが担当教員と連携しながら、学生のライティングをサポートする。授業を受講している学生は、必ず 1 学期に 2 回、ライティングフェローから課題に対するフィードバックをもらい、フェローと一緒に書き直しに取り組む。ペーパーを revise することの重要性を学ぶプログラムになっている。

(2) How To UCWbL

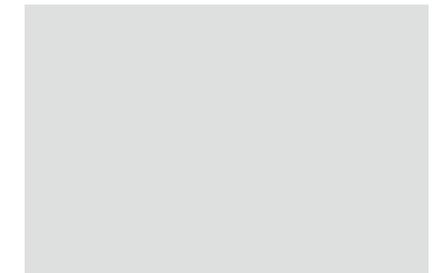
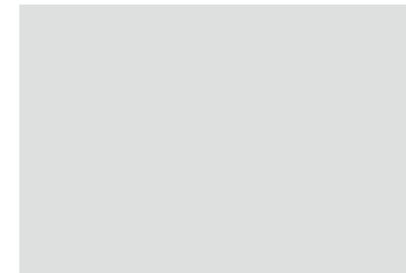
- チューターやライティングセンターのスタッフのために、全 235 ページのガイドブック How To UCWbL が作られている。UCWbL の活動や目的、チューターの心構えや注意点、報告書の書き方など、チューターに必要な情報がすべてこの 1 冊に網羅されている。Receptionist (受付係) や、ePortfolio の活用法の章までである。パソコンからダウンロードすることも可能である。

<http://condor.depaul.edu/writing/tutors/handbook.html>

(3) eポートフォリオ

- デポール大学は eポートフォリオに力を入れており、効果的な eポートフォリオを作成するためのさまざまな

ヒント、見本をオンライン上で紹介している。ライティングセンターのチューター・スタッフらは eポートフォリオで自身のチューター歴、ライティングに対する考え方、アドバイスなどを公開。eポートフォリオは書いた文章を貯めるためだけでなく、就職活動などの際に積極的に自身をアピールするツールとして活用されているようだった。

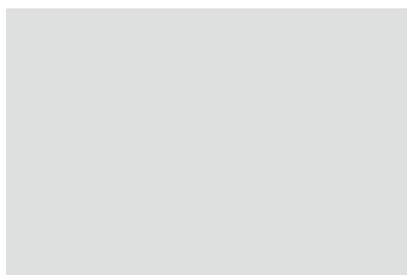
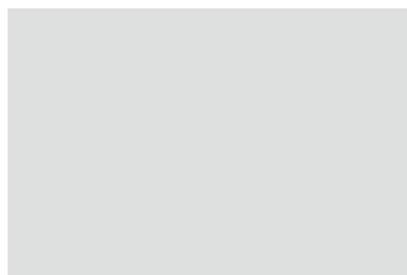


4. Columbia College Chicago

訪問日時	2013年10月16日(水) 14:15 ~ 15:45
訪問場所	コロンビア・カレッジ・シカゴ ラーニングセンター
大学側対応者	ニタ・メオラ(ディレクター)
訪問者	(関西大学) 西浦真喜子、(津田塾大学) 大原悦子
大学の基本概要	イリノイ州 シカゴ・ダウン 1890 年創設 アート・メディア系の大学 学生数 約11,000

(1) ラーニングセンター概要

- 開室時間 月曜から木曜までは午前 9 時から午後 7 時まで、金曜日は 5 時まで。土曜日は午前 10 時から午後 3 時。
- ラーニングセンターは政府の補助金を得て、ミュージアムだった建物を改装して作られた。2009 年にオープン。ライティングセンターはラーニングセンターの一部門である。
- ここではライティングだけでなく、科学・数学、外国語、会計学などのチュータリングも行っている。もともと別々にあったサポート機関を 1 箇所に統合するのは大変だった、とディレクターのメオラ氏は語る。「学生の学びをサポートするために力を合わせる」という目的は一緒でも、それぞれのセンターには独自の文化や歴史があり、何度も会議や衝突を重ねてきたそうだ。
- チューターは全部で 85 人ほどいる。学部生・院生もいれば、定年前の非常勤講師もいる。科学・数学の場合、1 回の相談に 4 時間かかることもあるという。ライティングのセッションは原則 1 回 30 分。1 週間に 3 回まで予約できる。
- 広いフロアは 53 のブースに分かれている。それぞれにコンピューターとホワイトボードを備えている。天井は音を吸収するとともに、光が木漏れ日のようにやさしく降り注ぐイメージにしている。
- 壁にはさまざまな写真や飾り付けがあった。訪れたときはハロウィン・シーズンだったため、受付もハロウィン仕様であった。アート系の大学らしい、ポップで楽しい空間づくりをしていた。
- 調査によると、学生の 21% がセンターを利用し、うち 65% は 1、2 年生だという。82% は教員の勧めでやって来る。満足度は高く、センターが「役立った」と答えた学生は 95% に上った。



5. TYCA-PNW & Pacific Northwest Writing Center Association Annual Conference

開催日	2013年10月25日(金) - 26日(土)
会場	Cornish College of the Arts
参加者	(関西大学) 小林至道、(津田塾大学) 飯野朋美

●学会の概要

Pacific Northwest Writing Center Association (PNWCA) は、米国北西部（アラスカ、オレゴン、ワシントン州、およびカナダのブリティッシュコロンビア州、ユーコン準州）のライティング関係者で組織する団体である。2004年に設立され、学会は毎年開催されている。TYCA-PNW (Two-Year College English Association of the Pacific Northwest) はコミュニティカレッジなどで組織される英語教育関連の学会で、ライティング教育に関して、PNWCA と学会を共催している。

今回のテーマは、Making, Tinkering, and DIY in our College. 作って、直して…自分です。教室やライティングセンターでどんなDIYが実践できるか。ライティングに関連するさまざまな要素——ライティングセンター、相談室などのスペースというハード面、ライティング教育や相談活動、センターの目的などのソフト面——から、どのように新たなものを生み出すことができるか、ということである。

当学会では、2日間で65の分科会が行われた。1日目には、Knowledge Café Workshops と題する語りの場が設けられ、与えられたテーマである「ソーシャルメディアとライティングセンター」について、参加者はグループディスカッションを行った。ツイッターやフェイスブックなどに代表されるソーシャルメディアを、ライティングセンターはどのように活用できるか、具体的かつ実践的にグループで話し合った。

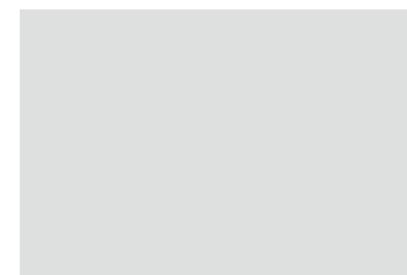
その後の全体会での報告では、ソーシャルメディアを宣伝ツールとして活用する事例が多かったが、本取組で現在開発中のTECfolioについて紹介したところ、その構想に関心を持った参加者が少なからずいた。その理由として、TECfolioに実装予定の基本機能のうち、大学における学生の成果物（文書等）の蓄積とその自己・他者評価を目的とするポートフォリオ機能や、ゼミ単位で学生間の議論を促すためにWEB上のコミュニティ（掲示板）機能を利用するという発想が、米国のライティング支援の現場でほとんど見聞きされないからとのことであった。

2日目に行われた分科会のテーマは、英作文教育や外国人学生に対するライティング指導、チューター教育とチュータリングの実践、ライティングセンターのスペース作りなど多岐にわたっていた。チューターの参加者も多く、大学院生やコミュニティカレッジの学生の発表が目をついた。

たとえば、セントラル・ワシントン大学の大学院生グループは、学生スタッフが中心となってスペース作りを行い、活気ある場を提供していることを報告した。同大学では、ライティングセンターをはじめとする3つのチュータリング・プログラムが図書館へ移動することになり、家具の配置などを考えたという。可動式のテーブルは天板がホワイトボードになっており、椅子には荷物を置く場所を設け、椅子ごと移動ができるように設計した。また携帯電話の充電ステーションまであり、学生にとって使い勝手のよいラーニング・コモンズとなっている。スペース作りはまさにDIY的な課題だったが、グループワークや、協働、交流などをキーワードに、心地よい空

間を生み出すことができたという。学生にとって、“You can do it yourself, but you don't have to do it alone” というメッセージを含んでいるというのが印象的だった。

ハイライン・コミュニティカレッジの学生チューター（コンサルタント）のグループは、彼らの組織が、ディレクターのリーダーシップのもとに構築されてきたかを報告した。2年制の大学のため、四半期ごとに入れ替わるチューターをつないでいるのは、リーダーシップと指導力に重きを置く組織の概念である。現在17人のチューターがいるが、ディレクターのもとに、チューターのリーダー、サブリーダーを置き、新任チューターも理念に沿ったチュータリングができるよう指導している。ただし、これはディレクターを頂点とするピラミッド型ではなく、それぞれが影響し合うようなサークル型になっているところがユニークだ。リーダーシップ育成にも力を入れていて、これもサークル型で互いに影響を及ぼす図で示されている。とくにリーダーシップについては、SWOT (Strengths, Weaknesses, Opportunities, Threats) というビジネスモデルを用いて、自分の強みや弱点、機会、脅威という4つのカテゴリで分析して、戦略的に取り組む方法を実践しているという。発表に立った4名の学生は、みな自信と誇りに満ちた様子で、自身のチューター経験を語っていた。学生にとってチューターの経験がどのような影響を与えるかを考えると、ピア・チュータリングの持つ可能性について、これからの検討課題となるのではないかと感じられた。



6. Cornish College of the Arts

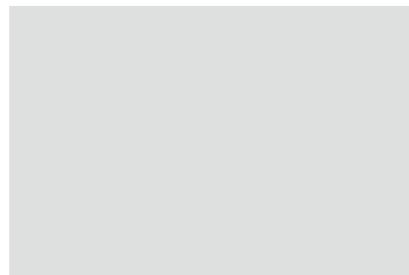
訪問日時	2013年10月23日(水) 15:00 ~ 17:00
訪問場所	コーニッシュ大学 ライティングセンター
大学側対応者	アマンダ・ヒル (ライティングセンター・コーディネーター)
訪問者	(関西大学) 小林至道、(津田塾大学) 飯野朋美
大学の基本概要	・ワシントン州シアトル ・1914年創立 芸術系の単科大学 ・学生数約800人 学生の70%は女子。

ライティングセンター概要

- 2005年設立。月曜日から金曜日まで、原則午前11:00～18:00開室、スケジュールは曜日によって異なる。
- チューターはコーディネーターと学部生5人（うち1人男性）。正課授業科目として、チューターは、ライティングセンターの歴史、ライティング理論、相談技術などを学ぶ。
- 授業の課題エッセイ、論文、履歴書、カバーレターをはじめ、どんな文章でも相談に応じる。芸術系の大学である当ライティングセンターに持ち込まれる特徴的な文章例として、「アーティスト・ステイトメント」が挙げられる。自分の作品の意図や意義を分かりやすく、説明する文章である。芸術分野を学ぶ学生にとって、一見ライティングはあまり必要ないように思われるが、芸術家として自分を売り込むためのウェブサイトや、e-mail、カバーレターなどキャリア形成にかかわるライティングがとくに重要だという。インタビューに同席

したグラフィック・デザイン専攻のチューター（2年生）は、デザイン分野でも、ポスターや冊子などの制作、プロフィール書、カバーレターなどライティング力が必要だと語った。

- 2012年の相談件数は212件で、15%から20%の学生が利用している。猫のキャラクターを創出し、ポスターやビデオ、フェイスブックなどを活用して学生に向け宣伝している。
- 相談時間は、30分または1時間である。30分の相談に来て、時間が許せばそのまま1時間に延長することがある。チューターは、相談に来た学生が心地よい時間を過ごせるように心がけている。現在の相談室は、もともと普通の教室であるため、グループワークも可能な、より機能的で居心地のよいスペースに改修することを計画している。
- 2012年からオンライン相談を受け付けている。オンラインによって提出された文書に対して、24時間以内にビデオでフィードバックを行うシステムである。当ライティングセンターは基本的に対面相談の方が有効と考えるが、オンライン相談を利用した学生の95%が満足という結果が出ている。同大学はキャンパスが2つに分かれており、ライティングセンターがあるメインキャンパス以外の学生に対しても何らかの対応が必要と考えた結果、オンライン相談のシステムを導入した。将来的には、スカイプを利用したリアルタイムの相談に発展させたいと考えているという。



ライティングセンターのキャラクター

7. University of Washington

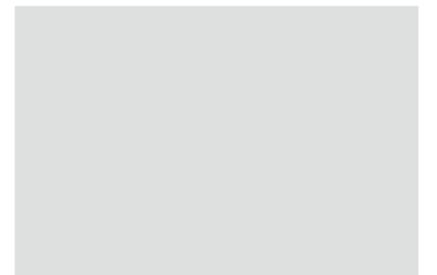
訪問日時	2013年10月24日(木) 10:00～12:00
訪問場所	ワシントン大学 オデガード・ライティング・アンド・リサーチセンター
大学側対応者	ジェニー・ハルピン(ライティング・アンド・リサーチセンター・ディレクター)
訪問者	(関西大学) 小林至道、(津田塾大学) 飯野朋美
大学の基本概要	・ワシントン州 シアトル郊外 (シアトル・キャンパス) ・1861年創立 ・学生数約5万人 (全キャンパス)

ライティングセンター概要

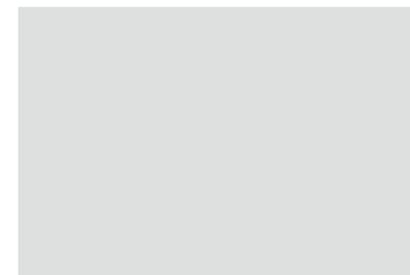
- 大学内には、学部で設置されているライティングセンターはいくつかあるが、学際的なセンターはオデガード・ライティングセンターのみで、ここが学内最大のセンターである。土曜日以外毎日開室している。課題の締め切りが月曜日であることが多いため、日曜日にも相談が多い。金曜日はリサーチ・ライブラリアンによる相談がある。
- 2012年の相談件数は約12,500件で、一日あたり100～110件という計算になる。ハルピン氏が赴任した2008年は3,000件だった。当時のチューターは12人体制で規模も小さかったが、教員や大学事務局、図書館などの協力を得て、実績を積み上げて発展してきた。相談はオープンスペースで行われ、同じ時間帯に12件の相談

が行われることもある。この日も、相談コーナーは、学生とチューターの声でにぎわっていた。

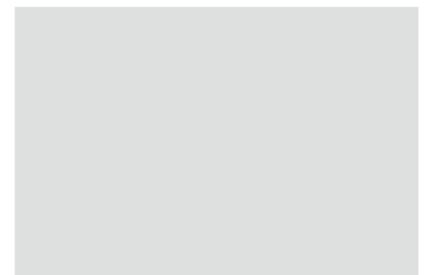
- 現チューターは、45分野70人（男女比50:50）体制である。ライティングセンターの理念や相談方法など、ワークショップ形式で1週間にわたる研修を実施している。チューターに求めるスキルの中でも、特に会話技術を重視している。ハルピン氏も同大学学部生時代にチューターを経験し、それが自分にとって有意義なものだったことから、学生にも、なるべく早い時期から（2年生から）チューターになるよう勧めているという。
- 在学生の20%が、外国人留学生である。チューターにとって、留学生の相談に乗ることは、難しいこともあるが学ぶことも多いという。英語の文法的誤りの修正ではなく、論理的展開ができるよう助けるのがチューターの重要な役割である。チューターのなかにも留学生は多く、大学での成功者として、留学生相談者のロールモデルになっている。
- ライティングセンターを利用する教員も多い。助成金の申請書や著書出版の際に、チューターが読み手として協力している。著書などは、学生の視点が重要だという。
- ライティングセンターの壁は全面、特殊な塗装によりホワイトボードのようになっていて、ペンで書くことができる。相談のほか、チューターの研修やグループワークに利用されている。
- ライティングセンターは、「ウェルカミング・スペース」（心地よい場所）であってほしいとハルピン氏は言う。大きな大学のなかの小さなコミュニティとして、チューターのホームベースでもあり、相談に来る学生にも心地よい時間を過ごしてもらえたらとの思いだ。



相談コーナー



図書館



リサーチコモンズ

8. Seattle University

訪問日時	2013年10月24日(木) 15:00～17:00
訪問場所	シアトル大学 ライティングセンター
大学側対応者	ラリー・C・ニコラス(ライティングセンター・ディレクター) ジェニファー・ヘクター(アソシエイト・ディレクター)
訪問者	(関西大学) 小林至道、(津田塾大学) 飯野朋美
大学の基本概要	・1891年創立 ・ワシントン州 シアトル ・学生数約8,000万人

ライティングセンター概要

- ライティングセンターは、1987年に開設された。1993年に、ディレクターとしてニコルズ氏が赴任、2009年までは17人から25人のチューターで年平均2,500件の相談をこなしていた。しかし、2010年から学部生が増

え、センターが現在の Lemieux Library and McGoldrick Learning Commons に移ったことから相談需要も増え、現在は 26 名で約 3,000 件の相談にあたっている。

- 開室時間は、月曜日から木曜日が 9:00～20:30、金曜日は 9:00～15:30 である。
- 学生スタッフとして、26 人のチューターと 2 名の受付担当を擁する。毎年、教員の推薦による 200 人ほどの応募者から、10 人から 15 人のチューターが選ばれる。チューターは研修として、ヘクラー氏が担当する 5 単位の正規授業科目を受講することが義務づけられている。
- チューターを含むライティングセンターのスタッフは、日常の相談活動や自身の研究成果をライティング関係の学会等で積極的に発表している。今年の TYCA-Pacific Northwest Writing Centers Association でも、化学専攻の 4 年生が、”DIY: Applying Rhetorical Consulting Practice to Scientific Writing” というテーマで報告するなど、3 名がそれぞれの研究や事例を報告した。
- ライティングセンターの理念、歴史をはじめ、スタッフの職務、相談セッションの進め方、その他活動について詳細なハンドブックを作成し、スタッフ間の情報共有を徹底している。
- Lemieux Library and McGoldrick Learning Commons は、2010 年に完成、ライティングセンターは、図書館、数学ラボ、メディア・サービスとともにラーニング・コモンスの一部と位置づけられている。図書館はライティング支援のために重要であり、図書館スタッフの協力も不可欠である。図書館と同一の建物に入り、スタッフ間の連携がスムーズになったことが、センターの発展にとって重要なことだという。我々が訪問した日も、ラーニング・コモンスのスタッフや学内の新任教員が同図書館内にある「Faculty Lounge」に一堂に会し、お互いの活動内容などの情報を交換し合う Octoberfest と銘打たれた会が、ライティングセンター主催で行われていた。



その後は、各大学のライティングセンターで経験しているさまざまな問題等が広く共有され、さらに、ライティングセンターがライティング科目で果たしている役割、関係性などについてもいくつかの大学から報告された。これらのセッションにおいては、総じて、ライティングの正課科目とライティングセンターとの効果的な連携の構築がすでに一定程度達成されているようだが、それをさらに充実していくための工夫や知恵を出し合っているという積極的な印象を受けた。

二日間の会議をふりかえって、ライティングセンターの教育に関わる教員のきわめて熱心なディスカッションや質疑応答に何より感銘を受けた。ライティング教育という実践について、ライティングセンターあるいはライティングプログラムという部署に所属する教員集団が共通のテーマを共有し、熱意に溢れた議論をする場に参加でき、日本におけるライティングセンターの展開を検討、考察する上できわめて貴重な情報や資料を得ることができた。また、本会議は米国におけるライティングセンターの最新の展開を理解する上で、人的なネットワーク作りに資する重要な機会でもあったと言える。

9. Ivy Plus Writing Consortium Conference

開催日	2013年10月11日(金)- 12日(土)
会場	Princeton University
参加者	(津田塾大学) 高橋裕子

初日の基調講演において講演者の二人は、ライティングのプロセスにおいてその根幹となる、創造的な思考力 (Creative Mind)、すなわち、書き手が対象となるトピックに、好奇心を持つこと、興味を持つこと、創造的であることの重要性を示唆した。併せて、SAT 等の standardized exam のライティング試験に向けての書く練習が、高校生にライティングの画一的なパターンを習得させてしまっている弊害について指摘した。書く対象について、深い好奇心をどのようにしたら持つことができるのか、教員はどのようにして、それを教えることができるのだろうか、といった問題が投げかけられた。

二日目は朝食や昼食をとりながらのぎっしりと詰まったスケジュールで参加型のセッションが展開され、冒頭では朝食をとりながらのライティングをめぐる用語について、ディスカッション中心のセッションが行われた。

その後、3人1組のグループ分けが発表され、それぞれグループごと研究室等の個室に移動し、3人がそれぞれ自分自身のライティングのピース、あるいは研究課題を持参して、チューター役、学生役、観察者のすべてを経験し、チューターとしてどのような発話をしているのかを第三者が客観的なコメントをするというロールプレイングを行った。このセッションは日本のライティングセンターの会議でも応用できる、大変効果的な方法であると思われた。このセッションが終わったら、さらに、ランチを食べながらの全体会が持たれ、それぞれのグループがこのロールプレイングを通してどのような発見や考察があったかについて報告した。

IX

国内視察報告

今年度は、9件の国内調査を実施した。本章では、その概要を報告する。

1. The Fifth Symposium on Writing Centers in Asia
2. 第18回東北大学高等教育フォーラム「書く力」を伸ばす
ー円滑な高大接続のためにー
3. 大学教育学会主催 公開講演会
4. 福岡大学
5. 九州産業大学基礎教育センター
6. 大学等における男女共同参画推進セミナー
7. 早稲田大学 ライティングセンター視察
8. 学生支援の動向ー修学支援とキャリア支援ー
9. The Sixth Symposium on Writing Centers in Asia

1. The Fifth Symposium on Writing Centers in Asia

開催日時	2013年4月20日(土) 午前10時～午後5時15分
会場	国立大学法人政策研究大学院大学 (GRIPS)
参加者	(津田塾大学) 飯野朋美、大原悦子

本連携事業のステークホルダーの一つである、The Writing Centers Association of Japan (WCAJ) が主催する5回目のシンポジウムに参加した。ライティングセンターの役割や、チューターの研修などをテーマに16のペーパーセッションがあった。参加者の多くが日本の大学のライティングセンターなどで英語のライティング指導に携わっているため、発表もほとんどが英語で行われた。マカオ大学や香港中文大学などからも参加があり、アジアにおけるライティングセンターの情報や課題を共有した。

また、日本の高校では初めてライティングセンターを設置している国際基督教大学高等学校の発表もあり、米国の高校では普及しているライティングセンターを、日本の高校でも設置する意義が紹介された。

全体会議では早稲田大学の佐渡島紗織教授が”Do Native Checks Conflict with the Writing Center Philosophy? Integrating the Fields of Teaching Foreign Language and Native Language”と題し講演した。同大ライティングセンターでは日英両語のセッションを行っており、留学生が日本語文章作成の相談にも訪れている。非母語話者とのセッションにおいては、文法などの「ネイティブ・チェック」を期待する学生と、文章の構成など「より重要な問題」を検討したいチューターとの間にしばしばズレが生じがちだ。佐渡島教授は、ネイティブ・チェックを行いつつも、対話を通して、より重要な問題に関心を向けていくことができるのではないかと問題提起した。

参加したおまなペーパーセッションの発表者、内容は以下の通り。

○ Yuko Ota, Waseda University

「英語担当チューターはセッション中何に意識を向けているかー母語が異なる三名のPAC分析」
英語チューターの意識が、書き手のレベルや期待に大きく影響されることを研究結果から明らかにした。

○ Maiko Nakatake, The University of Tokyo

Key Features of Writing Center Tutorials

チューターによる間接的なフィードバックについて、相談を受けた学生が文章を修正するにあたり、それらがどのように役立つかを分析した。

○ Naoya Enomoto, George Hays, and Masumi Narita, Tokyo International University

Writing Lounge for Senior Students

卒論を書く4年生へのライティング技術サポートについて、大学院生チューターの経験から語った。チューターが4年生のクラスを訪問し、卒論の書き方についてプレゼンテーションを行うことでライティングセンターの宣伝にもなり、一度に多くの学生に説明できるので効率がよい。

○ Melody Lin, The University of Macau

Tutoring Strategies to Help Students Improve Vocabulary Knowledge on “Depth” Level

マカオの大学での英語ライティング指導において、語彙を増やしていく3つの方法を紹介した。①よく知っている単語を英語活用辞典などを使い効果的に使えるよう学ぶ。②同義語を比較して、適切な単語を選択する。③英英辞典を使って、英語での定義を読む。

○ Koji Sakimura and Malcolm Parker, Kyoto Institute of Technology

Junior Faculty Members and the Help They Need

2011年に京都大学で行なった調査に基づいた報告。Junior Faculty (助教、講師、准教授) が直面している英語に関する問題とその解決策を探った。

2. 第18回東北大学高等教育フォーラム「書く力」を伸ばすー円滑な高大接続のためにー

開催日時	2013年5月24日(金)
会場	東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 2階マルチメディアホール
参加者	(関西大学) 小林至道

目的

「書く力」の育成を高大接続の観点から捉えることを主眼とした本フォーラムは、本取組と次の二点で深く関連するため、聴講者として参加した。二点とは、関西大学における高大連携事業の一つで今年度から教育推進部が参画する「Kan-Dai ネットレス・セミナー」と、高校生を対象にした「作文コンテスト」を指すが、双方への示唆に富んだフォーラムであった。

当日のプログラム

1	開会(司会)	鈴木敏明氏(東北大学高等教育開発推進センター教授)
	開会挨拶	木島明博氏(東北大学総長特別補佐・高等教育開発推進センター長)
2	基調講演	高校・大学の双方で育てたい「書く力」 島田康行氏(筑波大学アドミッションセンター長/教授)
3	現状報告	①: 阿部次郎記念賞を通じて見た高校生の好む文体と主題 岩田美喜氏(東北大学大学院文学研究科准教授) ②: 高等学校国語教育における書くことの指導 古口のり子氏(栃木県総合教育センター指導主事) ③: 小論文指導+α -E判定からの合格だけでなく- 鈴木勝博氏(岩手県立黒沢尻北高等学校教諭)
4	討議(司会)	倉元直樹氏(東北大学高等教育開発推進センター准教授) 杉本和弘氏(東北大学高等教育開発推進センター准教授)
5	閉会挨拶	関内隆氏(東北大学高等教育開発推進センター副センター長)

基調講演：高校・大学の双方で育てたい「書く力」

基調講演は、『高校・大学の双方で育てたい「書く力」』というタイトルで、筑波大学の島田康行氏によって行われた。同大学アドミッションセンター長でもある島田氏の講演は、高等教育における教育ならびにその成果を測る一指標としての大学入学試験、そのなかでも特に「小論文」において近年、質的な変化が生じている実態についての報告であった。ここでいう質的な変化についての実証的な記述については、同氏の著書である『「書ける」大学生に育てるーAO入試現場からの提言(2012, 大修館書店)』でも述べられているので、詳細はそちらを参照されたい。

同氏の調査および検証によれば、近年の大学入試小論文は出題に変質の傾向が見られる。従来、小論文の設問では「興味・関心」、「自己表現力」、「発想力」などが問われてきた。しかし近年、それらに代わって「読解力」、「論理的思考・表現力」が問われるようになってきている。たとえば、「あなたの考えを尋ねているのではありません(平成22年度N大学)」、「あなた自身の主張や感想を自由に述べるのが求められているのではない(平成23年度K大学)」などの設問の但し書きに見られるように、自分の意見や主張を書かせるウエイトが後退する一

方で、課題文を読ませたうえでその内容の要約を課すなど、与えられたテーマの理解や課題文の問いの意味を受け止める力を求める設問が主流になってきているというのだ。つまり、大学入試小論文の設問の狙いが見直され、より限定的な能力を測る方向にシフトしてきていると同氏は指摘する。

そもそも大学入試において小論文を選択し受験する高校生の絶対数が少ないうえに、上述のような設問傾向の質的变化が重なれば、多くの学生が大学入学後、「自ら問いを立てて論じなさい」、「〇〇について自分の主張を自由に論じなさい」という課題に苦慮するのは当然の帰結であろう。大学に入学してくる高校生の「書く力」の実態およびその背景を捉えた同氏の報告は、大学入学後のライティング支援を担う本取組において、特に初年次生を相手とする場合、どこに支援の力点をおくべきか、考えさせられる内容であった。

現状報告①：阿部次郎記念賞を通じて見た高校生の好む文体と主題

続いて、東北大学の岩田美喜氏による『阿部次郎記念賞を通じて見た高校生の好む文体と主題』という現状報告が行われた。阿部次郎記念賞とは、2007年から東北大学で高校生を対象に行われている作文コンテストのことである。同賞は、高校生の優れたエッセーに贈られる賞であり、2013年度で第7回を数えるという。同氏の報告は、その賞に応募した高校生の実際の文章をもとに、その文体と主題の傾向を分析したものであった。

同コンテストでは、課題作品の部と自由作文の部の二部門で作品の募集を行っているが、応募者の作品の比率は、課題作品25%、自由作品75%という。自由作品の多くは創作文、読書感想文、生活文である。特に創作文の多さが際立つ一方で、論説文はごく僅かだという。

岩田氏は、同コンテストの選考委員であり、例年総評をまとめているという。その同氏による高校生の文章についてのコメントが、実に興味深かった。以下にその一部を抜粋する。

- ・一文ごとに改行するが一字下げはしないなど、私にとっては奇妙なスタイルで書かれたものがほとんどであったことから、おそらくはメールやケータイ小説の影響であろうと思われる（2008年）。
- ・内容が独りよがりなもの、よい文章を書こうという工夫の痕跡がみられないものが散見された（2008年）。
- ・自らの体験を語った作文の中にも、半ばフィクション、半ば実録といった趣のものが多かった（2009年）。
- ・全体の傾向として、上手な文章とそうでないものの二極化が進んだ（2010年）。
- ・読書感想文の多くで、自分が誰による何という作品を読んだのかすら明記しない、独りよがりなものがあった（2011年）。
- ・話題や技法について多くの類似点があったことに驚かされた。具体的な例を挙げれば、今年の課題作品の課題は「再生」であったのだが、多くの作品で、「再生」と言われてもびんと来なかったため、まずは辞書を引いてみた」という旨の文を一様に導入部にしていた（2012年）。

以上のような点に触れつつ、最後に同氏からは、応募作品のクオリティという面で主催者側が期待する水準に及ぶ作品がなかなか見られないことが、総括として報告された。

現状報告②：高等学校国語教育における書くことの指導

栃木県総合教育センターの指導主事を務める古口の子氏によって、高等学校国語教育における「書くこと」の指導の実態についての報告がなされた。

同氏はまず、平成11年度と平成22年度の学習指導要領の比較から国語科の単位配分の変化について触れ、単位配分を見る限りでは、「書くこと」に力点がシフトされてきているという。しかし、実際はそう単純ではない。書くことの指導に実際に当たる教師に行った同氏のヒアリング調査によると、「書くことの指導をするための十分な時間がない」、「生徒が書いたものを添削する時間がない」と悩む教師が少なくないという。その一方で、「書くことに対する意欲がなくて、書けない」、「書く内容が思いつかなくて、書けない」、「うまく言葉にできなくて、書けない」に述べる生徒が多いという。

このような実態を踏まえて、生徒の書く力を伸ばすために、教師としてどうしたら良いのか。同氏からは、教科書の使い方に工夫を凝らす、校内における教育活動と書くことの指導を連携させる、などの提案がなされた

ところで、同報告は終了した。

現状報告③：小論文指導+α – E判定からの合格だけでなく –

3つめの現状報告は、岩手県立黒沢尻北高等学校の教諭、鈴木勝博氏により行われた。小論文を担当する同氏は、高校3年間を通して「徹底的に」文章添削の指導をすることで、小論文の力は劇的に伸びると力説する。生徒が書く文章の変化を実際に示しつつ述べる同氏の主張には、とても説得力があった。

報告の最後に、高校で小論文を指導する現場からの声として、次の文章が引用された。

「詰め込み教育の反動として誕生した小論文が、逆に他の科目以上の詰め込み型に転落し、本来、真っ先に排除しようとしていた受験生たちがコピー/ペーストの技術を駆使して堂々と入学を果たしている状況。それがいまの小論文入試なのである。（石川巧『「いい文章」ってなんだ?』ちくま新書、2011）

くしくも基調講演の島田氏の主張と重なる「小論文入試の変質」という点について触れ終了した同氏の報告は、終始、熱を帯びたものであった。

3. 大学教育学会主催 公開講演会

「Liberal Education and America's Promise (LEAP) と VALUE Rubric の有効性 ～アメリカの高等教育における教養教育の展開とルーブリックを活用した評価～」

開催日時	2013年6月29日(土) 15:00～17:00
会場	ハーモニーホール(神戸市)
参加者	(関西大学) 小林至道、林田定男

目的

本取組の柱の一つである評価指標をこれから本格的に作成するにあたって、その先進国であるアメリカでも著名な Terry Rhodes 氏の講演は有益であると考えられたため、聴講者として参加した。

当日のプログラム

1	開会の辞	
2	主催者挨拶	小笠原正明氏(大学教育学会会長)
3	講演	「Liberal Education and America's Promise(LEAP) と VALUE Rubric の有効性 ～アメリカの高等教育における教養教育の展開とルーブリックを活用した評価～」 講演者: Dr. Terrel Rhodes 氏(Vice President of AAC&U)
3	質疑応答	
4	閉会の辞	

司会進行: 上村和美氏(関西国際大学)

講演の概要

AAC&U(アメリカ大学・カレッジ協会)一般教育学会の会長を務める Rhodes 氏による講演であった。講演

の前半では、AAC&U で現在行われている取組の概要について統計データに基づく発表がなされた。そして、講演の後半で、同氏が関わる VALUE（学士課程教育における妥当な学習評価）プロジェクトにおいて開発された「VALUE ルーブリック」についての講義がなされた。この後半のルーブリックに関する講義は本取組にとって特に示唆的であった。

同氏によれば、ルーブリック作成時の基本的なポイントは、1. 協力者の確保、2. 評価の観点、3. 評価レベル、4. パフォーマンス記述、の4点に整理される。

1つ目の協力者の確保については、学内の協力者を確保するのはもちろんのこと、広く学外までその理念や方針を理解した協力者を確保することが望まれる。というのも、VALUE ルーブリックはいわばメタ・ルーブリックであるところにその特徴があり、それを各大学の文脈に沿ってローカライズするという方法をとることによって、大学の垣根を越えた共通性と大学それぞれの多様性の両立を図ろうとするものであるから、という事由によるところが大きい。

2つ目の評価の観点については、いくつの観点にするのか、どのような観点にするのかが大事であり、それに併せて評価レベルを何段階に設定するのかが、3つ目のポイントとなる。

こうして評価のための大枠を用意したうえで、4つ目のパフォーマンスの記述となるわけであるが、「とにかくルーブリックはここに尽きる…」という同氏の言葉が印象的であった。ここに「どれだけ学生の実態に沿った評価語を用意できるか」がすべてといっても過言ではないわけである。

また、同氏は、仮に評価レベルを0点～4点の5段階に設定するとすれば、次の点に留意することが肝要であるという。まず、4点（最高点）はその大学の学士課程としての到達点を具現化したものにする。逆に、1点は新入生の実態（スタート時）の平均を具現化したものを表現したパフォーマンス記述になっていることが望ましい。

これと併せて、1点と4点の間となる2点と3点の「評価基準の差」に関する言及もあり、そこは「必ずしも等間隔な差にする必要はない」とのことであった。つまり、2点のパフォーマンスの評価内容が多少1点寄りになることや、3点の評価内容が4点寄りになっても致し方ない場合も出てくるということである。

最後に、ルーブリックの測定・評価に求められる信頼性、妥当性について、出来上がったルーブリックを実際に用いて検証する作業が重要であるとの指摘がなされた。評価者や評価時期による評価のバラつきを最小限に抑えるためには、学内・学外の協力者による検証作業を繰り返す必要がある、という問題に言及され、Rhodes 氏の講演は終了した。

4. 福岡大学

訪問日時	2013年11月13日(水) 15:00～17:00
訪問場所	福岡大学教育開発支援機構 (A棟地下1階)、中央図書館
大学側対応者	須長一幸氏 (教育開発支援機構 准教授)
訪問者	林田定男、小林至道、竹中喜一 (関西大学)

1. 訪問目的

福岡大学は福岡市城南区に本拠を置く総合大学である。学部生 19,719 名、大学院生 698 名（いずれも 2013 年 5 月 1 日現在）を抱え、9 学部 31 学科と大学院 10 研究科 34 専攻を持つ大規模私立大学であり、学生数や入学者層の多様性など、関西大学と共通点が多い。

福岡大学で行われている特徴的な教育プログラムとして、「福大生ステップアッププログラム (FSP)」が挙げられる。FSP は、2006 年から実施されており、「学び」「豊かな人間性」「社会」の3つのキーワードに関する知識・技能・態度を習得するプログラムの総称である。いずれのプログラムも正課外活動であるため、卒業要件単位には含まれない。今回は、今年度開講されている 11 のプログラムのうち、ライティング支援に大きく関連する「大

学から始める『言葉の力』育成プログラム」(通称「コトチカ」)に焦点を当てた。「コトチカ」が始まったのは今年度からであるが、既に西日本新聞に取り上げられるなど、福岡大学の特徴的な教育プログラムとなっている。正課外のライティング支援プログラムにおいて、どのような工夫を施すか、学生のモチベーションをどのように喚起するか、などを把握する意義は本事業にとって大きいものである。

また、福岡大学では、2012 年 7 月に図書館棟を新設した。新設に伴い、グループ学習室を充実させたり、ラーニング・コモンズを設置させたりするなど、アクティブラーニングを促進する学習環境を整備した。グループ学習室は、「コトチカ」の会場としても活用されている。ラーニング・コモンズには、ライブラリー・アシスタント (LA) と呼ばれる学生スタッフが待機しており、様々な学習支援を行っている。

このように、関西大学と類似した規模で、教育プログラムと学習環境の双方を充実させている点で特徴的と思われることから、訪問対象とした。調査結果から、本事業におけるライティング支援充実のための示唆を得ることが目的であった。

以下では、教育プログラムと学習環境それぞれの詳細について述べる。

2. 「大学から始める『言葉の力』育成プログラム」(「コトチカ」)について

(1) 「コトチカ」の目的・趣旨

「コトチカ」は、「大学での学修の基礎となる日本語力(言葉を活用して思考する力)と主体的な学習姿勢を育成すること」を目的としている。「単に知識を習得することよりも、プログラムで学んだ『より深く考えるための日本語の形式』を、ワークを通じて学生自身が実践し、身につけていくことが狙い」であるという。

(2) 「コトチカ」の概要

「コトチカ」は、前期に 9 回、後期に 6 回、合計 15 回行われた。開催時期は、前期が 5 月から 6 月、後期が 10 月から 12 月であった。「コトチカ」の内容は、2 種類に大別できる。1 つは、前期および後期の半分に行われる基礎的な内容(「いろは編」)で、もう 1 つは、後期の残り半分に行われる発展的な内容(「ほへと編」)である。「いろは編」では、大学で必要な文章の「形式」と、グループで学習する技術を学ぶ。「ほへと編」では、さまざまなテーマの文章を読み、グループで筆者の主張と根拠、全体の論旨やそれに対する意見を議論し、発表するとともに、思考をより深く掘り下げるための思考と表現の方法を学ぶ。「ほへと編」は「いろは編」の受講経験者向けである他は、受講に制約はない。また、プログラムの中心となるグループワークやディスカッションのテーマが異なることもあり、受講生の受講回数にも制限はない。実際に、受講者の 1 割程度はリピーターであるという。

「コトチカ」では、受講生同士のグループワークに力点を置いている。受講対象は全学部全学年であり、グループ分けは講師側で行うため、受講生は、初めてコミュニケーションを取る者同士で受講するケースが多くなる。グループ学習を多く取り入れていること、かつ、1 回完結型の 90～120 分という短い時間のプログラムであることから、受講生同士のアイスブレイクは重要である一方で、そこにあまり多くの時間をかけることはできない。そこで、グループワークを円滑に進める工夫がいくつか必要になる。

まず、講師側では「コトチカ」開講までに、「学部・学年などの属性」、「人見知り度」、「読書量」など受講生のプロフィール一覧を準備する。準備されたプロフィール一覧は、教育開発支援機構の事務室内にある掲示版に模造紙程度の大きさになって貼られる。受講生は事前に窓口へ当日のテキストを受け取る必要があるため、必ず掲示版を見ることになる。

また、グループワーク中は「自己紹介作成シート」、「自己紹介の『聞き方』」など、用意された教材を用いることで、アイスブレイクが円滑に進むよう工夫されている。さらに、2 回以上受講しているリピーター受講生は、グループワークにおいてファシリテーターの立場を取る。このように、学生自身の力を引き出し、活用する仕組みが随所に施されているといえるだろう。

「コトチカ」は、現時点では 2 名の講師により行われており、前期の受講者は 170 名程度であった。テキストを公開していたり、同様の内容で学部への出張講義を行ったりするなど、学内への普及を促進している。福岡大学では、「コトチカ」のようなライティング支援に関する教養科目は少ないが、学部からの反応は良好であり、今後、正課科目へ展開する可能性もあると思われる。

3. 図書館における学習支援環境

2012年7月に新設された中央図書館において、学習支援という観点から特徴的なのは、「グループ学習室」、「ラーニング・コモンズ」、「ライブラリー・アシスタント (LA)」の3点である。以下、それぞれについて詳細を述べる。

(1) グループ学習室

グループ学習室は、ゼミやグループでの自学自習を目的とした空間で、中央図書館内に9室ある。予約制の部屋とオープン利用の部屋が用意されているが、予約制の部屋も予約がなければ自由に使用できる。1室あたり10席から26席だが、2室つなげて利用できる部屋もあり、最大席数は30席である。プロジェクターとスクリーンが用意されているのは2室で、無線LANはいずれの部屋でも利用できる。なお、前期の「コトチカ」は、このグループ学習室を用いて行われた。

グループ学習室内での飲食は固く禁じられており、我々の訪問中においても、図書館職員が学生に直接注意する光景をたびたび目にした。昨今の大学図書館で広まりつつある軽度の飲食を可とするラーニング・コモンズ化とは、一線を画す方針であることが分かる。

(2) ラーニング・コモンズ

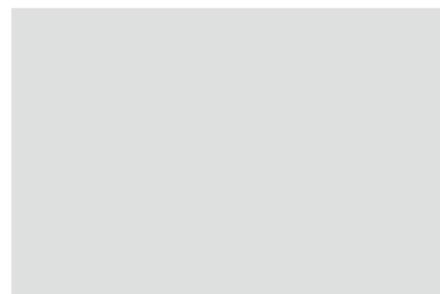
ラーニング・コモンズは、中央図書館の2階・3階・4階の3フロアに設けられており、席数はいずれも20席である。特に予約は不要で、学生が自由に使えるようになっている。この場での飲食や携帯電話での通話は禁止だが、利用者はすぐ横にあるリフレッシュコーナーで飲食や通話を行うことができる。

(3) ライブラリー・アシスタント (LA)

ライブラリー・アシスタント (LA) は、ラーニング・コモンズ内で学習支援業務にあたる大学院生スタッフである。LAは、ラーニング・コモンズ各フロアに1名ずつ、計3名が、平日の授業時間帯(9:00～21:10)に在席している。

LAの基本業務は、図書館利用のサポートである。具体的には、(1) パソコンの操作方法、(2) レポートや論文作成のための情報検索(選択)方法、(3) ライティング支援、といったものが挙げられる。相談件数の統計は取っていないが、ヒアリングをしたLAによれば、相談の多くは(1)や(2)であるという。

LAは、平成25年11月現在18名在籍している。採用は、年2回の募集(図書館Webサイト掲載や、大学院の合格通知に募集案内を同封)により行われる。採用面接は、図書館長などが行う。また、研修は3コマ程度、図書館職員2名が中心となって行っている。日常的なLAの指導についても図書館職員が担当することになっている。LAはWeb上のサービスを用いて業務日誌を書き、図書館職員など関係者が業務内容を把握できるような仕組みにしている。しかし、図書館職員は、他の業務との兼ね合いから日常的なLAのサポートを十分には行えず、今後の課題が残る状況とのことである。



福岡大学中央図書館内ラーニング・コモンズの様子



福岡大学中央図書館内リフレッシュコーナーの様子

5. 九州産業大学基礎教育センター

訪問日時	2013年11月14日(木) 13:00～16:00
訪問場所	九州産業大学基礎教育センター(1号館2階)
大学側対応者	辛島美絵氏(基礎教育センター所長)、橋本祐子氏(基礎教育センター准教授)、阿部敬氏(基礎教育センター事務室長)、石原弘美氏(基礎教育センター事務係長)、堺美樹氏(基礎教育センター主任)
訪問者	林田定男、小林至道、竹中喜一(関西大学)

1. 訪問目的

九州産業大学は福岡市東区に本拠を置く、学部生10,807名、大学院生158名(いずれも2013年5月1日現在)を抱え、8学部と大学院5研究科を持つ大規模私立大学である。九州産業大学では、基礎教育の充実に力点を置いている。今回訪問した基礎教育センターは、「高校から大学教育へのスムーズな移行の支援」や「高度な専門教育を確実なものとするための基礎作り」という役割を担う組織である。教員だけでなく、学生アシスタントやステューデントコンサルタントの資格を持つ職員も学習支援/学生支援にあたっているのが特徴である。このような、教員・職員・学生の三者協働で行う学習支援/学生支援体制に関する事例から、ライティングラボ/ライティングセンターの支援体制の充実に資する情報を得ることを目的とした。

以下では、基礎教育センターの役割や体制、提供プログラムについて述べる。

2. 基礎教育センターについて

(1) 概要

基礎教育センターは、2009年4月に開設された。現在は、教員8名(特任教員2名含む)を擁する。国文学や理学、法学など、教員の専門は多様である。開室時間は、平日が9:00～17:00(木曜日のみ20:00まで)、土曜日が9:00～13:00である。

開設以来、学習支援を含む学生生活全般の支援を行ってきた。主な取組としては、専任教員や職員が個人面談を受けられる「オフィスアワー」、学生と教職員が昼食を取りながら会話を楽しむ場である「たべり場」、学習習慣の修得を目的とする「KSU基礎トレ」などが挙げられる。

開設当初は、来室者を増やすために、学生が集まる場所として認識してもらうような広報を行っていたこともあり、遊びに来たり、雑談に来たりする学生も多かった。しかし、上記のプログラムを整備するにつれ、学習支援や学生生活相談を求めて来室する学生が増加してきた。平成23年度の年間統計では、延べ約5,300名の学生が来室したという。実人数ベースでもその半分程度であるとのことで、全学生の約4分の1は基礎教育センターを訪れている計算になる。全学的に認知度の高い空間であるといえるだろう。

(2) KSU 基礎トレ

「KSU基礎トレ」とは、学生の自学自習用プリントであり、「数学編」「国語編」「社会編」「物理編」の4科目9種類が用意されている。難易度は比較的容易であり、基礎学力の定着もさることながら、学習習慣のきっかけづくりとなることを主目的としている。問題は独自で作成しており、週1回更新される。学生はプリントを1枚解くごとにスタンプカードにスタンプを押印され、一定数スタンプがたまると粗品が贈呈される。現時点では、150名程の学生がコンスタントに取り組んでいるようである。

(3) 学生アシスタント

基礎教育センターには、学生アシスタントと呼ばれる学生スタッフが8名(うち、大学院生1名、4年生4名)在籍している。学生アシスタントの主な役割は、ピア・チューティングであり、学生の履修相談から生活相談ま

で幅広く対応している。学生アシスタントは、教職員による面接を経て採用され、年2回程度の研修を受ける。研修内容は、履修相談の勉強会やコミュニケーションなどである。日常的なミーティングや個人面談も行っている。

(4) スチューデントコンサルタント

基礎教育センターに所属している事務職員のうち、4名が「スチューデントコンサルタント」の資格を保有している。「スチューデントコンサルタント」とは、内閣府認証の特定非営利法人「学生文化創造」が、①生活に関する支援相談、②健康に関する支援相談、③学習に関する支援相談、④就職活動等進路に関する支援相談の4分野に関して学生支援相談業務の専門性を有すると認められたものに授与される資格である。具体的には、上記法人が実施するスチューデントコンサルタント認定試験において、一定水準に達すると認定される。

九州産業大学では、学生対応のレベルを向上させる目的で、スチューデントコンサルタントの基礎研修講座を受講することを、学生支援業務におけるStaff Development (SD) の一環として位置づけている。ただし、一定程度の実務経験は必要条件になっており、理論と実践を融合させた実効的なSDとなるよう留意している。

3. 基礎教育センターと授業カリキュラムとの連携

(1) 国語関係科目

九州産業大学では、2012年度から国語カリキュラムにおいて、スタディ・スキル系の科目を設置している。以下、国語関係4科目の詳細について述べる。

①スタディ・スキル (文章力)

大学の授業において求められる文章力の育成を目標に、2012年度より開設された科目である。一クラスにつき上限25名先着順の授業で、受講者数が131名(2012年度)から362名(2013年度)へと急増していることから分かるように、学生の需要が非常に高い科目の一つと言える。

授業については、二者択一型意見文、課題解決型意見文、要約文、レポート、授業感想文など、大学の授業全般で求められる文章の書き方の指導をメインとしている。文章を書くことに対する苦手意識や嫌悪感を少なくするために、学生に伝達する情報を精査したり、添削専門スタッフによる細やかな指導をしたりといった配慮がみられる。添削スタッフは、高校を退職した元教員や大学院生である(2013年度現在5名体制)。

また、授業を切り口に、大学での学習・生活指導までフォローしている点も特徴的である。たとえば、学生同士の意見の聞き合いの機会を設ける、行事や学期スケジュールを提示するなどの工夫を通して、学生の仲間づくりや生活リズムの構築を促す一方で、長期欠席の予兆が見られる学生には早い段階からケアを行うなどの配慮もみられる。

授業評価アンケート(2013年度)の結果によれば、総合評価平均は4.5(5点満点)と良好である。学生からは、授業内容や添削システムにおいて高い評価を得ている。その一方で、授業内で課題文を書き終わらない学生への対応、添削専門スタッフの負担の大きさ、という点で課題を残している。

②スタディ・スキル (国語力)

語彙力や読解力など、総合的な国語力の育成を目標とした科目である。同時期に開設された上述のスタディ・スキル(文章力)と同様に、2012年度の188名から2013年度は388名へと、受講者数が急増している。授業内容は、敬語・文法・語彙・表記についてから文章序・長文読解についてまで幅広い。授業の最初に前回の授業内容についての小テストを毎回行うほか、学期中に2回の確認テストを実施している。

授業を担当する教員は、シラバスの書き方(動機付けのため)や授業の組み立て方(飽きさせないため)に工夫を凝らしているという。また、授業を切り口に、大学での学習や生活といったスタディ・スキル全般の指導を広く行い、大学生活での躓きがないよう早期フォローに努めている。

授業アンケート評価(2012年度)は、総合評価平均4.5(5点満点)であった。学生からは、授業内容や勉強の仕方を教えてもらえる点に、高い評価を得ている。一方で、毎回の小テストに対する負担などからドロップアウトをする学生がいることや、SPI対策に終始しているという先入観を持たれることなどに、改善すべき課題を

残している。

③実用国語

就職活動に必要な国語力の育成を目標に、2013年度より新設された科目である。2013年度の受講者は129名であった。授業で扱うテーマは、正式な手紙・メールの書き方、封筒の使い方、敬語の使い方、企業への電話のかけ方、面接の受け方、グループディスカッションへの参加の仕方などであり、就職活動の実場面に即した内容となっている。

授業に関しては、大学入学以降の早期から就職活動時=将来(3年次)を明確にイメージさせることや、リサーチの重要性を強調することに力点を置いている。また、社会人としての言葉の使い方まで指導するなど、大学だけにとどまらない社会常識やマナー等への意識の涵養も指導内容に含まれている点に工夫がみられる。

授業評価アンケートでは、評価平均で4.5(5点満点)を得た。全学評価平均の約3.8と比較して、高評価であると言えるだろう。一方で、「この授業についての勉強を1週間あたり何時間しましたか」という設問では、9割の学生が「3時間以下」と回答するなど、授業外学習の促進という面で、課題を残している。

④ライティング・スキル入門

就職活動に必要な文章力の育成を目標にした科目である。2013年度に新設され、同年度の受講者は154名であった。授業では、自己分析、履歴書など、エントリーシートに関わる文章を作成することや、時事に関する意見文を書くことなどをテーマとしている。スタディ・スキル(文章力)と同様に、添削専門のスタッフによるアフターケアを行い、文章の書き直しを通しての正しい文章表現の定着を目指している。

以上、国語関連科目の現状を中心に述べてきたが、当面の課題は、国語関連科目を現4科目から拡充することであるという。具体的には、関連コマ数を2013年度の40コマから2015年度には54コマへ、受け入れ可能人数を2013年度の約1,300名から約1,900名まで拡充する案が出ている。また、国語関連科目の内容から、随時オリジナルテキストを作成する予定であるという。

(2) プレースメントテスト

九州産業大学では、入学後すぐの時期に、国語と英語のプレースメントテストを実施している。英語については、クラス分けの際に利用することが第一目的であるが、学期末に再度テストを行い、翌年のクラス編成の際の参考にしていくという。国語については、数年前まで徐々に点数が下降傾向にあったが、逆に、そうした統計データを示すことで、国語科目の増設の必要性を訴求する際の根拠にしているという。なお、今のところプレースメントテスト実施後の、追跡的なテストは行っていない。

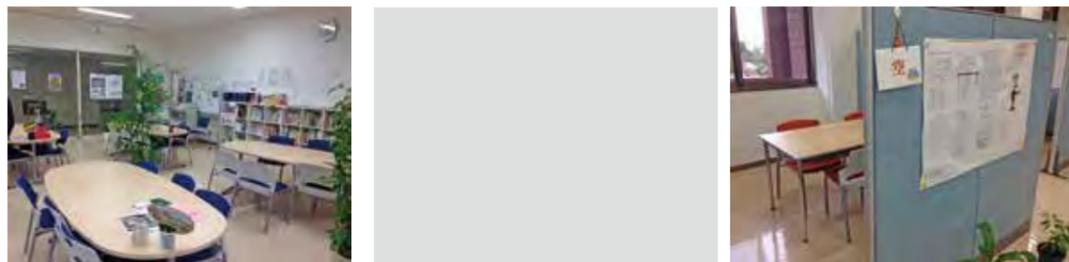
(3) 連携体制のあり方

最後に、以上で述べてきた基礎教育センターと授業科目の連携体制のあり方について触れておきたい。基礎教育センターでは、教員と職員、学生スタッフの役割の棲み分けはもちろんあるものの、教員と事務職員が「一緒に考えて、行う」をモットーとしている。

そして、基礎教育センターから学習支援現場のニーズとして挙げられたさまざまなアイデアは、運営委員会、学部の教授会という機会を経て審議されるよう、全学的な体制が整えられている。もちろん、全てが順調に進んでいるわけではなく、基礎教育センターと学部とで考え方がぶつかるケースもあるというが、訪問当日のインタビュー全体を通して、大規模大学にもかかわらず連携体制が整った先行事例であるという印象を強く残した。



基礎教育センター前の立て看板



基礎教育センター内の様子

6. 大学等における男女共同参画推進セミナー

開催日時	2013年11月28日(木)～29日(金)
会場	国立女性教育会館 (埼玉県比企郡嵐山町)
参加者	(津田塾大学) 田近裕子、大島美穂、飯野朋美

本取組のFDの一環として、ステークホルダーとして参画していただいている国立女性教育会館主催の研修「大学等における男女共同参画推進セミナー」に出席した。

1日目(28日)は、大学における男女共同参画や、女性研究者支援・キャリア形成支援をテーマとする講演や講義が行われた。

○羽入佐和子氏 「大学における男女共同参画の意義」(お茶の水女子大学学長)

日本における男女共同参画の現状をふまえ、同大学で行われている取組を紹介。国の施策として女性活用の数値目標が示されるなか、積極的な取組を可能にするための体制づくりの重要性が説かれた。

○和田勝行氏 「女性研究者支援と研究力強化」(文部科学省科学技術・学術政策局)

具体的数値により科学技術・学術分野における現状を説明、女性活躍の推進の意義と課題が提示された。

○渡辺三枝子氏 「大学における女性のキャリア形成支援」(筑波大学名誉教授)

社会状況の変化や、実際に行われている女性のキャリア形成支援における問題点をふまえ、大学で必要とされる女性研究者・女子学生へのキャリア支援のあり方について提言があった。

夕食後には、参加者それぞれが抱える課題などについて情報交換する場が設けられた。懇談のなかで、キャリア支援の視点から、ライティングセンターに関心を持った方があり、後日、センター視察のため来校されることとなった。

2日目(29日)は、大学等における男女共同参画に関する調査研究についての報告の後、テーマ別分科会が行われた。

○野依智子氏 「大学等における男女共同参画に関する調査研究の報告」

2013年9月から10月にかけて行ったアンケート調査の結果を紹介し、女性研究者の置かれている環境や男女共同参画のための課題、女性研究者支援事業で今後必要な支援について明らかにした。

<分科会>

テーマごとの分科会では、事例報告とそれのもとにグループ・ディスカッションを行った。

○分科会1 「大学における男女共同参画の体制づくり」

事例報告：香川大学、宮崎大学

○分科会2 「大学における「女性研究者支援のあり方」

事例報告：名古屋大学、上智大学

○分科会3 「理系女子学生へのキャリア形成支援」

事例報告：名古屋工業大学、香川高等専門学校

最後に、全体会で各分科会の報告があり、参加者で情報を共有した。

7. 早稲田大学 ライティングセンター視察

訪問日時	2014年1月27日(月) 12:15～16:00
訪問場所	早稲田大学ライティングセンター(早稲田キャンパス7号館1階)
大学側対応者	佐渡島紗織(早稲田大学留学センター教授) 太田裕子(早稲田大学オープン教育センター助教)
訪問者	西浦真喜子、岩崎千晶、小林至道(関西大学)

ライティングセンターの概要

早稲田大学ライティングセンターは、大学正門を入ってすぐの学舎1階に設置されている。入口のドアは透明で中の様子が見えるようになっており、学生が訪問しやすいような工夫がされている。中に入ると右手に受付カウンターが設置されており、正面奥には、チューターがライティング支援を受け持つブースが5つ準備されている。

受付カウンターの奥には、チューターの担当コマを示す予定表、学生の指導状況や指導時に作成したメモなどをファイリングした学生カルテ、チューターが指導履歴や研修で学んだことなどをファイリングするチューターカルテが収納、保管されている。学生カルテに関しては、紙で保管することでイラスト・メモなどをそのままのかたちで残すことができる点、時間がない時にすぐに情報を確認できる点、などのメリットがあるため、これまでのところ紙で管理しているという。

チューターの指導ブースにはノートパソコンや時計、ライティング関連の参考書など指導に必要な用具一式が置かれ、比較的コンパクトなスペースで指導が行われている。

ブースの横には、これまでのチュータリングの録音記録から各チューターが選定したセッションを文字起こししたアーカイブ集が、ファイリングされている。各学期にチューターひとりあたり2回のセッションを文字化することができる予算を、大学から得ているという。チューターは、他者の参考あるいは自らの振り返りにつながるセッションを各自選定するが、上手いかなかったセッションを選ぶケースが多いという。その際、「なぜこのセッションを選んだのか」については必ず書いたうえで、「全然うまくいかなかった。たぶん、この辺りに問題があっとうまくいかなかった」など、メモを残すようにしている。それに対して、「このセッションはすごく良く出来ていた。特にこの質問の仕方が良いと思った」など、他のチューターがコメントを書き込むようにしているという。

チューターの研修

ライティングセンターでは、EE(英語で英語の論文を指導する)、EJ(日本語で英語の論文を指導する)、JJ(日

本語で日本語の論文を指導する)、JS(日本語で留学生の論文を指導する)といった4タイプの指導が行われている。チューターは、修士課程、博士課程の大学院生である。各チューターは、週4コマから10コマで勤務している。ほぼ毎週月曜日に1時間半の時間をミーティングにあてており、この時間を活用してスタッフ間の研修を実施している。今回の訪問で見学した研修は、この時間を活用した自由研究の発表であった。チューターは、2～4名程度のチームに分かれ、それぞれの課題に基づいたテーマを設定して自由研究を行う。各学期末にこうした研究発表をすることを前提にスケジュールが組まれており、チーム分けや発表テーマの設定は、各チューターがそれぞれ関心のあるテーマを出し合うなかで決定される。

研究テーマを学会で発表するチームもあれば、自分たちの指導の振り返りを狙いとするチームもある。各チームには教員と助手の担当が決められており、教員や助手は適宜サポートに入る。

訪問当日、各チームが発表していたテーマと発表の概要は、下記の通りである。

(1) 「Don't miss it! –書き手の出すサイン–」

この研究発表は、セッションにおける学生からのサインのうち、特に「つぶやき」の意味に着目していたものであった。書き手の考えをより良い形で文章に反映させるためには、書き手から発せられるさまざまなサインをキャッチする必要があるという実践者視点からの動機が、研究の背景にある。研究の目的は、1) サインにどのようなものがあるかを明らかにする、2) サインが出た前後のやり取りからサインの意味を推測する、3) そこからチュータリングにおいて必要だと言えることを検討する、の3点であった。

学生がセッション中に発した、「やっぱり」、「すみません」、「～ちゃだめですか」など、一見ささいな言葉をキーワードとして捉え、その前後の文脈を細かく分析したことにより導き出された結論は、①サインには、a. 元々書き手が持っていた悩みや意向を示す発言と、b. コミュニケーションの状態を示す発言がある、②何気ない発言にも、書き手の考え・不安・要望が隠れている、③チューターはサインに注目してチュータリングする必要がある、の3点であった。

最後に、こうしたサインに注目してセッションを振り返ることで、自分が見逃しているかもしれないことも見つけることができるのが、有意義な点として挙げられた。

(2) チューターに依存する学生が自ら書く力を培うための方法

発表者がこれまでに担当した英語のセッションでは、何度もセンターに足を運ぶものの、いつまで経ってもチューターに依存したままの学生がいるという。そういった学生に、自律的に学んでもらうための方法としてアクションプランを立て、実際に録音したものを持って帰ってもらうなどの手立てを実践した。本発表は、その検討結果の報告であった。

(3) 「ネイティブチェック」についてのイメージ

この発表では、各チューターが、「ネイティブチェック」に対してどのようなイメージをもっているか、というリサーチクエストのもと行われたアンケート調査の結果について報告された。

アンケート調査の結果、JJとJSの間に、抵抗感の有無という点で違いが見受けられた。JSチューターの回答者に「抵抗感がない」が多かった一方で、JJチューターには「抵抗感がある」と答えた者が多かったという。その理由として、JSチューターは、ネイティブチェックがそれほど一方的な指導ではないと日頃から考えているという点が挙げられた。留学生を書く文章の表現を確認することは、書き手の意図を確認することにつながるため、こうした一連の流れは他のセッションと変わらないと考えている、というわけである。

今回の調査を通して、「ネイティブチェック」と言った時にイメージする作業がチューターによって異なることが示唆されたため、今後は、「ネイティブチェック」のイメージの違いを自覚・共有していく必要があるとの考察が示された。

(4) 英語学術的文章における文法フィードバック

英語のセッションでよくある文法の間違いをチャートとして作成し、それを指導に活用し、評価するという実践の報告を行っていた。チューターが作成したチャートは好評で、学生も自らの誤りを確認できる良い機会になっていることが報告された。

(5) ライティングセンターにおけるチュータリングの専門性の発展

最後の発表は、これまでの実践報告を受けて、理論的な視点から整理するものであった。

今後の研究課題として、1) チューターの多様性がどのように作用して専門性の向上に影響を与えたか、などの具体的な実践研究を積み上げること、2) チューター同士の多様な視点からの実践についての振り返りや議論、実践経験の交流などが、ライティングセンター全体の実践者のコミュニティの発展にどのようにつながっているのか、その理論研究と実践研究を行うこと、などが挙げられた。

以上のように、訪問時にライティングセンターで実施されていた自由研究型の研修は、PBL学習であると言える。セッションを通じたチューター自身の課題探求をもとに、詳細な分析や考察の結果を示すチームもあれば、課題を解決する手立てとして具体的な改善策を提案するチームもあった。こうした分析・考察や提案が、その後のライティングセンターにおける各チューターの指導に効果をもたらしという好循環が生まれているように感じられた。

また、こうした自由研究発表の場を研修として設けるだけに留まらず、海外のシンポジウムで発表するよう促すなど、その成果を学外へも発信するという方針は、チューターの成長やプレFDという観点からも大変意義ある実践であると言える。



ライティングセンター入口



ライティングセンター受付



ライティングセンター内相談ブース

8. 学生支援の動向－修学支援とキャリア支援－

日 時	2014年2月4日(火)
場 所	東北大学川内北キャンパス 講義棟B棟 B201
参 加 者	(関西大学) 小林至道

目的

「〈考え・表現し・発信する力〉を培うライティング支援/キャリア支援」という本取組の視座から、大学における修学支援とキャリア支援の現状と動向について最新の情報を有することは不可欠であるため、聴講者として参加した。

当日のプログラム

1	開会挨拶	鈴木敏明氏（東北大学高等教育開発推進センター 教授）
2	講演Ⅰ	「大学における修学支援の現状と課題」 沖 清豪氏（早稲田大学文学学術院 教授）
3	講演Ⅱ	「大学におけるキャリア支援の現状と動向」 望月由起氏（お茶の水女子大学学生・キャリア支援センター 特任准教授）
4	討論	進行：鈴木敏明氏
5	閉会	挨拶：鈴木敏明氏

本講演会の概要

本講演は、東北大学高等教育開発推進センターが取り組む「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」事業において、専門性開発プログラム（PDP）の一環「教育関係共同利用拠点提供プログラム：学生論」として行われた。大学では、従来型の発想に囚われることなく状況の変化に柔軟に対応し、きめ細やかな学生支援を展開することが求められるようになってきた。そのような状況を鑑み、修学支援とキャリア支援という2つの視点から、学生支援の取り組みの現状と将来動向についての知見を得ることが、本講演の主旨とされた。

講演Ⅰ：沖清豪氏「大学における修学支援の現状と動向」の内容

まず、修学支援に関して、早稲田大学の沖清豪氏による講演が行われた。同氏の講演は、独立行政法人日本学生支援機構の調査データのうち、2010年 JASSO 調査のデータに基づいたものであった。

同氏によれば、修学支援導入の背景は、1. 高校教育の多様化に伴う学生像の多様化、2. 大学入試変容に伴う入学率の変化、3. 進学率向上に伴う学生像の変化、に整理される。この昔とは違う学生・学生像にどう対応するかが問われるなかで、大学によってその認識・対応に大きな差があるという主張を、さまざまな角度からの比較検討を通して示した点が、同氏の講演における第一のポイントがあった。

同氏からは、「四大・短大・高専」、「国立・公立・私立」、「小規模校・中規模校のうち小・中規模校のうち大・大規模校」という観点で比較検討した結果、それぞれの違いがデータによって示された。カテゴリごとの差異の特徴に関する指摘も興味深いものであったが、比較検討を通して見えてきた大学全般における共通点、すなわち、「そもそもなぜ学ぶのか」という学習意欲・動機付けの面での消極的な学生の率が、ここ数年でどのカテゴリーにおいても10%から20%近くの割合で増加しているという指摘は、より切実な問題であろう。

こうした学生の現状に対し、近年、各大学で行われている修学・学習支援策として、1. 学習支援施設における入学前教育の拡充、2. 先輩学生（上級生・大学院生）を活用したピア・サポート体制の充実ならびにその成果の検証、3. 学習方法の改善としてのeポートフォリオ・アクティブラーニング・PBL学習の展開、4. ラーニングコモンス化などの動向が報告された。

最後にこれらの修学支援が直面する課題として、1. 誰が何を担当すべきか（教員・職員・学生・高大連携）、2. 質保証の議論の下で何を議論すべきか、3. 当該組織固有の問題をどう把握しているか、4. 大学の「学校化」、学生の「生徒化」をどう受け止めるか、5. 学生の変化・多様化をどう受け止め支援するか、という5点を挙げて、講演は締めくくられた。

講演Ⅱ：望月由起氏「大学におけるキャリア支援の現状と課題」の内容

続いて、キャリア支援に関して、お茶の水女子大学の望月由起氏による講演が行われた。大学におけるキャリア支援推進の背景を踏まえたうえで、全国調査に基づくマクロな視点から、キャリア支援の現代的特質を概観し、それを担う組織体制や担当者の現状を意識しながら、実践上の課題を考えるというのが、同氏の講演の主旨であっ

た。

同氏からは、大学におけるキャリア支援の現代的特質として、1. 「正課外支援」から「正課教育も」、2. 「学内での支援」から「学外機関との連携による支援も」、3. 「卒業年次生（在学生）対象」から「卒業生も対象」へと、キャリア支援の質的な深化と広範化が進んでいる点が、2010年 JASSO 調査データによる裏付けとともに挙げられた。そうした変化に並行して、1. 「就職支援」を業務とする組織の一般化（国立・公立・私立の設置者問わず）、2. 「就職」から「キャリア」へ、「課」から「センター」へという支援組織の体制という面での拡充・拡大の動きも見られる（ただし、この点に関しては、名称が変化しただけで内実はそのままとする疑念の余地があるとの注釈付きではあるが）という報告がなされた。

このような大学におけるキャリア支援の現状について、1. 主な担い手は、「職員」（私立大学では常勤職、国立大学では非常勤職の傾向）である点、2. 約半数の大学に「キャリアコンサルティング技能士」などの有資格者がいる点、3. 半数以上の大学で、学外から担当者を採用あるいは配置（国立大学では7割以上）している点、4. これらの採用・配置は、「学生数」との間で有意な相関がある点、などが特徴として挙げられた。

最後に、キャリア支援が質的に深化、広範化している時代におけるキャリア支援の課題として、1. 学内組織間の連携、2. 担当者間の専門性の担保、3. 専門性の高い人材を活かすためのマネジメント力、4. 個々の大学等における支援の検証、の4点が指摘された。

討論の主な内容

両氏による講演の後、フロアを交えての全体討論の場では、次のような議論がなされた。

- Q. 海外の大学で、入学前教育等の修学支援という話はあまり聞いたことがない。この修学支援というのは、きわめて日本的な発想（状況による必要性）から生まれたものなのか？
- A. （沖氏の回答）たとえば、世界の大学ランキング等でマスコミを通して発表されるような上位校大学（特に米国）では、それに見合うスキルがあることが入学の大前提なので、日本で言うところの「修学支援」はほとんどないのが実状である。一方で、イギリスではここ数年の顕著な変化として、特に中位校・下位校の学生を対象としたスタディスキル系の教材・出版物が書店等に溢れるほど、修学支援の動きが広がっている現象が見られる。
- Q. 修学支援の効果は、どのように測るのか？
- A. （沖氏の回答）日本の場合、多くは「学生の満足度」という指標による。イギリスなどの海外でも主流は「学生の満足度」であるが、そこに費用対効果（コストパフォーマンス）的な視点が加わる点で、日本とはやや事情が異なる特徴がある。
- Q. 日本の大学における「キャリア支援」とは、そもそも何なのか？よくわからなくなった。今日の講演を伺っても、産業界が考える、あるいは求める「キャリア」と、大学が考える「キャリア」の乖離があまりに大きいという現状認識に変わらないが、その辺どうお考えか。
- A. （望月氏の回答）日本の大学におけるキャリア支援の多くが、実質「就職活動」支援になってしまっているのは確かで、大学間で学生の就職活動に関する「面倒見の良さ」や、「就職率の高さ」のアピール合戦（言葉は選ばなければいけないが）の様相になってしまっているのもまた事実だと認識している。一方で、日本の大学は、急速なユニバーサル化に伴う対応として、学生の就職面も支援する「量的」な必要性に迫られたフェーズから、徐々にその支援の「質」が問われるフェーズへの過渡期に差し掛かってきているのではないかと。

X

研究成果報告

9. The Sixth Symposium on Writing Centers in Asia

開催日時	2014年3月8日(土) 午前11時～午後4時30分
会場	桜美林大学(東京・町田市)
参加者	(津田塾大学) 飯野朋美、大原悦子、ジェフリー・ピアス

本連携事業のステークホルダーの一つである、The Writing Centers Association of Japan (WCAJ) が主催する6回目のシンポジウムに参加した。ライティングセンターの実践や、チューターの研修などをテーマにした17のペーパーセッションがあった。以下、そのうちのいくつかを報告する。

- 上智大学ライティングセンターのJim McKinley氏は、返却されたレポートにつく教員のコメントを、約半数の学生が「ほとんど読んでいない」というアンケート結果を報告した。一方で、ほとんどの学生が「もしも加点されるのなら、コメントをもとに書き直す」と答えたため、McKinley氏は自身の授業では、レポートの返却後、ライティングセンターを利用した学生には5点加えているという。これにより、レポート返却後もライティングセンターを活用する学生が増えたようだ。加点の是非は意見が分かれるところだが、教員が課題に求めているものは何で、自身のペーパーには何が足りなかったのか、学生がチューターと共に振り返る機会になる。ライティングはプロセスであり、「提出すれば終わり」ではない。書き上げるまでのサポートだけでなく、書き上げてからのサポートという、ライティングセンターの新たな役割・可能性を示す興味深い考察だった。
- 今回、会場となった桜美林大学では、2013年5月から母語以外の言語におけるライティング支援を行っている。ライティングセンターを始めるにはどのような準備が必要だったか、1年間の活動を通し、チューターたちはどのような悩みを抱え、それをいかに解決してきたか、といった発表があった。
- 早稲田大学ライティング・センターではチューター研修制度を改善するため、チューターが自らのチューター史を作成し、振り返りを行った。その有効性について、大学院生チューターたちが報告した。チューターの「成長」に関しては、東京大学でも新人の大学院生チューターに焦点を当てた調査がなされた。経験を積むにつれ、チューターの意識が「書き手」に向くようになり、個々の学生に合ったチュートリアルを提供するようになる、といった考察が示された。
- 国立大学法人政策研究大学院大学のKaterina Petchko氏からは、ライティングセンターの効果はどう評価するのか、という問題提起があった。ライティングセンターの目的が「自立した書き手」を育てることにあるのなら、それはいかにして測るのか。そもそも測り得るのか。ライティングセンターが抱える永遠の課題が、改めて提示された。

このほか、EFLの学生に対するチュータリングに関して、さまざまな角度から発表があった。津田塾大学ライティングセンターでは、2013年度から英語の個別相談を始めたばかりである。英語相談を担当する教員もシンポジウムに初めて参加し、他大学の参加者たちと活発な意見交換をすることができた。

本章では、取組に関連して行なわれ、研究会で発表された研究成果3件を紹介する。

1. 大学ICT推進協議会年次大会 (AXIES)
2. 第6回初年次教育学会
3. 大学間連携共同教育推進事業 選定取組全国シンポジウム

1. 大学 ICT 推進協議会年次大会 (AXIES)

開催日時	2013年12月18日(水)～20日(金) ポスター発表は19日(木)9:30～11:30
会場	幕張メッセ国際会議場
参加者	(関西大学) 本村康哲、岩崎千晶、小林至道 (津田塾大学) 稲葉利江子

目的

当大会にて、本取組に関するポスター発表を行うため関西大学と津田塾大学から計4名が参加した。本発表では、関西大学のWEBシステム(まなかんweb)に蓄積された学生の相談事項の記述内容の分析を行い、関西大学ライティングラボへ相談に訪れる学生が相談前の段階で抱えている課題と、学年層における相談時期の傾向について報告した。なお、発表要旨と当日のポスター発表の内容については、次ページの資料を参考されたい。

■添付資料

ライティングセンターにおける相談記録の分析

—学生からの相談事項に着目して—

岩崎 千晶*, 稲葉 利江子†, 小林 至道*, 本村 康哲**

関西大学* 津田塾大学† 関西大学**

教育推進部 学芸学部 文学部

ciwasaki@kansai-u.ac.jp, inaba@tsuda.ac.jp,

motomura@kansai-u.ac.jp, nkoba@kansai-u.ac.jp

概要: 大規模私立大学である関西大学では、2011年度よりライティングセンターを開設し、学生のライティング支援にあたっている。ライティングセンターでは、Webシステムを活用して、オンライン予約を受け付けたり、学生からの相談内容やTAの指導履歴を記録している。本発表では、WEBシステムに蓄積された学生の相談事項に着目して分析を行い、学生が抱えている課題と学年層における相談時期の傾向を分析する。さらに、分析の結果をもとに、ライティングセンターの運営やライティング指導に関する手立てを提案し、ライティング指導の充実を目指す。

1 はじめに

大学のユニバーサル化に伴い、学力や学習動機の多様な学生が入学し、学生の読み書きに関する基礎的な力の低下が指摘されている(井下2008)。そこで、大学は正課教育において文章作成に関する授業実践を取り入れたり、4年間を通じて書く力を培うためのカリキュラム編成をしたりするなど、書く力を育成するための様々な取り組みを実施している(山田2012)。

とりわけ昨今では、ライティングセンター(以下センター)やライティングデスクを設け、正課外においてレポート作成を支援する取り組みが増えつつある(たとえば早稲田大学、国際基督教大学、立命館大学など)。センターでは、TA(Teaching Assistant)が学生の持ち込んだレポートに対して個別に相談対応を行っており、その効果が指摘されている(岩崎2013)。

その一方で、学生がどのような課題を抱え、また、どの時期にセンターを利用しているのかといった利用動向に関する研究は十分に蓄積されていない。しかし、学生の相談内容に関する傾向が明らかになれば、授業やセンターにおいてレポート指導をする際に活かすことができると考える。また、センターの利用時期と相談内容を把握することで、学生のタイムリーなニーズに応じた授業の展開、講習会の実施、TAの確保等が可能になる。ライティング支援施設の運営面ばかりではなく、

正課教育、図書館などの関連部署との連携を進める上でも有益だと考えられる。

そこで、本研究では、センターに寄せられた学生の相談内容、相談時期の傾向を分析し、ライティング指導、運営に関する手立てを提案することを目的とする。

2 研究方法

2.1 実践の概要

本研究では、大規模私立大学である関西大学のセンターを対象とする。関西大学は、2011年度にセンターを開設し、学部生を対象にTAが文章作成に関する相談を受けている(1回40分程度)。

センターには博士課程後期課程の院生20名がTAとして所属している(2013年10月現在)。センターでは、学生自身の気づきを促すライティング支援を基本理念としている。したがって、TAの役割は文章添削ではなく、自分で書いた文章が抱える問題点に自分自身で気づき、自らそれを書き直すことができるような力を育成することである。

学生は、相談をするにあたってWEBシステム(まなかんWEB)を活用して、オンライン予約を行う。その際、相談内容を記入し、事前に執筆したレポートがあればファイルの添付を行う(金田2012)。なお、予約を取らずに訪問することも可能である。

2.2 研究方法

本研究では、学生の相談内容、年間を通じた相談時期の傾向を把握するために、2012年秋学期と2013年春学期においてWEBシステムに登録されている学生の相談記録629件（春学期：458件、秋学期：171件）を分析データとして扱う。

相談内容に関しては、レポートの種類と相談内容に分けてその傾向を分析する。レポートの種類は、学生から寄せられた相談事項や科目情報を基に分類をした。相談内容に関しては、学生の相談内容をもとにコーディングを実施し、カテゴリとコードに分類した。相談時期に関しては、学年歴のどの時期にどのような科目に関する相談件数が多いのかを分析した。

これらのコーディング作業は筆者らで分担し行った。コーディング後、それぞれの担当箇所以外の確認を行い、分類の判断が異なる箇所は協議を経て、最終的な分類を決定した。

3 結果と考察

3.1 レポートの種類、相談内容の傾向

レポートの種類に関する分析結果を表1に示す。最も多かったのは論証型レポートである。自分なりの主張を考え、論理的にレポートを書くことの重要性が求められていることが示されたが、それに課題を抱える学生も多いことが明らかとなった。

次いで、授業で学んだ事柄や概念をまとめたり、説明したりする学習レポートである。学習レポートの相談は、169件のうち120件は初年次生であり、初年次生が授業で学んだ事柄や理念について述べ、紹介するようなレポート作成に課題を抱えている様子が指摘された。

このほか、レジュメ、スライドに関する相談もあり、多岐にわたるライティング相談が寄せられていることが示唆された。

こうした状況から、TAには相談内容に応じて多様な対応が求められることが分かった。そのため、センターでは、レポートの種類により学生が陥りやすい躓きや改善の手立てを共有することなど相談内容に応じた研修の機会やそれに伴った教材を開発することが必要になると考えられる。

続いて、レポートの相談傾向に関する分析結果を表2に示す。分析の結果、8つのカテゴリ、42のコードが生成された。

表1 レポートの種類

レポートの種類	相談件数
論証型レポート	220
学習レポート	169
卒業論文	81
レジュメ	53
読書レポート	25
志望理由書	21
スライド	15
実験・実証型レポート	4
小論文	3
外国語	3
その他	8
判別不能（未記入）	25

相談内容として最も多かったのは、執筆したレポートの全般的な確認を希望する学生である。同様に、レポートの基本的な書き方の相談も多かった。こうした傾向からは、多くの学生が、自分の書いたレポートの問題点を自ら焦点化できていない点、また、レポートとはどういったものであるのか、どのような書き方をすればいいのか、といったレポートそのものや基本的な書き方の理解が不足していることが明らかになった。

文章構成に関するコードも多かったが、そこでは序論・本論・結論といったレポートの型が成立しているのかを相談する学生が目立った。この他には、文献利用、研究方法、PC操作まで幅広い相談が寄せられていた。

以上のことから、相談を焦点化できていない学生に関しては、相談内容を事前に記入するWEBシステム上に、学生が躓きがちな相談事項とその説明を選択式で提示する（例：文章構成＝レポートの型になっているかどうか相談したい）ことで、学生が自らの相談内容を的確に判断することができるようなシステム上の工夫が考えられる。

また、相談が多い項目に関しては、センターが重点的に学生向けの講習会（例：レポートとは何か？レポートで求められる型や内容とは？など）を開講したり、TAによる指導技術を強化したりするための研修を行うなどして対応する必要がある。このほかにも、正課教育において授業を担当している教員に対して、学生の躓いている点を共有する機会を設けるなどして、正課と正課外の両方で連携を取りながら学生の書く力を育てていくための手立てを検討していくことの必要性が指摘された。文献の探し方などに関しては図書館との連携も考える必要がある。

表2 生成されたカテゴリ・コード

カテゴリ	コード	件数
構文 (259)	全題	175
	部分	10
	修正点	20
	基本的な書き方（執筆前）	54
執筆準備 (111)	基本的な書き方（執筆前）	89
	課題の理解	12
	発想	10
	漢字脱字	6
文章表現・表記 (84)	語法	16
	句読点	2
	文の長さ	2
	文字数の増減	11
	わかりやすさ	15
	言葉遣い（表記表現含む）	32
	レポートの型	50
文章構成 (176)	PRRP	14
	タイトル見出し	5
	題いと主要	11
	概論	13
	論理の構築	39
	まとめ方	28
	補足	2
	反論	1
	比較	3
	文脈の探し方	7
文献利用 (53)	文献の読み方	1
	文献の更新	1
	引用の方法	35
	文献一覧・注釈	9
	研究の方向性	4
研究方法 (11)	研究方法全般	4
	調査の方法	1
	分析の方法	2
レイアウト (14)	表紙	3
	目次	2
	囲み	7
PC操作 (4)	フォント	2
	ワープロ	2
	エクセル	1
その他 (4)	パワーポイント	1
	その他	4
未記入 (104)	未記入	104

3.2 学年歴における相談時期

2012年度秋学期および2013年度春学期における相談時期と授業に関する関係を図1に示す。センターでは、ガイダンス依頼や利用指示などを行うなど授業科目との連携を行っている。そこで、連携授業、それ以外の一般授業、卒業論文関係、その他というカテゴリにわけ、学年歴における相談件数を示した。その他は、志望理由書、手紙

などの授業とは異なる内容である。

秋学期は、卒業論文関係が多く、12月に受けては、62.9%の割合となっている。一方、春学期は、連携授業および一般授業関係の相談件数が9割以上を占めていることがわかる。また、春学期において把握可能な一般授業の科目数も36と分野や課題の内容が多岐に渡っていることが示された。

以上のことから、秋学期は卒業論文などの論文形式のライティング指導ができるTAの確保が重要であり、春学期は、多岐の形式におけるレポート課題に対応可能なTAの確保が必要になることがわかる。

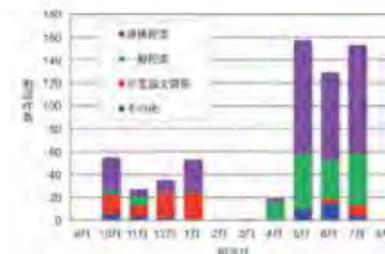


図1 学年歴における相談件数

4 今後の展望

今後は、レポートの種類、学年による課題の傾向を明らかにし、ライティング指導で取り上げる内容やその手立てについて改めて検討を行うことが求められる。

参考文献

- 井下手以子、「大学における書く力考える力」3-9、東信堂、2008
- 岩崎千晶、實淵洋嗣、「初年次教育においてライティングセンターを活用した学生のレポートとTAによる相談記録の分析」、日本教育工学会全国大会要綱集、219-250、2013
- 金田純平、本村康彦、林田定男、實淵洋次、「ライティングセンター運営支援システムの改善とその評価」、大学ICT推進協議会2012年度年次大会論文集、306-309、2012
- 佐藤島沙織、「自立した書き手を育てる：対話による書き直し」、国語科教育 66巻、11-8、2009
- 山田礼子、「学士課程教育の質保証へむけて学生調査と初年次教育から見てきたもの」、140-157、東信堂、2012

■添付資料

関西大学における高大連携の試み

—Kan-Dai ネットレス・セミナーの実践内容とその成果—

【発表者】 小林 至道 (関西大学・教育推進部)

1. 問題の所在

高大接続の問題は、初年次教育研究において重要な課題の一つとされている(杉谷 2011, 川嶋 2013 など)。山田によれば、高校から大学への円滑な移行を支援する初年次教育は、「学力低下に備える」だけでなく、「動機づけの欠如を補う」効果も期待されているなかで、「大学で初めて新入生のために行う教育」として位置づけられてきた(山田 2011, p. 39)。そこでは、大学での学習に不可欠な「レポートの書き方」、「論理的思考力や問題発見・解決能力」、「口頭での発表技法」などが重視されることが、これまでの調査で明らかになっている(山田 2009, 文部科学省 2009 など)。

その一方で、「論理力、問題発見、解決力といった目標に向けての教育方法として効果的だとされるディスカッションや口頭発表の機会あるいは、探求型レポートなどを書く機会は限られており、この点における高等教育と中等教育との接続性はあまり見られない(山田 2011, pp. 38-39)」と指摘されるとおり、大学で行う上記のような授業実践を前倒しして高校生を対象に行う事例やその成果の蓄積があまりに少ない、というのが現状である。

このような背景を踏まえて、本発表では、関西大学教育推進部¹が「アクティブ・ラーニングで大学生の学びを体験してみよう！」というテーマのもと、2013年度に実施したネットレス・セミナーにおける授業実践の内容とその成果を報告する。

¹ 教育推進部とは、関西大学の教育活動全体を支援する組織で、共通教養教育の推進や教育開発などを行っている。

2. ネットレス・セミナーの概要

(1) ネットレス・セミナーとは

ネットレス・セミナーは、2007年度より関西大学において実施されている高大連携の取り組みである。「一つ一つのテーマはネットレスのようにつながる」という企図が、セミナー名の由来となっている。

例年、会場である関西大学千里山キャンパスに最長でも1時間から1.5時間程度で来校できる距離内の高校へ、前年度の2月(今回の場合は2013年2月)頃から、郵送での案内文の配布を開始する。そして、各高校が参加希望者を取りまとめて受講申込書を返送することで、受講資格が得られることになる。

2013年度は、春学期(5~6月開講)に教育推進部とシステム理工学部が、秋学期(10~11月開講)には法学部とシステム理工学部がそれぞれにテーマを設定し、全6回の講義を行うことになっている。なお、本セミナーの案内については、関西大学HP上にも掲載されている。

(2) 参加者の内訳

2013年度の春学期に教育推進部が実施した同セミナーには、79名(大阪、京都、奈良、兵庫から12校)の高校生が参加した。参加者は全6回同じメンバーで、その内訳を学年別に見ると、1年生=42名、2年生=23名、3年生=14名、全体で見ると、男子=36名、女子=43名であった。

(3) 授業スケジュール

本実践の特徴の一つは、表1のとおり、全

6回の授業を分担制で行った点にある。全6回を通してつながりのある授業を提供するために、各回の授業案、レジュメ、スライドなどの資料は、担当者間で情報を共有した。

表1 授業スケジュール

回	日程	テーマ	担当者
1	5月25日	わかりやすい文章を書く	林田
2	6月1日	読解力を身につける	小林
3	6月8日	論理的に考える	中澤
4	6月15日	プレゼンテーション入門	岩崎
5	6月22日	ディスカッションでアイデアを練る	西浦
6	6月29日	ディベートで議論する力を身につける	中澤

【時間】毎週土曜日 14:40~16:10 (90分)

(4) 授業設計における狙い

①ライティングに関するテーマ設定

本実践は、津田塾大学との大学間GP、(考え、表現し、発信する力)を培うライティング/キャリア支援(2012年度採択文部科学省大学間連携共同教育推進事業)の一環としての取り組みでもあることから、そこでの研究活動と関連づけたテーマ設定となっている。

②アクティブ・ラーニング形式の授業

また、近年の大学教育におけるトレンドを鑑み、生徒が一方向的に講義を聞く形式ではなく、積極的に授業に参加し、主体的に学ぶことのできる授業形式としたことも、本実践の特徴の一つである。具体的には、毎回の授業において個人ワークあるいはグループワークの時間をふんだんに(約30分~60分)盛り込んだ授業設計とした。

このアクティブ・ラーニング形式の授業をより円滑に実現するために、毎回3~5名の学部生をラーニング・アシスタント(LA)として配置した。LAの主な業務は、授業前の打ち合わせ・準備、当日資料の配布、グループワークの補助、授業後の片付けなどである。

3. 分析課題

以上のような取り組みを通して、本発表で

は、次の2点を主な分析課題として設定する。

- (1) 高校生の受講の様子
- (2) 授業設計における狙いの効果検証

まず、(1)については、特に高校における通常の授業とは異なる点、すなわち、90分という授業時間、多様なテーマによるグループワーク、他校の生徒との交流といった点に着目し、実際の高校生の受講の様子を検討する。

次に、(2)については、①授業担当者を分担制とした点、②アクティブ・ラーニング形式の授業を行った点、実際の受講者である高校生および講義を行った教員それぞれにおいて、どのように受け止められたのかを分析課題とする。

分析は、本セミナーの各回におけるアンケート(出席票代わりに各生徒が回答)、および全6回が終了した後の受講者アンケート、そして各回の授業担当者が回答した事後アンケートの結果にもとづいて行う。なお、本発表要旨の提出時点(6月17日締切)では、本実施の回を含む現在進行形の試みであるため、上記の分析結果および考察については、当日の発表にて詳しく報告する予定である。

【参考文献】

- ・川嶋太津夫(2013)「高大接続と初年次教育」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』世界思想社、pp.43-54。
- ・文部科学省(2009)「大学における教育内容等の改革状況について」。
- ・杉谷祐美子編(2011)『大学の学び 教育内容と方法』玉川大学出版部。
- ・山田礼子(2009)「大学における初年次教育の展開—アメリカと日本」『Journal of Quality Education Vol. 2』国際教育学会、pp.157-174。
- ・山田礼子(2011)「大学からみた高校との接続 —教育接続の課題—」『高等教育研究第14集』日本高等教育学会、pp.23-46。



関西大学における高大連携の試み
 ~Kansai Uni ネットレス・セミナーの趣旨内容とその効果~

関西大学 教育推進部 特任助教
 小林 三道(こばやし のりみち)

2013年9月14日(土)
 於 金沢工業大学野々市キャンパス
 5号館301教室
 関西大学

本発表について

■目的
 関西大学における高大連携の試みに関して、2013年度に同大学教育推進部が行った実践内容とその成果(の一部)を報告すること。

■目次
 (1)取り組みの背景 (2)ネットレス・セミナーの概要
 (3)分析課題 (4)分析・事後アンケートの結果
 (5)まとめと今後の課題

分析

■分析対象:事後アンケート
 事後アンケートは、全6回(最終回:6月29日)を受講後、各高校においてアンケート回答の時間を設け(7月上旬)、受講者に回答してもらったもの(選択式:9項目、自由記述式:5項目)である。

■回収率:73.4% (2013年9月11日現在)
 受講者79名のうち58名が回答

Q. ネットレス・セミナーの難易度は? (N=58)

①思いついて意見が出なかった	2
②思いついて意見が出た	10
③思いつかなかった	37
④思いつくが思いつく程度でなかった	14
⑤思いついて意見が出た	0



取り組みの背景

■初年次教育において期待され重視されている点
 「論理的思考力」「問題発見・解決能力」
 「口頭での発表技法」(山田2009, 文科省2009など)

一初年次教育は、大学で初めて新入生のために行う教育として、「学力低下に備える」だけではなく、「動機づけの欠如を補う効果」も期待されている(山田2011)。

⇒初年次における教育だけでは限界がある

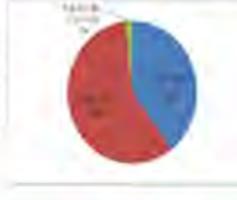
■高大接続の問題(杉谷2011, 山田2011, 川崎2013など)

「論理力、問題発見、解決力といった目標に向けての教育方法として効果的だとされるディスカッションや口頭発表の機会あるいは、探求型レポートなどを書く機会は限られており、この点における高等教育と中等教育との接続性はあまり見られない(山田2011, pp.38-39)」

⇒高校生を対象にした授業実践、事例研究の蓄積が必要

Q. グループワークについて、どう思ったか? (N=58)

①とても面白かった	22
②面白かった	34
③あまり面白くない	7
④全く面白くない	0



Q. 全6回を通した感想は? (自由記述)

■自由記述の回答(N=58)を分析した結果、次のような記述が目立った

- (1)グループワークの機会がためになった
- (2)他校の生徒との交流ができて良かった
- (3)アクティブ・ラーニング形式の授業が新鮮だった
- (4)毎回変わった先生が個性的で授業も分かりやすかった
- (5)人前で自分の意見を発表する機会が良い経験になった

ネットレス・セミナーの概要

■ネットレスセミナーとは?
 HP: (http://www.sanshu.ac.jp/koson/evnt/0mcs_semin.html)

・2007年度より、関西大学で実施されている高大連携の取り組み

・「一つ一つのテーマは、ネットレスのようにつながる」という企画が、セミナー名の由来

・教育推進部(本実践)は、「アクティブ・ラーニングで大学生の学びを体験してみよう」というテーマで、2013年度の春学期に初めて開講(※他に、法学部、理工系学部が開講している)

受講者について

- ・関西大学千里山キャンパス(大阪府吹田市)から約1時間30分圏内の高校に案内⇒学校ごとに申込参加
- ・大阪、京都、奈良、兵庫の12校から79名の参加者
- ・全6回同じメンバーが受講(4回以上出席で終了証)

■参加者(79名)の内訳

- ・1年生=42名 2年生=23名 3年生=14名
- ・男子=36名 女子=43名

Q. アクティブ・ラーニング形式の授業を受けて、ふだん高校で受けている時と比べ、授業に対する姿勢や考え方がどのように変化しましたか? (自由記述)

■自由記述(N=58)で多かった回答の例

- (1)授業に積極的に(能動的)に参加する(意見を述べる・質問する)ようになった
- (2)もっと自分の考えや意見を言える(持てる)ようになったと思った
- (3)自分が話す時、分かりやすく伝えたいと思った。また、そのためにどうすれば良いか考えるようになった

本発表のまとめ

■本実践の授業設計における狙い

- (1)全6回の授業を分担して行った点
- (2)ライティングに関わるテーマを設定した点
- (3)アクティブ・ラーニング形式を重視した点

⇒事後アンケートの結果からは、特に(3)について、「グループワークの機会がためになり、受講を経て、「授業に積極的に参加し、自分の意見を述べるようになった」という一定の成果が見られた。

本実践の授業設計における狙い

- (1)全6回の授業を分担して行った点
- (2)ライティングに関わるテーマを設定した点
- (3)アクティブ・ラーニング形式を重視した点

回	日時	テーマ	担当
1	5月25日	わかりやすい文章を書く	林田
2	6月1日	読解力を身につける	小林
3	6月8日	論理的に考える	小林
4	6月15日	プレゼンテーション入門	岩崎
5	6月22日	ディスカッションでアイデアを練る	西浦
6	6月29日	レポートで議論する力を身につける	小林

【時間】毎週土曜日 14:40~16:10(90分)

分析課題

- (1)高校生の受講の様子
- (2)授業設計における狙いの効果検証

⇒アクティブ・ラーニングやグループワークといった、ふだん高校で受けているものとは異なる授業形式に対して、高校生はどう感じ、何を思ったか?

今後の課題

■生徒が書き残した文章(成果物)の分析
 →自分(たち)の考えをどの程度、表現できているのか(回を重ねるごとにできるようになったか)

■授業をする側(教育推進部)としての反省点
 →ネットレスセミナーの企画(各回の授業テーマのつながり、運動性)を、もっと具現化した授業の形にして、次年度以降は行えるようにしたい

参考文献一覧

- ・川崎太津夫(2013)「高大接続と初年次教育」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』世界思想社, pp.43-54.
- ・文部科学省(2009)「大学における教育内容等の改革状況について」。
- ・杉谷美子(2011)『大学の学び 教育内容と方法』五川大学出版会。
- ・山田礼子(2009)「大学における初年次教育の展開—アメリカと日本」『Journal of Quality Education Vol.2』国際教育学会, pp.157-174.
- ・山田礼子(2011)「大学からみた高校との接続—教育接続の課題—」『高等教育研究』第14巻, 日本高等教育学会, pp.38-39.

3. 大学間連携共同教育推進事業 選定取組全国シンポジウム

日時	2014年2月18日(火) 10:30 ~ 16:30
場所	学術総合センター 一橋講堂
参加者	(関西大学) 小林至道、西浦真喜子、宮田将 (津田塾大学) 大原悦子

目的

本シンポジウムは、文部科学省の平成24年度大学間連携共同教育推進事業に選定された取組（地域連携25、分野連携24）が、進捗状況の報告や取組間での情報交換をするために企画されたものである。口頭形式とポスター形式の報告があり、分野連携として採択された本取組は、ポスター形式で報告を行った。取組の概要に加え、各大学のライティング支援の状況とシンポジウムの開催について発表し、他の取組関係者と活発な議論を交わした。報告に使用したポスターは次ページに添付する資料の通りである。

■ポスター発表資料

大学間連携共同教育推進事業
く考え、表現し、発信する力を培うライティング/キャリア支援

関西大学・津田塾大学

取組内容

- ライティングセンターを中心とした支援体制の再構築
- レポートフォリオシステムの開発
- 評価指標の確立
- カリキュラムとの連携
- 社会との連携

関西大学の取組状況

①ライティングラボ利用者数の増大
関西大学ライティングラボは、学生の就職活動に役立つスキルを身に付けるための支援として、2010年11月に開設された。従来のライティングラボとは異なり、ライティングラボは、ライティングラボの活用を、日々の授業やゼミ活動に組み込むことで、学生のライティングスキルを向上させることを目指している。2013年度は、ライティングラボの利用者数が前年度に比べて約20%増加した。

②文章力アップ講座の拡大
ライティングラボでは、学生の就職活動に役立つスキルを身に付けるための支援として、2010年11月に開設された。従来のライティングラボとは異なり、ライティングラボは、ライティングラボの活用を、日々の授業やゼミ活動に組み込むことで、学生のライティングスキルを向上させることを目指している。2013年度は、ライティングラボの利用者数が前年度に比べて約20%増加した。

③ステークホルダーとの連携
ライティングラボでは、学生の就職活動に役立つスキルを身に付けるための支援として、2010年11月に開設された。従来のライティングラボとは異なり、ライティングラボは、ライティングラボの活用を、日々の授業やゼミ活動に組み込むことで、学生のライティングスキルを向上させることを目指している。2013年度は、ライティングラボの利用者数が前年度に比べて約20%増加した。

シンポジウム1 2013.3.16(土)

ライティングセンター 日本での現状と課題
本日のライティングセンターの現状と課題を共有し、今後の発展に向けての議論を行った。参加者は、ライティングセンターの現状と課題を共有し、今後の発展に向けての議論を行った。

④幅広いライティングに対応
ライティングラボでは、学生の就職活動に役立つスキルを身に付けるための支援として、2010年11月に開設された。従来のライティングラボとは異なり、ライティングラボは、ライティングラボの活用を、日々の授業やゼミ活動に組み込むことで、学生のライティングスキルを向上させることを目指している。2013年度は、ライティングラボの利用者数が前年度に比べて約20%増加した。

⑤書く力を生かせる企画の実施
ライティングラボでは、学生の就職活動に役立つスキルを身に付けるための支援として、2010年11月に開設された。従来のライティングラボとは異なり、ライティングラボは、ライティングラボの活用を、日々の授業やゼミ活動に組み込むことで、学生のライティングスキルを向上させることを目指している。2013年度は、ライティングラボの利用者数が前年度に比べて約20%増加した。

津田塾大学の取組状況

①ライティングセンター利用者数の増大
津田塾大学ライティングセンターは、学生の就職活動に役立つスキルを身に付けるための支援として、2010年11月に開設された。従来のライティングラボとは異なり、ライティングラボは、ライティングラボの活用を、日々の授業やゼミ活動に組み込むことで、学生のライティングスキルを向上させることを目指している。2013年度は、ライティングラボの利用者数が前年度に比べて約20%増加した。

XI

取組に対する評価と
今後の課題

「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」は、取組2年目を終えようとしている。平成25年10月の事業開始以来、両大学は密接な連携体制を築き上げ、当初の計画に従ってさまざまな取組を実施してきたが、本取組の現段階での問題点を洗い出し、次年度以降の事業の改善につなげるために、本年度末に内部評価と外部評価を実施した。

この章では、今回実施した内部評価と外部評価の内容と、次年度以降の展開に向けての課題について報告する。

1. 内部評価
2. 外部評価
3. 次年度以降の展開に向けて

1. 内部評価

内部評価の趣旨および実施方法

関西大学と津田塾大学による大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」は、取組2年目を終えようとしている。平成24年10月の事業開始以来、両大学は密接な連携体制を築き上げ、当初の計画に従ってさまざまな取組を実施してきた。その取組は、いまだ途上であるが、一定の成果が見え始めてきたこの段階で内部評価と外部評価を実施して、現段階での問題点を洗い出し、次年度以降の事業の改善のための参考にすることにした。

内部評価の目的は、本取組の主体である関西大学および津田塾大学の実情をよく知る学内の関係者、および本取組の趣旨をよく理解し、さまざま連携協力を行っているステークホルダーの代表に、それぞれの視点と立場から提言を寄せてもらうことにある。以上のような趣旨から、下記の方々に内部評価をお願いすることにした。

- ①山本雄二氏（関西大学社会学部）
- ②来住伸子氏（津田塾大学情報科学科）
- ③トム・ガリー氏（東京大学大学院総合文化研究科・The Writing Centers Association of Japan 代表）

委員には、平成25年12月24日に本取組に関わる各種資料を送付し、資料にもとづいて、平成24年度および平成25年度における本取組の内容に関して評価をいただくとともに、具体的な取組に関して、問題点の指摘と改善に向けての提言をしていただいた。送付した資料は下記の通りである。

- (I) 2012（平成24）年度 報告書
 - (II) 2013（平成25）年度 取組報告（2013年4月～12月）
 - (III) 2013（平成25）年度 関西大学活動報告および資料
 - (IV) 2013（平成25）年度 津田塾大学活動報告および資料
 - (V) 2013（平成25）年度 教職員合同FD/SD研修会、TA合同研修会
 - (VI) 2013（平成25）年度 シンポジウム報告
- ※（参考資料）取組パンフレット

内部評価委員からの評価と提言（まとめ）

本取組の趣旨や具体的な取組項目については、おおむね肯定的な評価をいただけたのではないかと考えている。本取組の柱の一つであるeポートフォリオの開発については、山本氏より、有用なシステムを開発するためには、実効性ある利用場面を想定しながら開発を進める必要があるという指摘をいただいた。また、来住氏からは、完成時期や予定されるシステムの内容を明確にし、学内での調整を始める必要があるという指摘をいただいている。さらに、来住氏からは、評価指標についての期待の言葉もいただいている。これについても、同様にできるだけ早い公開と活用が必要であろう。

本取組の中核であるライティングセンターの取組については、カリキュラム連携や社会連携などに関して、一定の評価を得ることができた。しかし、山本・来住両氏からは、連携クラスの拡大、図書館との連携、アクティブラーニングの導入などにおいて、今後のさらなる発展への期待に加えて、ライティングのクラスの拡大や、図書館ガイダンスとの連携の模索などの具体的な改善策が寄せられている。

ライティング／キャリア支援の内実についても、さまざまな提言をいただいた。山本氏からは、ライティングセンター相談を単なる「きっかけ」で終わらせないための工夫の必要性、学内シンクタンク的な役割を果たし、存在意義を高める努力の必要性などの指摘を受けた。さらに、トム・ガリー氏からは、①従来の大学でのライティング教育と、社会での認識のずれの解消の必要性、②社会で必要なライティングスキルの特長と、ライティング／キャリア支援への応用の必要性という、本取組の根本理念に関わる重要な指摘をいただいている。

内部評価① 山本雄二氏

2014/01/29 山本雄二（関西大学社会学部）

「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」へのコメント

1. 取組の目的について

①②（p.11）ともに大学の教育目標として重要な点をあげてあり、妥当である。

2. 具体的な取組内容について

①～⑤（p.13-14）のいずれもプランとしてはよいが、eポートフォリオについては疑問がある。はやりだから項目としてあげざるをえないだろうが、どれほど実効性のある利用ができるのか具体的な利用場面を想定しながらシステムを開発しなければ、労力と費用を無駄に使うことになりかねない。多くの学生が継続的に利用することを前提に考えられているのだろうが、現状はそうっていないから。

3. 利用実績について

相談・講座ともに利用者はきわめて少数である。講座に至っては同一人が複数回受講していることを考えれば利用人数は全学で10人程度と思われる。ライティング相談にしても課題の締め切り間際の相談が多いことから、能力を高めるためではなく、「レポートを手伝ってもらおう」ために利用しているようすがうかがえる。きっかけとしてはそれでもよいが、「きっかけ」で終わらない工夫を考える必要がある。

4. 改善策について

- (1) 大学としてライティング教育に力を入れるのであれば、当面、スタディスキルのクラスのいくつかを、朝日新聞のクラス以外にも、ライティングのクラスとして複数置き換えるなどして、その補助的役割をラボが担うなどの方策も考えられてよいように思う。
- (2) 図書館のガイダンスは多くの学部の初年次クラスなどで授業の一環として利用されていることを考えれば、ライティングラボもそのような利用のされ方が考えられるのではないか。どのようなメニューならば、学部の初年次教育の一環を担えるのかについて検討してみたらどうか。

5. 研究活動について

学生のライティング能力のどこに問題があるのかのデータはラボの利用者のデータよりも、学部の大規模クラスなどの小レポートを分析すれば一目瞭然である。分析に利用するのに、どのようなテーマの下で、どのような指示を出して書いてもらえばよいかのモデルを示して、そうした問題点に対して教員はどのような指導をすればよいかについてもモデルを示すといったライティングに関する学内シンクタンク的な役割を果たせるようになればラボの存在意義も高まるのではないか。また、講座も分析からえられた問題点の改善をテーマにしたものであれば、学生の関心を惹きつけることになるのではないか。

内部評価②：来住伸子氏

2012年度(平成24年度)「文部科学省大学間連携共同教育推進事業」採択
 <考え、表現し、発信する力>を養うライティング・キャリア支援
 2013(平成25年度) 内部評価

2014年1月22日
 津田塾大学情報科学科
 来住伸子

上記取組に関する資料(平成24年度および平成25年4月から12月の期間の活動に関する資料)を拝見しました。5つの主な取組別にコメントいたします。

●ライティングセンターの支援体制の再構築

資料から、関西大学ライティングセンターおよび津田塾大学ライティングセンターで数多くの活動を実施していることがわかり、高く評価したいと思います。また、実際に利用している学生も見かけますので、ライティングセンターの利用者数は増加したのではないかと推測します。報告書には月別相談者数などが掲載されていますが、可能なものについては、年度ごとの利用者数など、年度ごとの変化がわかるデータも残したほうがわかりやすいのではと思います。

●Eポートフォリオシステムの開発

資料Ⅱに開発中と記されている以外は、情報が見当たりませんでした。いつごろの完成を目指しているか、どのような機能提供を予定しているかなどを明確にし、学内関係者に相談をそろそろ始めたほうがよいと思います。

●評価指標の確立

これも「試行版」を作成中とのことですので、次年度での公開を期待しています。

●授業カリキュラムとの連携

ライティングセンター提供科目は順調に実施されていると思います。既存科目との連携や、アクティブラーニングなどの新しい授業方法の導入については、今後を期待しています。

●社会との幅広い連携

資料Ⅱでは、関西大学の高大連携について明記されており、順調に進められていることがわかりました。津田塾大学のほうは、ライティングセンター報告に「高校生エッセイコンテスト」に関する資料が含まれていますが、全体報告においても何か触れたほうがよいと思います。

以上

内部評価③：トム・ガリー氏

関西大学・津田塾大学の取組み「<考え、表現し、発信する力>
 を培うライティング／キャリア支援」に対するコメント

まずは、本取組は発想と実施の両面で斬新的でたいへん優れていると評価します。特に、関西大学と津田塾大学という、所在地域も風土も違う大学がこのプロジェクトを通して活発的な関係を築いたので、今後はライティング教育とキャリア支援以外にも建設的な連携を期待できると思います。

ここでは平成26年度以降に向けてさらに進歩が望ましい二つの面について簡単にコメントします。それは「ライティング」という行為に関する根本的な理解と、社会との関係です。

大学など教育現場でライティングの指導を積極的に導入しようとするのと幾つかの矛盾に直面します。一つは、日常生活や実社会では人が文章を書くときに、その目的や対象読者は明白である場合が多いので、書き手は躊躇なく文章を書けることが多いのに対して、学校や大学でレポートや論文を書くときには、「(成績のため以外)なぜ書かなければならないのか」ということは学習者たちによく理解されていないことです。すなわち、教室という閉鎖的な環境ではちゃんとした目的のある文章を書くのに必要なコンテキストがありません。もう一つの矛盾は、大学ではどうしても各学生個人に成績を付けなければなりませんので個人で書かせることが普通ですが、会社や官公庁などの職場で、または科学など一部の学術分野では文章が共同で作成されることもよくあります。すなわち、「自分の考えを表現する」ことが重視されがちな従来のライティング教育は、社会でよく行う、団体や組織を代表するライティングとのずれがあります。これらの矛盾を解消するのは簡単ではありませんが、今後、今までの取組で検討してきたライティングの実用的な面に加えて「人間が文章を書くことは一体どういうことか」という、漠然ではありながら非常に重要な問題についても考えていただきたいと思います。

また、プラクティカルな面でも、大学を出て社会で活躍する若者たちは実際にどのようなライティングをするか、どのスキルが足りないかということは、大学の教育現場ではじゅうぶん反映されていません。津田塾大学が行っている「書くということと私」の講演会シリーズや新聞社への見学会などはたいへん有意的ですが、職場に必要なライティングスキルをさらに洗い出し、授業、ライティングセンター、そしてキャリア支援へのさらなる応用も必要です。

トム・ガリー (Tom Gally)

東京大学大学院総合文化研究科 教授
 2014.02.07

2. 外部評価

外部評価の趣旨および実施方法

内部評価の目的は、関西大学および津田塾大学の実情をよく知り、本取組の趣旨をよく理解する大学内部および取組内部の関係者から、それぞれの視点と立場にもとづいた具体的な提言を寄せてもらうことにあった。これに対して、外部評価の目的は二つある。一つは、本取組の中核にあるライティング支援に関して深い知識と経験を有する学識経験者に、日本の高等教育の問題をめぐるより幅広い文脈から、取組の理念を含めた取組全体に関して、問題点の指摘と改善に向けての提言をいただくことである。もう一つは、本取組の最終的な目的である、「考え、表現し、発信する力」を備えた人間の育成を、社会において有用な人材の育成につなげていくために必要な提言を、アカデミックな場面ではなく、大学でのキャリア教育や、企業での人材育成に関わる場で活躍されている方々からいただくことである。

以上のような趣旨から、下記の方々に外部評価を依頼することになった。

- ①佐渡島紗織氏（早稲田大学留学センター教授）
- ②二宮祐氏（岡山大学若手研究者キャリア支援センター講師）
- ③高瀬裕子氏（東京大学キャリアサポート室 特任専門職員・産業カウンセラー・キャリアコンサルタント）
- ④的場佳子氏（伊藤忠商事株式会社 関西業務室）

委員には、平成25年12月24日に本取組に関わる各種資料を送付するとともに（資料の内容は、内部評価の資料と同一）、2月17日に、内部評価委員のコメントを送付し、その内容を踏まえたうえで、評価をいただいた。

外部評価委員からの評価と提言（まとめ）

本取組の意義については、肯定的に評価していただけたと考えている。特に、佐渡島氏、高瀬氏、的場氏には、津田塾大学と関西大学という、さまざまな点で異なる個性を持つ大学が連携していくことの意義・効果を高く評価していただいた。また、具体的な取組に関しても、評価指標の作成（佐渡島氏・二宮氏）海外視察・シンポジウムなどの企画（佐渡島氏）TA 合同研修（高瀬氏）など、高い評価を受けることができた。

他方、具体的な改善点についても、さまざまなご指摘をいただいている。以下、具体的な論点を整理したい。

（ライティング／キャリア支援に関して）

- ・アカデミックなライティング支援と、キャリアに関わるライティング支援の共通点と相違点を再整理し、ベクトルの異なる支援の統合を図るとともに、指導者養成の体制作りを進めるべきである（佐渡島氏）
- ・実際に社会に出たときにどのような場面でライティングの知識とスキルが役立つのか、ケースを想定した指導を行うべきである（会社で必要な文書を実際書いて、企業の担当者に意見をもらうなど）（的場氏）
- ・キャリア支援との関連をさらに強めたライティング支援を展開するべきである（二宮氏）
- ・利用学生の増大のために、図書館・コモンズ・オフィスアワー等とのさらなる連携を図るとともに、支援の必要な学生に有効に働きかけられる工夫をするべきである（二宮氏）
- ・アメリカのいいところを取り入れつつも、日本の現場に即した有効性のある運用を行うべきである（高瀬氏）

（eポートフォリオに関して）

- ・予算をかけて新たにシステム開発するには、利用者数をめぐる目標値の設定が低く、漠然としている。より多くの学生に利用してもらう工夫が必要である（高瀬氏）
- ・海外ですでに使われているものを調査し、開発の参考にすべきである（的場氏）

（評価指標に関して）

- ・取組が後付けになっているので、目標を共有し、早めの開発を行うべきである（高瀬氏）
- ・支援目標を見据えた上で、何を評価するのかを明確にすべきである。また、客観的な指標にするか、主観的なものにするかを検討すべきである（佐渡島氏）

外部評価①：佐渡島紗織氏

平成24年度「文部科学省大学間連携協同教育推進事業」採択 「<考え、表現し、発信する力>を養うライティング・キャリア支援 外部評価

2014年2月26日
早稲田大学 留学センター
佐渡島紗織

1. 全体の目的

少人数で女性教育を柱とする津田塾大学と、大規模で総合的な関西大学とが連携し、ライティング教育で「<考え、表現し、発信する力>を養う」という構想は、たいへんに意義の深いことだと評価する。双方がそれぞれの良さを提案し、補完的に実践を改良していくことができる体制を構築した事業となっている。

2. ライティング支援体制

両大学におけるライティング支援は、個別の特徴を有してきたが、「連携」の本来の意味をより特定する必要があるように感じる。津田塾大学は、これまでキャリア支援を柱に据えた実践を行ってきた。関西大学は、文学部でスタートした時点では卒業論文指導が柱であった。これら二つの柱は、文章作成の目的という観点から見ると、共通する点と異なる点とがあり、整理をしていくとよいように感じる。

津田塾大学が実績を積んできたキャリア支援と、関西大学が実績を積んできた卒論指導とは、「自己を深める」という観点で一致している。学生たちは、学生時代に、様々な授業を受け、多種の経験をし、自分が何に興味を持ち、社会とどのように接点を持ち、将来はどのように生きたいかという展望を築く。書くことによって自分を見つめる、自分を探すという意味において両大学の支援目標は一致している。

一方で、就職活動に向けて作成する文章と学術的な文章とは、文章作成の目的が異なる。前者は、主に「自己をアピールするための文章」（説得）であり、後者は主に「学術的発見を報告するための文章」（結果を報告）である。いわばベクトルの異なる文章作成を支援体制においてどのように統合していくことが有効であるのか、今一度、検討する必要があるだろう。文章を見る観点を、文章作成の目的に応じて使い分けできる指導者を養成する体制が求められる。

3. eポートフォリオの開発

上述課題と併せ、支援目標を明確にさせることによって評価観点をよりはっきりと特定できるようにするのはどうか。

4. 評価指標の策定

文章評価基準の開発に際して調査を実施している点が高い評価できる。レポートや論文のできばえを測定するのか、キャリアを志向するために自己を深く見つめさせる文章を評価するのか。この課題も支援目標を見据えて行う必要がある。より客観的な指標を作成するのか、各個人が主観的に使えるものを作成するのかも検討課題であろう。実証的なデータを基に、今後、評価基準が作成されることが楽しみである。

5. 海外視察、シンポジウム発表

広く海外の事例を調査したり、シンポジウムで海外の専門家を招聘したりし、ライティング教育を広く捉える企画が優れていた。ライティング教育に直接携わらない教員に対する啓蒙の機会にもなったものと思われる。

外部評価②：二宮祐氏

2014年(平成26年)2月25日

2012年度(平成24年度)採択 文部科学省大学間連携共同教育推進事業
 「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援」
 平成25年度 外部評価コメント

二宮 祐

岡山大学 若手研究者キャリア支援センター講師
 (旧所属 一橋大学 大学教育研究開発センター講師)

両大学ともライティングに関する指導の内容や方法については適切なものであって、高く評価できると思量いたします。とりわけ、ライティング力やそれに関連する力量を測るためのルーブリックの作成については大いに期待するところです。学生の悩みのひとつは、たとえば、レポート執筆の到達目標や、そのための道筋—執筆のための準備、書き方、推敲の方法などがわかりにくいことであるでしょうから、その点での貢献が見込まれると存じます。

一方で、さらなる改善の検討を望むことがふたつあります。第一に、キャリア支援との関連をさらに強めることです。キャリアという概念は職業生活のみを意味するわけではありません。就職活動のES(エントリーシート)添削、社会人によるライティングに関連する講演も極めて重要ではありますが、それらにのみ支援の対象を閉じ込めてしまうと本プログラムの真価を必ずしも十分には発揮できないようにみえます。職業生活についての支援と同時に、市民としてのライティングの意義—たとえば、政治的なことに関するインターネット上での発言—や、余暇としてのその意義—たとえば、学生が好む「ライトノベル」の特徴の理解—など、より幅広い視野からキャリアという概念を理解したうえで支援を展開することを望みます。

第二に、より多くの学生が参加できるように工夫を凝らすことです。必修の専門科目の講義や初年次教育科目の講義において、レポートの執筆の過程で締め切り直前に自分ひとりでパソコンに向かい合うというのではなく、ライティングセンターを含めて図書館、commons、オフィスアワーなど学内外の複数の資源を計画的に活用することが当然であるというような指導が行われることを望みます。また、指導の必要性が特に高いと思われる学生に対する働きかけの工夫についても検討をお願いしたいです。大学の講義についていくことへ不安を感じる学生、高校までの国語や英語を苦手としていたためにライティングを必要とする講義を避けようとする学生、そもそも大学における学修に興味関心を持つことができない学生などに対して、現代の学生固有の「意味世界」を理解しているような学内の各部署と積極的に連携してライティングセンターの活用を誘いかけてほしいところがございます。

外部評価③：高瀬裕子氏

関西大学・津田塾大学の取り組み「〈考え、表現し、発信する力〉を培う
 ライティング/キャリア支援」に対する外部評価コメント

共学で約3万人の学生を擁する関西大学と、女子大でその学生数が10/1のサイズである津田塾大学のコラボレーションということで、本プロジェクトを大変新鮮に受け止めました。お互いの大学の違いから学べる、貴重な機会だと思います。

日本人は概して、国際社会での自己表現力が不足しています。残念ながら初等教育において、その力を伸ばす機会は少ないものです。また日本語が独自言語であるため、他国と交わることが少ない日常生活を送る中で、なかなか自分自身について〈考え、表現し、発信する〉機会が少ない状況です。アカデミックな学校教育の場で、まずこの現状を認識し、学生に意識して学ぶ機会を提供することは大変貴重だと考えています。ただ既に各所でご指摘があるように、ライティング教育もキャリア支援(教育)も大元の考え方はアメリカから来ています。アメリカ式のいいところを取り入れつつも、日本の現場に即した、有効性のある運用を目指すことが大切です。また、アカデミックライティングと、就職のES等に求められている素養やスキルは、必ずしも同じものではないでしょう。それぞれの目的や時勢に合った情報提供や支援が必要だと思います。

この総論に立っただけで、2013年度の取組報告を拝見いたしました。8月3日のシンポジウムにも参加させていただきました。TAの合同研修も着実に進められている様子がわかり、全体として今後の進捗を多に期待しています。

既にスタートしている諸活動は素晴らしいと思いますが、本推進事業の連携取組と目標の達成(冊子P.11)に関して、若干違和感がありましたので、以下に二点コメントさせていただきます。

一点目は、eポートフォリオの有効性と目標値の設定です。本推進事業の達成目標として、ライティングセンターの延べ利用者数を全学生数の15%までに増加、とありますが、新しく予算をかけてシステムを構築する際の目標としては漠然としすぎている(もしくは少なすぎる)ように思います。対象学生を明確にして一部の学部専攻の学生には全て使うこととするとか、ナレッジマネジメントに活用するとか、柔軟な発想で学生に普及させることを考えてはいかがでしょうか。また、現在システムを持っている他校の実施調査などをされることも有効と思います。

二点目は、評価指標が後付けになっている点です。推進事業をスタートするにあたっては、早期にそのゴールを関係者で共有し、各マイルストーンでの達成度を明確にしていく必要があると思います。どのようなイメージで運用するかという骨子だけでも、関係者の間で早めに共有されることをご検討いただくと良いと思います。

2014年2月28日 高瀬 裕子

(東京大学キャリアサポート室 特任専門職員・産業カウンセラー・キャリアコンサルタント)

外部評価④：的場佳子氏

「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援」へのコメント

2013年3月2日
伊藤忠商事（株）関西業務室
的場 佳子

トム・ガリー教授が言及しておられる通り、関西大学と津田塾大学という言葉もカルチャーも違う地域に位置する大学が協働して、本プロジェクトに取り組んでおられる事は、大変有意義だと思います。経済界においても、異業種交流の中から新しいものが沢山生まれており、国内・外でのオープンイノベーションが今後ますます重要になると考えます。

私は、入社当時、伊藤忠商事で営業として繊維貿易を担当しておりました、海外客先との英語でのやり取りが日々のライティングの中心業務でした。出来るだけ簡潔に、平易な語彙と文法で、誤解を招かない書きぶりが要求されました。その後、外務省に出向し、日本語を基礎から叩き込まれました。日本語では、往々にして、主語がない不明瞭な文章を書くことがあります。公式な文書において、それは致命傷です。文章を見直す際に、英語に翻訳しつつチェックをするように教えられました。また、英語も、私が営業時代に使用していたような基礎的なものではなく、語彙の豊富な品格のある英語を習いました。現在は、財界活動を担当しており、政策提言や種報告書の作成が主な業務です。外務省での経験が大変に役だっています。

ライティングセンター・ラボが卒論を書くための相談の場に終わらないよう、実際に社会に出た時にどのような場面でライティングの知識・スキルが役立つか、ケースを想定した指導をするというのではないのでしょうか。例えば、客先へのレター、社内・外への報告書、新聞記事、アニュアルレポートなどを実際を書いて、TAのみならず、企業の担当者に意見をもらうといった取り組みができれば、より実用性が高まると考えます。

e-ポートフォリオについては、実際に体験してみないことには評価しがたく、海外にすでに英語版の見本のようなものがあれば、それをたたき台として改良を加え、日本バージョンに仕上げていくというやり方も検討してはいかがでしょうか。

最後になりましたが、画期的な本プロジェクトの成功を期待しております。

3. 次年度以降の展開に向けて

本取組は、平成24年10月の事業開始以来、当初の計画に沿って着実に事業を展開してきた。その事業は、おおむね順調に展開しており、両大学の取組実績も、ライティング支援を中心に、着実な成果を見せつつある。しかし、その反面、これからの取組をより効果的に進めていくために、改善の余地のある部分も次第に見えてきた。両大学のスタッフは、そのような改善点について日々検討し、事業の改善を図っているが、第三者の目からみたとき、見逃されている点があることも事実である。

今回の内部評価、外部評価において、計7名の委員の方々にさまざまな意見をお寄せいただくことにより、本取組のより一層の発展のために、われわれのなすべき課題が、より一層明確に見えてきた。具体的な意見については、評価のまとめとして論点を整理したが、最後に評価を全体として振り返り、今後の展開に向けて、われわれが留意すべき点をまとめておきたい。

①本取組の目的・理念について

本取組の目的とするライティング/キャリア支援という理念の意義、そして、関西大学と津田塾大学がそれぞれの個性を生かしながら効果的な連携を実施していくという連携取組の意義については、おおむね高く評価していただけたと考えている。本連携取組の基本コンセプトが間違っただけではなく、その実現に向けて事業を推進していくことに大きな意味があることを再確認することができた。

さらに、ライティング/キャリア支援をより一層有効なものにしていくためのさまざまな提言もいただいた。とりわけ、アカデミックなライティング支援とキャリアに関わるライティング支援の関係性を再検討し、より有効な支援に向けた体制の改善を図るべきという意見は謙虚に受け止めるべきであろう。本取組では、アカデミックライティングと、社会で発揮される〈考え、表現し、発信する力〉の連続性を強調している。たしかに、この二つの力は密接に関係しており、大学でのアカデミックなライティング支援は、社会に出てからも有効な力となって発揮されるという確信は変わらないが、そのためには、アカデミックな支援の内実を再検討し、実社会でのライティングとのすりあわせを行う必要がある。もちろん、この点も当初から視野に入れていた事項であったが、われわれはここで、その必要性を再認識しておく必要があるだろう。

②具体的な取組について

本取組の具体的な事業については、数多くの有用な提言を受けることができた。いずれも、重要な指摘であると認識している。ここでは、複数の委員から指摘を受けた点について、今後の展開の方針も含めてまとめておこう。

まず、最も重要な課題は、ライティングセンターによるライティング/キャリア支援の一層の充実である。これについては、多くの部分で着実に成果を挙げており、今後もさらに発展していくことが見込まれる。とりわけ、指摘を受けた、大学における多方面での連携は、ライティングセンターの支援をさらに効果的にしていくために不可欠である。われわれは、次年度以降、授業（および授業担当教員）との連携の拡大はもとより、図書館やコモンズとのさらなる有効な連携を模索し、利用者層の一層の拡大を図っていきたい。

次に重要な課題は、支援をサポートするツール類の充実であろう。e-ポートフォリオについては、現在「e-ポートフォリオ開発部会」が中心となり、ユーザの視点に立った使いやすいシステムの開発を進めているが、提言に従い、出来るだけ早い時期の完成と活用を目指すとともに、一層の情報公開を図っていきたい。

同様に、評価指標についても「評価指標開発部会」を中心に、できるだけ早い時期に試行版を策定し、ライティング支援や授業での活用を図っていく必要がある。ただ、本取組の具体的な理念と目的に即し、支援のために有効に活用しうる指標を作るためには、じっくりと腰をすえた作業と、その効果の検証・改善が必要なことも事実である。性急に陥ることなく、着実に作業を進めていきたい。

以上、本取組の今後の展開に向けて留意すべき点を簡潔にまとめた。今後は、これらの点に留意しつつ、取組のさらなる発展のために努力を続けていきたい。